Z32-B88

金の星

二月号

第六巻　第二號

国立国会
8. 3. 26
図書館

大正十三年一月八日印刷納本　大正十三年二月一日發行

七十七年一月六日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）

滋強飲料 カルピス 漫畫

脚本「新花咲爺」の話

一平畫伯廣告漫畫試案

一、春もやゝ蒼色帶ぶ二月のある日曜カルピス子は梅見に出かけたい目的の梅園へ咲き花の様子を訪ねると園主のおやぢまだ蕾程早うござる。

二、それでも折角来たものだ。二人は園の樹下に憩ひ、一瓶の代りに取り出すものは文明のカルピス園主に勧め進ぜる。

三、園主のおやぢ「ヤレ……こりゃ驚いたけ梅が咲いた不思議！」カル雄「うん、カルピスの湯紙に當つて咲いたのだ。なにしろ精氣をつける紙幣だからな」

四、この發見から園主のおやぢ早速園中の梅に悉くカルピスを撒きかける。江北の園にして江南の梅よりも早き事二十日十五日。

東京 麻布区霞町一番地 ■ 麻布士族屋敷 ■ 東京 ■ 本社 ■ 試験所 ■ 出張所 ■ 倉庫 ■ 販売店 ■ 製品店 ■ 試験所 ■ 元 カルピス製造株式會社

特選小曲詩篇に蕗谷虹兒先生が特に入念の挿畫を描かれたる一名小畫集とも云ふ事を得べき小曲集であります。作者は八十、雨情、先生外各詩人の傑作のみを選びたる上、用紙はフランス製特ラフ紙を使ひ表紙は又極めて美しき三色刷の高雅なる裝禎である。（小曲、又は畫を描がんとする人に蔦む良書）

小曲 画集 夢の跡

大震大火中不思議にも只一書燒失を免れたる本書は、神か諸君に頒たしめるものとも思はれて心好し。

定價 金四十五錢
送料 金六十錢（郵券一割增十下の切手に願上候）

▽吾等は九死の中に一命を得て再生の歡嬉と意氣を本二書に傾注す……

散文 詩集 噫東京

火事泥的のキワ物と同一視せず如何に内容の傑れたると價格の廉なるを見られよ

四六判フランス本綴挿畫本文二百頁
實價 金九十五錢
送料 金十錢

野口雨情 生田春月 西條八十 水谷まさる 吉屋信子 下田惟直 蕗谷虹兒 人見東明 竹久夢二 横山青蛾 川路柳虹 濱名東一郎 共著

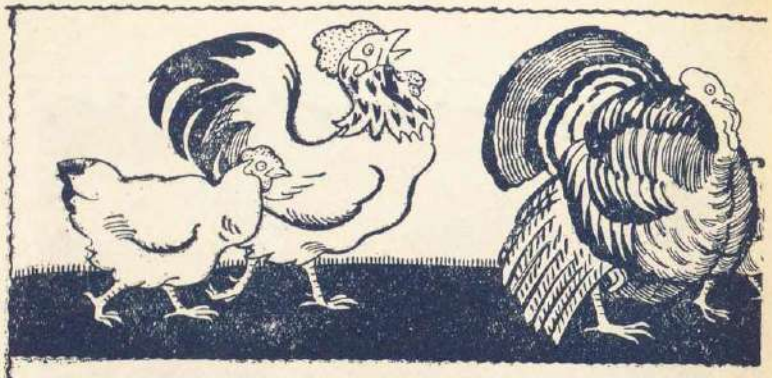
あゝ東京の凄絶悲極は語るも聞くも涙の種ならざるは有りますまい。本書は有名なる各詩人が吾が帝都の慘禍を長く後世に傳へんが爲に涙をふるひつ筆を取られたる實に他に求め得ざる空前絶後の好著書で有ります。本書一冊の價値は正に百億の富と幾十萬の生靈とを失ひて得たる、血と涙の結晶とも云ふ可く、心ある男女學生間に忽ち好評を博せるも當前である。是非一書を机上に備へ朝夕の清く美しき胸に抱かれんことを乞ふ。

東京 麻布区霞町十番地 ■ 振替口座 東京四七九〇番 ■ 交蘭社發行

目次

（第六卷・第二號）

獵やぶれかぶれ（表紙・原寸版 口繪・三色版）……寺内萬治郎
十と七つ（童謡）……野口雨情
同作曲……小松耕輔
少年劍客鬼歡（童話）……菊池寛
幸運太郎（漫畫）……水島爾保布
どちらが偉いか（日本歴史童話）……沖野岩三郎
七勇士最後の卷（童話）……畑耕一
牢破り（長篇）……西條八十
日に吠える豚（童話）……武井武雄
化石島の話（童話）……中島孤島
神様の勳章（童話）……香島俊吉
敵の前て稲刈（日本歴史童話）……植松壽樹



木がらし（童謡）……蓬崎烏蝶
漁夫と悪魔（長篇）……秋庭俊彦
利王丸（日本歴史童話劇）……鈴木重正
磁石島へ行つた坊さんの話……齋藤佐次郎
少年筆工（童話）……西川勉
額を打れた西行法師（日本歴史童話）……霜田史光
二つ岩國三郎（諸國奇談）……中川杏果
幽靈船（アラビヤ奇譚）……森川一朗
細い竹笛（童話）……水谷まさる
鎭西八郎（日本歴史童話）……小島政二郎
落栗（童謡）……若山牧水
お山の子（童謡）……野口雨情
をかしい思出（幼年詩）……若山牧水
にはとり（童謡）……齋藤佐次郎選

やぶれかぶれ

（口繪解説）

僕は躍り上つて、そこにあつた棍棒を取つた。そしてそれを頭の上にふり廻しながら、『さあ、どうならうとも、貴樣の身體はこの水曜日には出られないやうにして吳れるぞ。』と、叫んだ。すると相手の男も負けずに僕に飛びかゝらうとしたので、世話人があわてゝとめにかゝつた。

（「半破り」を御寛下さい）

美しい兒童圖書館叢書出づ

第一篇

童話 星の國

赤坂清七著　齋田たかし裝幀（忽再版）

四六版二百七十頁
定價二圓廿錢
送料八錢

目次

獸の冬ごもり、犬になつた狼、友吉の出世、あひるのてがら、水こりと鬼、蛙のごけらい外三十三篇

第二篇

童話 月張月

吉田助治著　武井武夫挿畫（忽再版）

四六版三百頁
定價二圓廿錢
送料九錢

あの名高い源爲朝の生ひ立ち一代記です。小供さん達ばかりでなく誰が讀んでも實にユカイな物語りです。

第三篇

童話 飴チヨコの天使

小川未明著　齋田たかし裝幀（最新刊）

四六版三百五十頁
定價二圓
送料八錢

目次

アメチヨコの天使　幸福に暮した二人　阿呆鳥の鳴く日、北へ踏ん鳥・お姫樣と乞食の女、外二十篇

會員募集

小原くによし主幹

月刊雜誌 イデア お正月號

日本一の廉い雜誌が出ました。

▲教育●哲學●藝術●宗教に關する批判と紹介▼
▲定價一冊五錢●一年分五十錢（但郵稅共）▼
▲毎月廿日發行●發行數一萬五千部▼

實費提供　毎號四六版三十頁

發行所　東京市牛込區山伏町一四　イデア書院　振替口座東京一五四二三

天下の少年は何故に爭ふて

大日本國民中學會に入會する乎

- 講義が新いから
- 會費が廉いから
- 指導が良いから
- 學制が正いから
- 基礎が固いから
- 講師が善いから
- 卒業が早いから
- 成功が慥だから

會長 尾崎行雄

學監 文學博士 遠藤隆吉
理學博士 山内繁雄

顧問 新渡戸博士 井上博士 三宅博士 岡田前文部大臣 浮田博士

新學期開講入會の絶好機

講義錄見本つき
規則書無料進呈

一人前の男となるには

どうしても中等教育を受けなければいけない。中等教育の學力のない者はどうしても生存競爭の勝利者たることは六ケしい。併し家庭の事情で中學に入れぬ者も決して失望するには及ばない。中學校に行かずに中學卒業同樣の學問をする方法がチヤンと出來てゐる。創立以來二十二年の古い經驗のある講義錄で有名な大日本國民中學會の通信教授法がそれだ。

◉大震火災の爲め本會事務所焼失の厄に逢ふし直に復興に着手し講義錄全部完成せり。

東京駿河臺（お茶の水電車通り）
大日本國民中學會
電話神田三〇〇二 神田三〇〇三
振替名古屋四二八〇番
東京振替貯金課焼失に付當分名古屋四二八〇番を使用す

◆驚くべきよい成績を得たい人は◆

東京高等師範教授附屬小學校主事 佐々木秀一先生指導
日本教育研究會編纂

小學自習書

◇◇ 全科正解 ◇◇

を學ぶに限ります。

◇修身、讀方、綴方、算術、地理、歴史、理科など各科の生きた豫習や復習の手引は是です。

◇綺麗な挿繪や教科書にない面白い話や試驗問題など澤山に載つてゐます。

明日と云はずに、今すぐに、お求めなさい、賣り切れぬ間に。

尋三 定價金三十錢
尋四 定價金三十五錢
尋五 定價金四十五錢
尋六 定價金四十五錢
高一 定價金四十五錢
高二 定價金四十五錢

◇全國々定教科書販賣店に有り◇

發賣所 東京神田 東京堂書店 振替東京二七〇

雨情選作叢書

各大家の曲入・定價各冊金十五錢・送料各冊金二錢

本居長世先生作曲
◇帝都復興の歌（童謠）
（帝都復興の歌・アンデルセン）

中山晋平先生作曲
◇ちよいと出たお月（民謠）
（ちよいと出たお月・かなしい海）

大和田愛羅先生作曲
◇雀遊び（遊技唄）
（雀遊び・南風北風）

佐藤千夜子女史作曲
◇野の唄・海の唄（子守唄）
（野の唄・海の唄）

藤井清水先生作曲
◇矢車草の咲く村（民謠）
（矢車草の咲く村・機織り虫）

雨情選作叢書は野口雨情先生作の童謠民謠中より素朴・優麗の作品を撰み、作曲大家の作曲を付して連續出版いたします。童謠と民謠の新しいパンフレットです。

帝都復興の歌

本譜略　入・定價金五錢・送料金二錢

東京女子高等師範學校
教諭金子彦二郎先生作歌
東京青山師範學校
教諭福井直秋先生作曲
東京府教育會編纂

日本の帝都東京は武藏野の昔のすがたとなつてしまひました。これを更に、よい大きな東京に復興させるには、全國民の努力と意氣とが大切なのです。この歌には、復興の努力の大切なことがうたはれてあります。特に小學校の唱歌の教材としてお薦めいたします。

發行所　東京神田錦町一ノ一　振替東京五二三三九　米本書店

□あなたの天分を
滿足させるものは□

王様水彩繪具
王様クレイヨン
キングクレイヨン

右三品とも全國師範學校小學校の先生方が御試驗の結果、御選定に成つた優良品ですから御安心して御使用下さい

全國著名文具店　書籍店にあり

製造元　王様印　合名會社　東京クレイヨン商會

東京市外西巢鴨町堀之内五番地　振替貯金口座東京五七九三九番

日本歴史童話號

金の星

二月號

蕗谷虹兒先生作「繪ハガキ」

震災畫報!! 第三第四輯出版さる!!!

美しい彩色版を利用した虹兒氏獨特の畫風は、夢の如く、幻の如く、見る人々の胸に迫つて、あの恐怖の日を、美しい一場の想ひ出としてしまふ。

(容内)

○第三輯○ ○建設○——冥夜にさゆる復興の聲○ ○災地なさまよふ○——小鳥もねぐらを焼かれたか○

○第四輯○ ○魔神の呪ひ○——天使の救ひ○ ○傷ぼ癒ゆ○——微笑みて立つ○

原色版 特價 四枚一組 金二十錢

○第一輯○第二輯○ 世に出づるや、大好評のうちに賣れゆき飛ぶが如く、また〻くうちに、再版、三版、四版と刷を重ね、繪葉書出版界の新記錄をつくりたり。今もなほ賣れ行き急流の如し。

銅凸版二色刷 特價 四枚一組 金二十錢

蕗谷虹兒先生作繪ハガキ「**トランプ**」「**北へ飛ぶ雲**」出版す!!

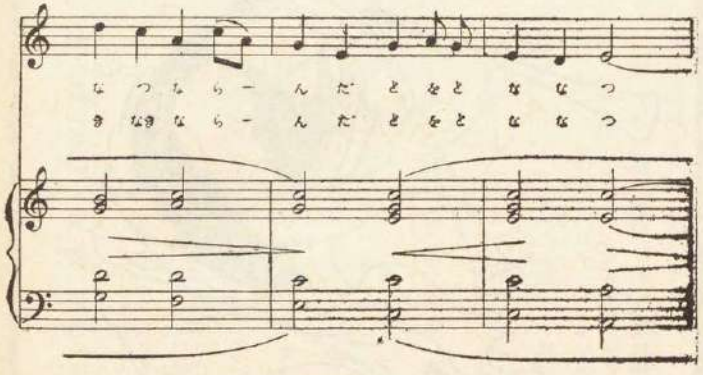
トランプ は、虹兒氏獨特の少女畫を、四枚〻繪ハガキへ、それぞれに、トランプの形式で現代化せるもの……○

北へ飛ぶ雲 は、「雲の唄」「淡雪」「風」「春近く」の四枚を、可愛いらしい少女の姿をかりて、表現せるもの……○

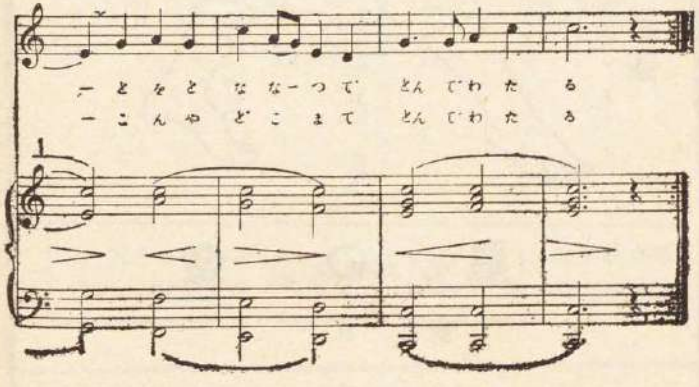
原色版四度刷 定價 四枚一組 金二十五錢

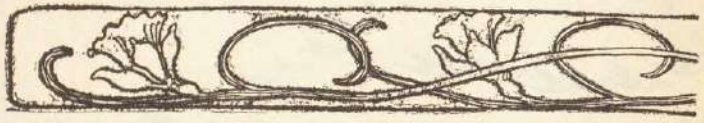
東京神田區神保町六通 上方屋平和堂 振替東京七五一二 電話神田三〇三四

なつならーんだとをとななつ
きなきならーんだとをとななつ



ーとをとななーつで とんでわたる
ーこんゆどこまで とんでわたる



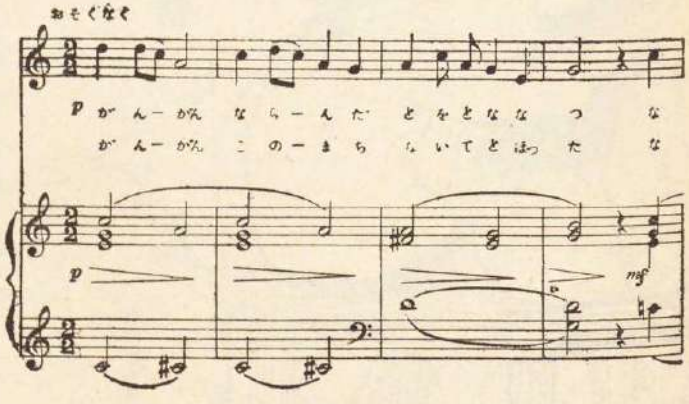


十と七つ

小松耕輔作曲

おそくなく

p がんーがん ならーんだ とをとなな つ な
がんーがん このーまち ないてとぼっ た な

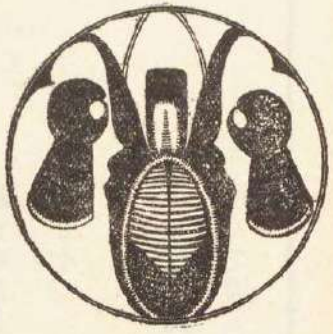


十と七つ

野口雨情

雁々　ならんだ
十と七つ
七つならんだ
十と七つ
十と七つで

飛んで渡る
雁々　この町
啼いて通つた
啼き啼きならんだ
十と七つ
今夜どこまで
飛んで渡る



少年劍客鬼歡（つゞき）

菊池寛

一

三番町の齋藤の道場では、父の齋藤彌九郎は、こんな長州の若武士が道場破りに來ようなどとは、夢にも思ひませんから、半月も前から、伊豆の代官江川太郎左衞門（この人も偉い人で御維新前に、西洋の學問をして大砲をこさへた人です）の所へ行つてゐます。その上、腕の優れた門弟は、みんな新太郎と一緒に行つゐる譯です。そんなら留守は、誰がしてゐるかと云ふと、彌九郎の三男で今年十七になつたばかりの歡之介と云ふ少年です。留守の門弟にも、強い人はあまり居ません。

『ものもう！　ものもう！』

玄關で割れるやうな聲がしたので、門弟が出て見ると、道場着に袴を着け銘々竹刀を抱へた鬼のやうな男が、十四五人ばかりズラリと並んでゐるのです。

『拙者どもは長州毛利藩のものでござる。齋藤先生にお手合せがねがひたく、はる〳〵出府したものでござる。お取次ぎ下さい！』

挨拶からが、もう喧嘩ごしです。

『折角のお出でゝはござりますが、大先生は先月から伊豆の方へ御旅行でござる。また若先生は、お聞き及びのことゝ存じますが、九州方面へ修業のために御旅行でござる。お氣の毒ながら、お相手はいたしかねまする。』

門弟は、さう云つて斷りました。

『なに、彌九郎先生は、伊豆へ御旅行と云ふのか。それは殘念ぢや。だが、これほどの大道場を構へながら、我々の相手が出來ぬと云ふことはあるまい。どなたでもよろしい。お相手をねがひたい！』

では、ござりまするが、……』

門弟が、もう一度斷らうとしたときです、玄關の問答が奥へ聞えたと見え、奥の道場から門弟が一人出て來て、

『歡之介どのゝ仰せぢや。及ばずながら、お相手致すに依て、お客人達をお通しなされいとの事ぢや。』

と云ひました。

『さやうか、然らば、お通り下されい！』

取次の門弟は、やつと通ることを許しました。

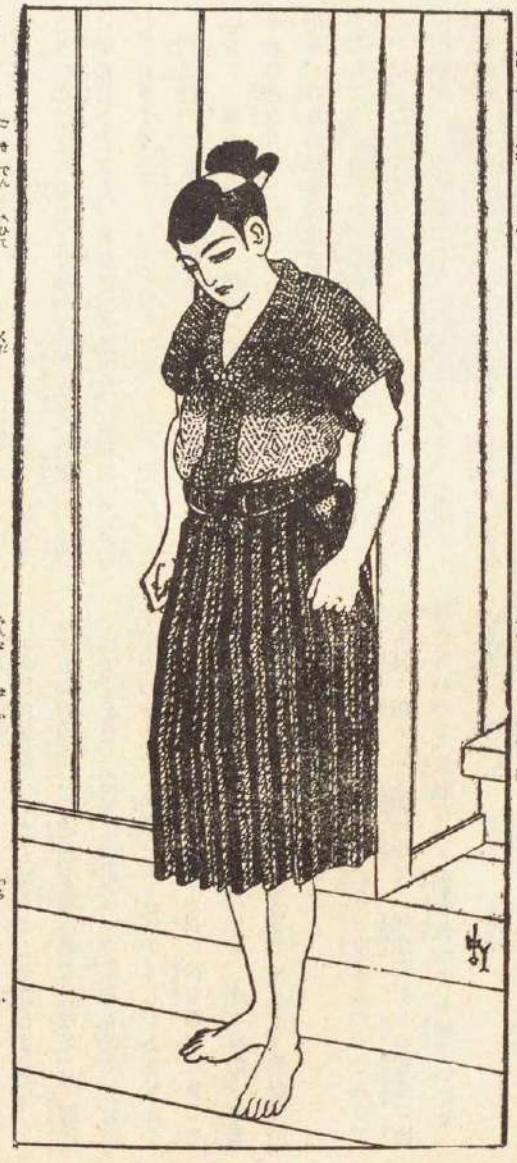
十五人の連中は、床板を踏み鳴らしながら、道場へ通りました。道場は、可なり立派なものでしたが午前中のせいか、門弟は十人ばかりしかゐませんでした　十五人が居並ぶと稽古衣に袴を着けたまゝで道場へつか〳〵は入つて來たのは、十七ばかりの背スラリとした紅顏の美少年です。ニコ〳〵笑ひながら、十五人に挨拶しました。

『拙者が彌九郎の三男歡之介と申すものでござる。父も兄も折あしく旅行中で、殘念ながらお相手が出來ませぬので、未熟ながら拙者代つてお相手いたす。お仕度下さい！』

十五人は、拍子ヌケがしてしまひました。こんな子供を相手にしたつて仕樣がない。こんな弱さうな

子供を叩き付けたつて手柄にもなりやしない。はるばる江戸まで來て馬鹿々々しい。

『この大道場に、御貴殿より外に、相手をして下さる方はないのか』



『ふゝん。御貴殿が相手をして下さるのか。』

左樣！』

歡之助は、落着いて答へました。

皆は、馬鹿にしたやうに笑ひながら云ひました。

『左樣！』

歡之介は、しづかに繰り返しました。

『止むを得ない。然らば、近藤氏一本お手合せをねがへ！』

十五人の中で、頭採の祖式松助と云ふ男が　近藤と云ふ一番若い男に云ひました。

『然らば、一本。』

近藤は、身ごしらへをして前へ出ました。歡之介も、仕度をしてしづかに受けて立ちました。

こんな少年が、どんなに出來たつて知れたものだ。みんなが、高をくゝつて見てゐたときです。

『えい！』と、帛を裂くやうな聲がしたかと思ふと、歡之介の竹刀の先に電火のやうに敵の咽喉に觸れたかと思ふと、近藤は仰向けに、道場の床へ突き倒されてゐました。

十五人も、さすがにアッと駭きました。これは油斷がならないと思ひました。

『石本氏、貴殿お出なされい！』

祖式が云ひました。

歡之介は、ニッコリお面の中で、笑つて新しい敵を迎へました

二三合、バン〳〵と竹刀の音がする中、また歡之介の鋭い氣合がかゝると、石本も、スッテンドウとばかり仰向けに突き倒されました。

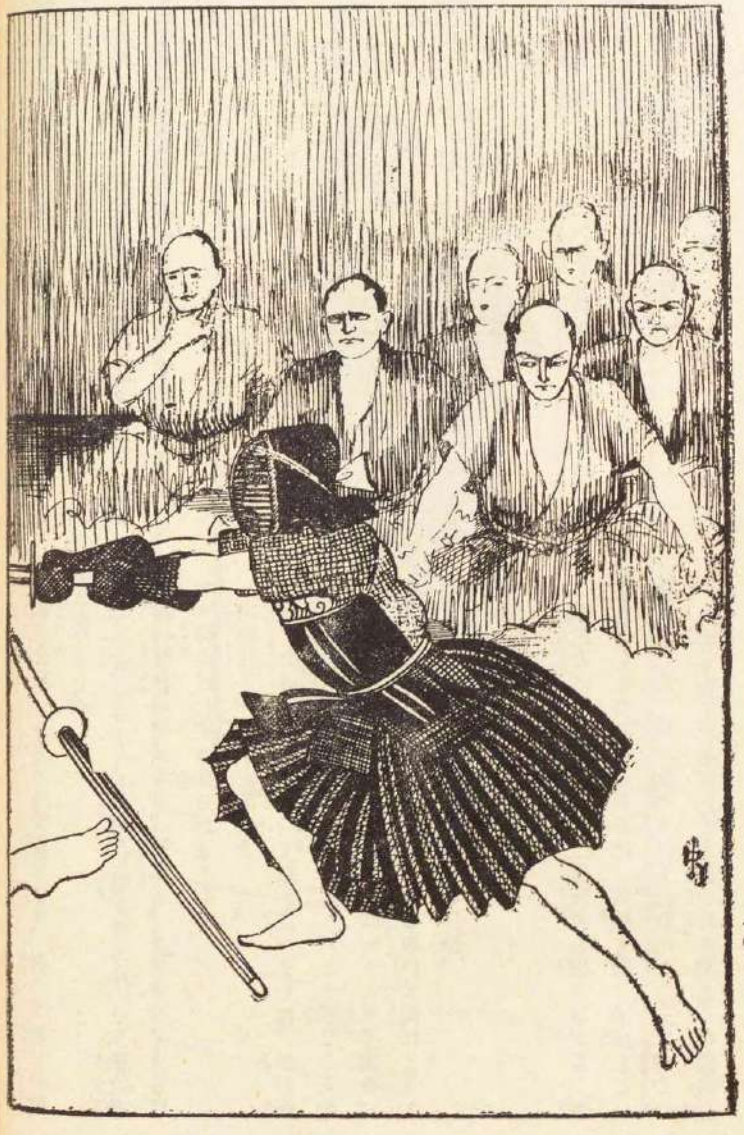
『山田氏！』祖式が云ひました。

歡之介は、落着き返つて敵を迎へました。敵が面を狙つて來たのを、一度受け返したかと思ふとそのまゝ付け入つて鐵壁も碎けよとばかりの兩手突き。山田と云ふ男は、一間ばかりよろめいて倒れようとするのを、やつと踏み止まりました。

『參つた。』

『お次ぎ。』

歡之介は、竹刀を空に二三度打ち振りながら、催促しました。今度出たのは、久保と云ふすばしこい小男でした。胴を狙つて打ち込むのを二三度拂つたかと思ふ左手を伸ばしての鋭い片手突き。久保は息

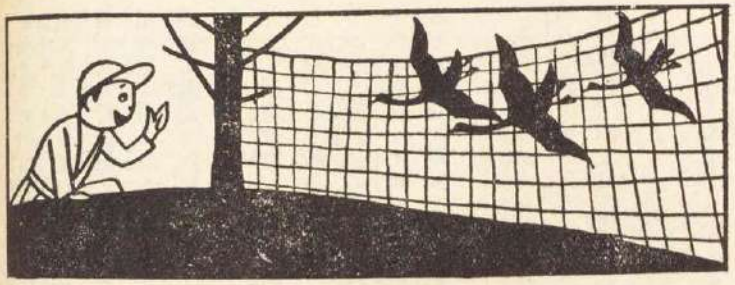


がつまつて、目が眩めいたと見え、へたばつたまゝ暫く起き上りませんでした。五人目、六人目、七人目、八人目、歡之介は息もはづまず、汗もかゝず、出る敵も出る敵も、悉く、突きの一手。竹刀の先は、鋼鐵で鍛えられたかのやうに、觸るゝもの悉く突き碎かれてしまふのでした。十四人目に、來島又兵衛と云ふ副將が出ました。歡之介も可なり勞れてゐましたが、十三四合烈しい打合が續いた後、相手はやつぱり歡之介の電光石火の太刀先を受け損じてしまひました。大將の祖式松助も、この少年劍客の神業と云ふべき突きの一手を、何うすることも出來ませんでした。

十五人の若武士ども、歡之介一人に突き捲くられ這々の體で宿へ歸りました。その晩から、みんな咽喉が脹れ、四五日の間は、喰べ物も咽喉を通らぬほどでした。

二

十五人の長州武士が、歡之介一人に突き伏せられたのも無理はありません。歡之介は、年こそ十七でありましたが、剛勇無双で、齋藤の道場では、あまり強いので鬼歡と云はれ、稽古が荒いので、門弟達も歡之介に稽古せられるのを、有難迷惑に思つたほどだつたと云ひます。殊に、お突きが得意で、その鋭い突きは、兄の新太郎でさへ受けかねたと云はれてゐたのです。が、さん〳〵に負けた長州武士もさすがに偉い所があります。とても敵はないと知ると、今までの意地を捨てゝ九州から歸り道の新太郎を呼んで明倫館の先生にしました。從つて長州の武士は江戸の齋藤道場へ入門するものが多く、その長州武士の中から、木戸孝允だとか廣澤兵助だとか來島又兵衛だとか、御維新のときに働いた者が澤山出ました。（をはり）



幸運太郎

水島爾保布

一

太郎君はある山のてっぺんに小鳥捕のかすみ網を張って居りました。と、待って居る小鳥ばかりの中に大きな雁が一どきに十羽ばかり引かゝりました。太郎君は大よろこびで、長い首を網の目へ突き込んでしきりにあばれてゐる雁を片ぱしから手づかまへにして、片ぱしから帶の間へはさみました。雁は首を挾まれたまゝ一生懸命になつてバタバタ羽ばたきをしたので太郎君は雁と一しょにすうーと空高く舞ひ上つて行きました。

二

『愉快々々、まるで飛行機にのつたやうだ』と、太郎君は手をたゝいて喜びました。

一宙返りをやつて見ようかな』

と、兩足で調子をとりながら、はずみをつけてやつとばかり美事なアンダーグリを返りをやりました。

『やア愉快々々、今度は逆轉、横轉、木の葉落し、コルク抜きの妙技をやつて御覽に入れまあす。』

なんてことを云ひながら、太郎君は調子に乘つて高等飛行術のありたけを演けました。すると飛んでゐる雁があんまり太郎君にくるくる廻られるので、到頭目を廻はして了ひました。

三

『やー發動機故障……飛行機墜落』

と、太郎君はそんな事をいひながら高い高い空から漫々たる大湖水を目がけて落ちて行きました。

『うわア、今度は潜行艇だ。』

と、太郎君は相變らず呑氣なことをいつてゐました。しかし、腰の廻りにはまだ雁がチヤンと挾まれてゐたので、それが浮袋の代りになつて、水の上にふわふわと浮んでゐました。兩手を擂のかはりにして、とある岸につきますと、その岸の原の間からひよつこりと長い棒が二本つき出して居ました。太郎君はいい手がかりがあるといきなりそれを摑みました。と棒だと思つたのは兎の足でありました。

四

兎は不意に足をつかまへられたので、吃驚して前足でやたらむせうに地面をひっ掘きまーだ。その力で太郎君はやすやすと岸へ上るこゝが出來ました。見ると兎のひつ掘いたあとからピカピカと光が射してゐました。それは大きなダイヤモンドでありました。ふと氣が付くと太郎君の穿いてゐたモンペの中でピチピチとはねくり返つてゐるものがありました。何だらうと手で探つて見ると、そこには蛸や鯉や鰻やが一杯入つてゐました。是等の魚は湖水を渡つてゐるときにまぎれ込んだものでありました。雁十羽と兎二疋と大きなダイヤモンドと鯉や鰻を百疋ばかり持て村へ歸つて來た太郎君のことを、村の人達はその日から幸運太郎といひました。

どちらが偉い

沖野岩三郎

今から三百五十年程前に、肥前の國山内の領主に、神代大和守武邊朝臣勝利といふ長たらしい名前の大將がありました。

此の勝利は幼名を新次郎と云つて、大變活潑なそして賢い子でありましたで、お父樣の對馬守利久は、此の新次郎を小城郡の郡司千葉屋形興常の所へ奉公に出しました。

奉公に行つた新次郎は、其所で學問や武術を一生懸命に勵んでゐましたが、或日の事一人の武士が此の千葉の屋形を尋ねて參りましたので、新次郎が玄關へ取次に出て見ますと、それは武藏國、榎原黨の一人で、江原石見守といふ人でありました。

用事の趣を訊きますと、此所の主人千葉興常の家來にして貰ひたい爲めに、遙々訪ねて來たといふ事でした。そこで新次郎は此事を殿樣に申上げますと殿樣は早速江原石見守に面會して一通りの試驗をしてみました。

江原は少しく智慧が足りないやうな男ではありましたが、劍術の早業がなか〳〵上手なので、早速試驗に及第して、千葉興常の家來にして貰ひました。

江原は新次郎より五つ六つ年上でありましたが、二人は非常に仲よくして、毎晩一つの室で枕を並べて寢みました。所が不思議な事には、夜半頃になると江原は頻りに兩手を伸したり、足を踏伸したりし乍ら、うゝん、うゝんと唸ります。しかもそれが毎晩々々續きますので、これは屹度恐ろしい夢でも見てゐるのだらうと思つた新次郎は、或夜の事、いつものやうに唸つてゐる江原を搖ぶり起しますと、江原は、

『あア、又たあの夢を見たのか……』と言つて、ぐッしより汗で濡れた顏を掌で拭ひました。

そこで新次郎は、

『あなたは毎晩々々苦しさうに寢狂つたり唸つたりしますよ。全體どんな夢をみるのですか。』と訊いてみますと、江原はこんな事を申しました。

『新次郎さん、不思議な事もあるものです。私は近頃毎晩〳〵定つたやうに同じ夢を見ます。その夢といふのは妙な夢で、私はいつの間にか廣ういの野ッ原の眞中に仰向けになつて寢てゐるのです。暖かい太陽がきら〳〵と私の顏を照しつけてゐます。好い氣持だなアと思ふと、急に私の身體が、ぐんぐんと伸びるのです。最初頭の方へ一尺伸びたと思ふと、次には足の方へ一尺伸びます。それからいつまでも〳〵頭が伸び足が伸び、頭が伸び足が伸び……たうとうお終ひには、私の頭は遙か遠い所にある北國の冷い山の上まで伸びて行つて、其所の岩を枕にするのです。すると足の方が何だか冷たくなるので、頭をあげて見ますが、足は何所にあるやら、さつぱりワカりません。それも其筈で、私の足は南國の端の海の中にぴた〳〵と浸つてゐるのです。』

それを聞いた新次郎は暫く考へてゐましたが、何を思つたか、

『江原樣、私に其の夢を賣つて下さいませんか。』と申しました。

『えッ、こんな恐ろしい夢を買ふつて人が、何所にありますか。』

『えゝ、此所にあります。此の新次郎が買ひます。』

『それは本氣で仰しやるのですか。』

『本氣とも、本氣とも、此所に金の笄があります。これを差上げますから、どうぞ其の夢をお賣り下さい。』

言ひ乍ら新次郎は頭もとにあつた荷物の中から、價の高い笄を取出して江原に渡しました。江原は、

「夢を賣つたなら、もう明日の晩から、私は其の夢を見るワケにはいかないのですネ。」と言つて笑ひながら其の笄を受取りましたが、偖其の翌晩からは、不思議にも、そんな恐ろしい夢はちつとも見なくなりました。

所が、それと反對に、新次郎は其晩から、毎晩毎晩身體が大きくなつて頭は北國の岩に、足は南國の海に浸される變な夢をみるやうになりました。

新次郎は賢い人でしたから、其の夢を見た山や岩の容子を能うく覺えて置いて、其後千葉屋形を出て諸所を遍歴しましたが、筑前の國と肥前の國境を越えてゐますと、其所には斧で削つたやうな石や、屏風を立てたやうな岩が、果しなく立ち並んでゐます。

新次郎は足を停めて其の石や岩を、ちッと眺めてゐるうちに、どうも何所かで見た事があるやうに思はれゝしたので、《はて、どこで見たのだらう？》と獨りごとを言ひましたが、偶と向うにある大きな平たい岩が目についた時、はッと手を拍つて、

『あ、さうだ！　毎晩々々夢に見た岩の枕はあれだあれだ、あの岩だ！』と言つて、其の岩の上に走つて行つて見ますと、其の岩壁の遙か麓の方には渺茫とした海が、洋々たる波を湛えてゐました。

『いよ／＼さうだ、私は毎晩此の岩を枕にして、あの海に足を浸してゐたのだ。』と叫んだ新次郎は、どつかと岩の上に坐つて四方を見廻してゐるうちに、こんな所へ城を築いたなら、どんな強敵でも防ぐ事が出來る、と思ひました。

そこで新次郎は自分の名を神代大和の守武邊朝臣勝利と名乘り近郷近在の武士を集めて家來となし、筑前と肥前との國境、東西十里南北七里の嶮しい山中に五つの城を築いて、其所に陣取つてゐました。

其頃は戰國時代でしたから、到る所に英雄豪傑があつて、あちらにも、こちらにも戰爭がありましたが、けれども九州に居る大將達は皆な、神代勝利の勢に恐れて、其の城へ攻め寄せて來る者もありませんでした。

所が唯一人、肥前佐嘉の城主龍造寺隆信といふ強い大將だけは、いつか神代勝利と一合戰して、雌雄を決せんものと、用意をさ〳〵怠りなかつたのであります。

時は弘治元年三月下旬の事でした。龍造寺隆信は城内に家來達を集めて、いろ〳〵の話をして居ましたが、

『今の日本に恐ろしい武士は一人も無いと言ひたいがあの神代勝利といふ男だけは、一寸恐ろしい武士である。どうかしてあの男を討取る方法は無いものであらうか。』と言つて、家來達を見廻しました。

すると、小河筑後の守といふ強力無雙の男が靜に座を進めて、

『仰せの如く當時吾等の恐るべき武士は、あの神代勝利たつた一人であります。あれは智勇兼備の大將で、戰爭を致します時、實に敏捷に立働きます。加ふるに彼れの居城は要心堅固にして容易に放落す事も出來ません。しかし私一人にお任せ下されば、必ずあの鬼神のやうな神代勝利を討取つて御目にかけ申します』と言ひました。

それから四五日後の事でした。神代勝利はお城の中で家來達と一緒に夕飯を食べてゐました。其時一人の家來が、

『今晩は大變な風ですね。』と申しますと他の家來が、

『いや、風よりも雨の方が強い。』と申しました。

すると大將の勝利は、

『こんな夜には、風よりも雨よりも、もつと強い者が來るかも知れないよ。』と言つて笑つてゐました。

家來達には其の言葉の意味が解りませんでしたから、別に氣にもかけずに、いろ〳〵と勇ましい話や面白い話をしながら、御飯を食べてゐますと、其所へ一人の女中が眞蒼になつて駈け込んで來ました。で、勝利は、

『どうしたのぢや？』と尋ねましたが、女中は物も言へないで、唯、はア〳〵言つてゐましたが、暫くして、やつとの事で、

『お湯殿に……お湯殿に……』とだけ申しました。

家來達はそれを聞くと直ぐ、刀に手をかけて起上らうとしました。それはお湯殿に泥棒か、惡者が忍び込んで隱れてゐるのだと知つたからでした。

けれども勝利は、ちつとも騒がないで、

『おい〳〵、何を騒ぐのだ。こんな大暴風雨の夜に、此の城中まで忍び入る曲者は、普通の泥棒や盜人ではない。それは屹度龍造寺方の大將小河筑後の守程の豪傑であらう。誰でもいゝから直ぐ湯殿へ參り、『城將神代勝利唯今食事中なり、これへ參り一緒に御食事なされては如何。』と叮嚀に申し上げお供致して參れ。』と言ひました。

家來達は、恐る〳〵湯殿へ行つてみますと、果して其所には、大將の想像通の小河筑後の守が立つてゐました。

で、家來達はぶる〳〵慄へながら、大將の言ひつけ通り申しますと、筑後の守は、少しも恐れた色を見せず、其のまゝ座敷へ入つて行きました。そして大將に對つて、

『それがし、今夜此の城内へ忍び込み、汝の生命を貰ひ受けんと思ひしに、見現はされたは實に殘念至極である。』と申しました。

それを聞いた勝利は、から〳〵と打笑つて、

『真の武士であるならば、闇に紛れて寝込を討たうなどゝ、そんな卑怯な振舞ひはなさらないであらう。若しそんな事をして、今夜此處で拙者を殺したとしても、それは決してあなたの御名譽にはなりませぬ。却つてあなたは末代までも、あれは夜中敵の城内に忍び入り、神代勝利の寝首を取つた卑怯者よと罵られるに相違ない。あなたは定めし今夜此の城内へお遊びにお出で下されたのでせう。どうか拙者と一緒にゆつくり御飯でも召し上つて、今夜は此處にお泊り下され。』と申しました。

それを聞いた小河筑後の守は、

『誠にあなたの仰せられる通り、拙者の企ては卑怯であつた。勝負は何れ戦場に於て……』

と言つて、少しも恐るゝ色も見せず、敵の大將と一緒にいろ〳〵の物語をしながら、愉快に飲んだり食べたりして、夜明がた悠々と龍造寺の城へ歸つて行きました。

此事を聞いた敵も味方も、皆な勝利の度胸の大きいのと筑後の守の大膽とに感心して、『勝利の大器、筑後の勇剛』と言つて二人を褒め囃してゐました。

翌る年弘治二年十月十五日には、神代軍と龍造寺軍との大合戦がありました。神代勝利は擇りすぐつた兵卒一千七百人を引つれ、熊野峠に陣を張つて待つてゐますと、遙か麓の方から、葦毛の馬に乘つた大將が頻りに鞭を揚げて兵卒を指揮してゐるのが見えました。それを見た勝利は、

『あれは、敵の大將小河筑後の守に相違ない。いよいよどつちが偉いか其の勝負の時が近づいたぞ！』

と云つて、手を拍つて喜びました。

翌くれば十月十六日、勝利は家來の河浪駿河の守に槍を持たせ、唯つた二人で斥候に出て行きました。所が丁度其時小河筑後の守も兵卒一人をつれたゞけで山の上に居る神代軍の樣子を探りに上つて來たのでありました。そして嶮しい細路を攀ぢ上つてゐましたが、大きな岩角を右に曲りますと、圖らずも其所には敵の大將神代勝利が立つてゐるのでした。

二人は思はず『あ！』と言つて一歩二歩づゝ後へ身を退きましたが、勝利は、河浪駿河の守に持たせてゐた槍を奪ふやうにして、

『やゝ、貴殿は小河筑後の守なるか、吾こそは肥前山内の領主神代大和の守勝利なるぞ。いざや勝負を決せん』と名乘りかけました。すると、小河筑後の守は、につこと打笑ひ、

『吾こそは肥前佐嘉の城主龍造寺隆信の家臣、小河筑後の守安信なるぞ。此の合戦の雌雄は、汝と吾と唯だ二人の勝負なり、いざや相手仕らん。』言ふより早く槍収直して突きかゝりました。そして二人は數十丈の絶壁の上に辛うじて通ずる狹い山路で秘術を盡して戦ひましたが、最後に双方から『やッ！』と言つて突出しました槍と槍。其の一つの勝利の槍は、筑後の守の額を、他の一つの筑後の守の槍は、勝利

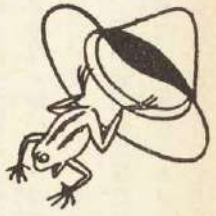
の腕を同時に突きました。けれども筑後の守は勝利よりも、ずつと年上であつたのと、受けた傷が深かつた爲に、たうとう其場で討たれてしまひました。

軍が終つた後で、勝利は筑後の守の遺骸を、三瀬といふ所のお寺へ叮嚀に葬りましたが、其時勝利は其の墓前に家來達を集めて、

『あなた方は、小河筑後の守のどんな所が偉かつたと思ふか。』と訊きました。すると家來達は、『力が強かつた。』とか、『槍の名人であつた。』とか、『忠義だつた』とか思ひ〳〵に小河筑後の守の偉かつたと思ふ所を並べ立てました。けれども勝利は靜に首を打ふつて、

『小河筑後殿は力も強く、槍術にも秀で、そして忠義であり、勇氣もあつた。けれども私の一番感心したのはそんな事ではない。あの人が暴風雨の晩に、城内へ忍び込み、湯殿に隱れてゐた時、城内の女に見付けられたにも拘らず、其の女を殺さなかつた其の心掃は實に貴いものである。普通の卑怯な武士であるならば、あの場合自分を見付けた女を一刀の下に斬殺して、自分の居る事を知らせまいとしたに相違ない。けれども眞の武士である小河筑後は、そんな場合と雖も、罪咎の無い召使女中を殺すやうな事はしなかつた。そして逃げ出しもせず、隱れもせず平然として其まゝ湯殿に居た所が實に感心である。私はあの人よりも年が若くて力が少うし強かつた爲めに、今度の戰に勝つ事は出來たが、眞實を言ふなら、あの人は私よりも遙に偉い眞の武士である。』と申しました。そしてはら〳〵と涙を流し乍らお墓を拜んで、自分の城内へ歸つたといふ事であります。

私は此の話を、子供の時古い本で讀みました。もう其の本の名は忘れて了ひましたが、話は今に忘れて居ません。そして此の二人は全體どちらが偉かつたのだらうか、今に判斷がつきません。皆さんはどうお考へになりますでせうか。(をはり)



七勇士最後の卷

畑　耕一

いつのことか、それは知らない。

どこの國だつたか、それもわからぬ。

歐羅巴のまんなかの、ある小さな村に、じぶん等で勝手に、七勇士と名乘つた七人の百姓があつた。

臆病で、無學なくせに、いつも強がつて、なんでも知らぬものはないといふやうな、高慢な顏をしてゐた。

『お互ひに、これだけの勇氣と、これだけの智慧をもつてゐながら、こんなちつぽけな村で、一日、鍬や鎌をふりまはしてゐるのは、どう考へても惜しいものだ。ひとつ、七人そろつて、武者修業にでかけやうぢやないか。』

『さうだな、こんなところで、百姓をしてゐては、一生うだつのあがりつこはない。七人で武者修業をやつて、なにかすてきな功名をあらはし、都の王樣のお城へいつて、大將かなんかにつかつてもらふのだね。』

『大將の空がなけりやあ、大臣だつていゝからな。』

――ある日、彼等は、こんな、はなはだ都合のいい相談をきめてしまつた。そして、善はいそげと、さつそく旅路にのぼつた。萬一の用意にと、みんなてんでに、鍬を鐵砲のやうにかついで、胸を張り、

肩をそびやかして、ならんで押しだしたものだ。

七人のなかでも、いちばん強く、いちばん賢いといふ、シュルツといふ男が、先頭にたつた。二番目がヂャッキ、三番目がマルリ、四番目がヂェルグリ、五番目がミハエル、六番目がハンス、七番目がバイツリといふ順。――だが、讀者諸君は、こんな名を、いち〳〵おぼえるにはあたらない。

七月の、あついさかりだつた。このたいへんな七勇士は、汗をダクダクながしながら、行進をつゞけた。

『こんなにあつくちや、やりきれないから、これからは、晝やすんで、夜の涼しいうちだけを、あるかうぢやないか。』と一番目がいひだした。

『えつ、夜？　……夜の旅は、らくにはちがひないが、暗いせ。』と二番目はすこし困つた顔をした。

『夜なら、暗いにきまつてゐるさ。』と、一番目が、いかにも高慢らしく、鼻をうごめかした。

『暗いさ……暗いからその……。』と、三番目は薄氣味わるげに、あたりを見まはした。

『暗くつてもいいぢやないか。わたしたちは、天下の七勇士だ。』と、一番目は威張つた。

『七勇士は七勇士さ。……だが、暗いところには、どんな變なものが、かくれてゐるかも知れないからな。』と、四番目は身ぶるひした。

が、一番目はむやみに威張つた。

『なあに、これだけ勇士がそろつてゐて、なんの恐ろしいことがあるものか。鬼が飛びだしたつて、大蛇がぬたくり出したつて、わしたちの力と智慧で、退治してやるのはわけない。そんなものに出あへば、かへつて功名手柄をたてるに都合がいゝといふものだ。……なにもビク〳〵することはない。夜の旅は、わしたちの膽力をみせるにいちばんいゝのだ。』

しかし、ほんたうのところ、一番目の男もひどい臆病者なのだつた。ただ、むやみに威張りたいので、

かういつただけなのだつた。それから七人は、晝はどこかの木蔭で、あつさをよけて晝寢をして、夜になると、肩をならべてあるいた。いや、肩をならべてといふより、あたりが暗くてこわいものだから、みんなからだを寄せあつてあるいた――といつたほうが、いゝかも知れない。

やがて彼等は、ひろい野原へ出た。

『家も小屋もないやうだね。……いつたいここは、どこだらう？』と、二番目が、氣味わるげにいつた。

『牧場らしくもあるし、畠のやうでもあるし、お城の跡か、墓場の跡のやうにも見えるな。』と、三番目は、首をつきだして、闇をすかして見た。

『えつ、墓場の跡だつて？　……およ、おようだんを言つちやいけないせ。とにかく、こんなところは、早くとほり抜けしてまふがいゝ。』と、六番目は、もう、ブル〳〵震えてゐた。

『なんの、こんな野原くらゐ、わしたち七勇士が恐れることがあるもんか。さあ、進ちう！　鬼だつて、大蛇だつて、ビクともするのぢやない。もし、わしたちには向つてくるやつがあつたら、このとほり、石ころでお喰はせてやればいゝのだ！』と、一番目の男は、また威張つた。そして足もとの小石をひろふと、ビユッと闇のなかへ投げこんだ。

石ころは飛んで、草の間にねむつてゐる、熊蜂の

巣にあたつた。驚いたのは熊蜂だ。巣の中から、みんなブーン、ブーンと飛びだして、一齊にうなりはじめた。

『や、や、あの音は、たしかに遠くで弓をひいてゐる音だ。』と、四番目が叫んだ。『……どうだ。あの音は、たしかに二三萬の軍勢が、弓をひいてこつちへ押し寄せて來る音だ。た、た、大變なことになつたぞ！』

そこへ、ブーンと熊蜂が一匹、七番目の男の鼻のさきへ、ぶッつかつた。彼は、キャッといつて倒れた。

『あ、あ、あ！　やられた！　やられた！　わしはとう〳〵、敵の矢にあたつたのだ。もう、生命がない……！』

ほかの六人は、これですつかり膽をぬかれて、地びたにヘタヘタと坐つてしまつた。

『いくら勇士でも、こつちは七人、あつちは二三萬だ。とてもかなはない。……降參！　降參！』

彼等は夢中で、手をあはせた。

あとで、彼等は、やつと敵の正體が熊蜂であることを知つて、

『やれやれ、びつくりさせやがつた。熊蜂でよかつたよ。これがほんたうの軍勢だつたら、わしたちは、捕虜になるか、討死するか、大變なところだつたのだ。』と、一番目が安心したやうに笑つた。

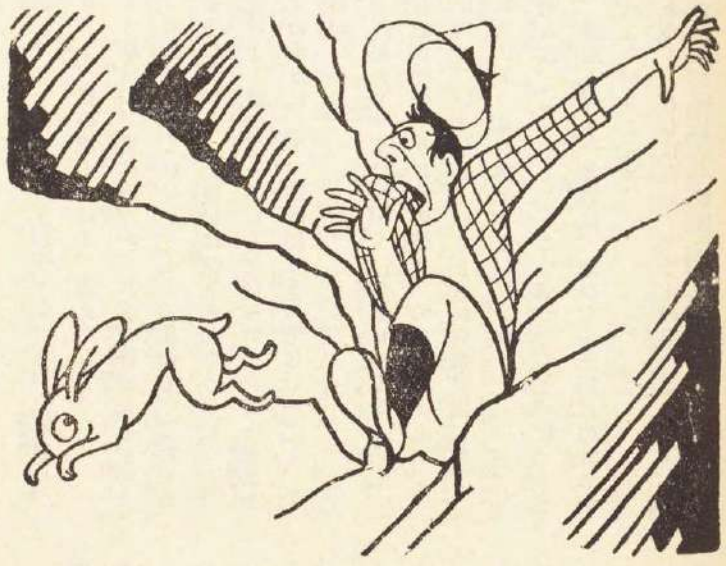
かうして彼等は、野原を、ほう〳〵の體でとほり抜けた。しばらくゆくと、大きな山の麓へ出た。

『この山を越すのは大變だな。』

『こんなに暗いのだから、谷なんかへ轉がり落ると大變だ。』

『山は魔物が、よく棲んでゐるといふから、下手にまごつくとそれこそ大變だぜ。』

彼等は、又臆病風をふかして、大變だ大變だといひだした。



『なあに、この七人に勇氣と智慧とにかけちやあ、誰にもまけぬはずだ。谷だつて魔物だつて驚くもんか。なにも武者修業の膽だめしだ。魔物を退治れば、それが功名になつて立身出世するわけだ。さあ登らう！』と、一番目は、例のとほり空威張りに威張つて先頭に立つた。暫く登ると、威張り屋の一番目が、どうしたのか、ギョッとして立ちどまつた。

『なんだ、なんだ。どうしたのだ？』と、五番目がきいた。

『見ろ、あすこの岩のむかうに、白い長い角がうごいてゐる。』

『えッ……？』

みんな、びつくりして一番目の指さすはうを見た。暗いなかに、大きな岩が見えた。そしてそのむかうに、なるほど、白い長い角が二本ピクリ〳〵とうごいてゐる。

『いよ〳〵、大變だ。あれはきつと白鬼の角にちが

ひない。……さあ、どうしやう？』と、二番目は、ガタ〳〵、歯の根もあはず、震えだした。

『もう駄目だ。鬼にみつかつたら、降參だといつても、容赦はしてくれない。七人の生命も、これでおしまひだ！』と、三番目は泣きだしさうにいつた。

（鬼はよく眠つてゐるにちがひない。ソッと足音をたてぬやうにして、逃げ出さうぢやないか。』と、七番目がいつた。

『それがいゝ。それがいゝ。』彼等は、息をころし、足音をさせぬやうに岩の彼方へぬけやうとした。と、白い角は、いきなり、パッと岩から飛び出した。

『ウワッ？　鬼が眼をさました！』

七人は、ヘタ〳〵と、そこへ坐つてしまつた。――と、威張り屋の一番目は、地びたの三四尺の深さの所へころがりこんだ。

『おつ！　わしは深い〳〵千丈の谷へ落ちた！　助けてくれ！』と、一番目は叫んだ。

みんな二度びつくりして、一番目の方をみると、別に谷に落ちてもゐない。たゞ、腰から下が、地びたに埋れただけだつた。

『なんだ、谷へ落ちてはゐないぢやないか。……しかしどうしたのだらう。なんだか穴のなかへ腰をはめこんだやうだな。』と、二番目はいつた。

やがて、彼等が、白鬼の角と見たのは兎の耳で、一番目が落ちこんだのは、兎の穴だといふことがわかつたので、『やれやれ、兎でよかつた。』と、みんな、胸をなでおろした。

『……もう、夜の旅はこり〳〵だ。そして修者修業もこりこりだ。』と、一番目がいつた。『ねえ兄弟、わしたちはもう、勇氣や腕の力で功名をたてゝ、大將になることなんか、思ひ切つてしまはうぢやないか。そのかはり、お互ひに智慧が充分あるのだから、その智慧で、大臣にとりたてゝ貰はうぢやあないか。』

『そうだ、そうだ。それがいゝ。大賛成々々々！』

と、のこりの六人は口々に同意した。

山をくだるころ、やうやく夜があけた。そこにあまり大きくもない川があつて、川の彼方には、都の王様のお城の赤い塔が見えた。

『さあ、もうすぐだ。あのお城までゆけばいゝのだ。急がうせ。』と、二番目は、昨夜へこたれたに似ず、今朝はいかにも元氣でいつた。が、川には橋ひとつなく、また、船一艘うかんではゐなかつた。

『この川を渡らなければ、どうすることもできない。……よし、わしが失頭で、川を渡らう。べつに深くもないやうだから。』と、一番目はいつた。

彼は服をぬいで、帽子をかぶつたまゝ、そろ〳〵川を渡りはじめた。六人は、岸からそれを見てゐると、やがて川のまんなかで、一番目の首は水のなかへかくれた。だが、帽子はそのまゝグングン向ふの岸についた。

『深いといつても、一番目の首までだ。帽子もぬらさないで向ふ岸へつくところをみるとたいして渡りにくい川ではないやうだ。さあみんな渡らう！』と、二番目も服をぬいで川へはひつた。みんなあとへつづいた。――が、川は實は深い〳〵川だつた。そして、水の表面は、ゆるくながれてゐたが、下のはうは、恐ろしい渦がいくつもまいてながれてゐたのだつた。王様のお城を守るために、こんな風につくられてゐる、仕掛のある川だつたのだ。六人は忽ち川の底へ吸ひ込まれて、溺れて死んでしまつた。

――一番目も、もとより溺れて死んだのだつた。

なぜ、あの帽子が向ふ岸へついたかは、六人にはわからなかつたのだ。いや、後に、都のお城の洗濯女が兵隊たちの服を洗濯するため、岸に流れ寄つてゐる汚い百姓帽子を、押しのけやうとすると、その帽子の下に大きな蛙が一匹、もぐり込んでゐたのでびつくりはしたが、彼女にもその蛙がどんな役目をしたのか、その意味は分らなかつたのである。（をはり）

牢破り

（長篇話）

西條八十

前回までの概略。 佛國騎兵中尉ヂエラールは英國のダートムーアの牢獄を逃げ出し途中非常な苦心をしてどうかして追跡をのがれようとしました。それにはどうしても身裝を變へなければならないので、道に出遇つた小男の外套を奪ほうとしたのです。ところが、その小男が英國一の拳闘の選手だつたので、拳闘の末、遂に打倒されてしまひました。

十一　商買は商買だ

諸君！　一時氣を失つた僕が、やがて正氣づいて見ると、自分は粗末な室の中の車附寝臺の上に横になつてゐた。僕の頭の中は鐘でもついてゐるやうにグワングワン鳴つてゐた。手で觸つてみると僕の片々の眼のうへには胡桃ほどの瘤が出來てゐた。刺すやうな匂ひが鼻に泌みる。で、僕はぢきに酢で浸した紙きれで自分の額が繃帶されてゐるのを知つた。

室の向の隅のところに、あの恐ろしい相手の小男が膝をむき出しにして腰かけてゐた。それに年嵩の男がしきりと塗藥か何かしてゐる。年嵩の男はひどく氣嫌が惡さうで、しつきりなし何か口小言を云つてゐる。それをまた小男はしかめ面をして聽いてゐるのだ。

『こんな馬鹿げた話つて聞いたことも無い。せつかく汗水垂らして一箇月も練習したあげく、もう勝負の日が迫つたといふ時に、名も知れない人間にからかつてこんな怪我をするなんて。』

と、年嵩の方がさもさも忌々しさうに云ふと、

『もういゝぢやないか、先刻からその位云へば。君はまつたく親切な世話人がだ、話だけはすこしくど過ぎるよ。』

小男の方は耳を押へるばかりだ。

「冗くつても何でも云ふだけの事は云つて置かなければならない。若しあなたのこの膝が、次の水曜日までに癒らないと、皆はあなたが狡くて勝負を逃げたなんて云ひますよ。」

『これは怪しからん。僕は今日まで十九回の拳闘試合で勝ち通した。だが一度だつて「狡い」だの「逃げた」だのと云はれたことは無い。それに今度のは僕から求めた災難ぢや無い。相手が理不盡に外套を奪らうとするもんだから……』

と、小男がいきり立つて何か云ひかけると、

『たかゞ外套位なんです。相手の男には追手が掛つてゐるんぢやありませんか。おとなしく渡してやつたところで、半日もすればまた手へ戻る品です。』

と、年嵩の方が冷笑した。

『だつてそこが男の意地だ。腕づくで取ると云はれては、默つておいそれと渡すことも出來なからうぢやないか。』

『渡しておしまひなさい。たかが幾何の品物です。考へてごらんなさい。あなたの今度の勝負にはラフトン卿だけでも五萬圓から賭けてゐるんぢやありませんか。それに入場料の八千圓はまる〳〵あなたの手に入るわけです。それだけの儲仕事を拋つて、そ

んな腫れた膝と、生體の知れない佛蘭西人の死骸を背負ひ込むなんて！』

『でもまさか彼奴が蹴らうとは想はなかつたからな。』

拳闘家がしみ〴〵云つた。

『そこが何しろ軍人ですから、拳闘の仕方も何も心得ちやゐません。大體佛蘭西人なんて、何をさせたつてメチャ〳〵でさあ。』

年嵩の男はさも心得たやうにかう云つた。

僕はこれを聞いて、たまりかねて、寢臺の上に起直り、だしぬけに聲をかけた。

『諸君！　よくは分らんが大體のお話の模樣では、僕が試合の方法を心得ないのを笑つてゐられるやうに見えるが、僕は最前軍人として闘かつたので、君等のやうな寄席藝人として試合をやつたのでは無い。そちらで僕の頭を擲つたから、こちらでも膝を蹴つたまでだ。だが、いづれにせよ最前のは子供だましだ。ほんたうに僕の腕前が見たいなら、劍を貸したまへ　そして君等も劍を持つて相手になつて見せたまへ。手毬のやうに幾つでも、首をチョン切る藝當を見せて進せるから。』

兩人の英國人には自分の云つたことが通じてか通じないか、しばらく呆氣にとられたやうな顔をしてこちらを見てゐた。が、そのうち年嵩なのが、やうやく口をひらいて、

『いや、まづ以てあなたが死なずにゐたのはおめでたい。最前このバッスラーと私があなたを擔ぎ込んだ時には、とても呼吸を吹き返しさうな樣子ぢやありませんでしたよ。いくらあなたの頭が固いからと云つて、このバッスラー君の拳固は受け切れませんからな。』

『だから僕もこの人が出て來た時に、手出しをしちや爲にならないと斷つたんだ。』

と、相變らず膝を撫でながら、拳闘家が口を添へた。

『それでもともかくあなたは英國一の拳闘家を相手に勝負をしたと云ふことで、故郷へ錦が飾れますよ』

と、年嵩の男が重ねて褒めるやうに云つて、

『それにしてもあなたは相手の實にうまい急處を攻めたもんだ。膝に蹴りを喰れるなんて。——』

『僕等は度々戰場を往來してますからな。』

と、云ひながら僕は上衣の釦を外して、かれらに胸の二箇所の彈丸傷を見せた。それから踝の傷とつい先頃例の僞坊主にやられた眼窩の傷をも見せた。

『惜しい男だ。』

と、拳闘家が溜息をついて云つた。

『私等の手でしばらく鍛へれば、直にいつぱしの選手になれるのだが、これをこのまゝ監獄へ返すのは可惜もんだ。』

年嵩の男もおなじやうな調子で云つた。

僕はこの最後の言葉を聞いて、覺えずヒヤリとした。慌てゝ上衣の釦をはめ、寢臺から立上り、

『僕はこれから直ぐに、また發ちたいと思ひますが。——』

と、かれらに云つた。

『いや、それはいかんでせう。』

と、その年嵩の拳闘家の世話人が答へた。

『あなたのやうな方をこのまゝ牢獄へ戻すのは私としても辛いことだ。が商買は商買です。あなたの首には二百圓といふ賞金がついてゐる。役人たちは今朝一度こゝへあなたを探しにやつて來ました。ほどなくもう一ぺんやつて來るでせう。』

かれの言葉を聞いて、忽ち僕の心は鉛のやうに重くなつた。

十二　讀み上げた手紙

『まさかあなた方は僕を訴へようつてんぢやありますまいな！』

と僕は叫んで、

『どうかそれだけは止めて頂きたい。さうすれば僕が佛蘭西の地を踏むや否や、二百圓は倍の四百圓にしてキッと送り屆けます。僕は佛蘭西の軍人の名譽に賭けてかたくそれを誓ひます。』

だが、世話人はたゞ頭を横に振つた。そこで僕はいろいろに手を代へ、品を代へ、或は訴へ、或は論じ、百方から兩人を口說き立てた。が、それは結局むだで、僕はそれよりも却つて足下の床に轉がつてゐる二本の棍棒を相手に喋つた方が優しぐらゐなものだつた。兩人の牛のやうな顏にはひとすぢの同情の色も浮ばなかつた。

『何と云つても商買は商買だから。』

と、世話人は繰返して、

『それに若し下手にあなたを庇護つたりなんぞして、このバッスラー君がそのため警察へでも引ぱられたら、水曜日の試合はメチャメチャです。私としてはどこまでもバッスラー君の面倒を見るのが道で、これ以上危い藝當をするのはご免です。』

世話人のこの棄臺辭を聞いて、僕はもうこれ以上悶いても惋いても無駄だと思つた。僕は簀子を破つた哀れな羊のやうに、二度ノコノコあの牢獄へ伴れ戻されるのだ。よし、さうと定つたら、この血も涙もない兩人の奴に、エテイエンヌ・ヂエラールの敗れかぶれの暴れぶりを見せてやらう、と考へた。僕には、今この兩人がいちばん恐れてゐるものが何であるかよく分つてゐた。

そこで急に僕は躍り上つて、そこに在つた棍棒の一つを取つた。さうしてそれをバッスラーの頭の上にふり廻して、

『さあ、どうならうとも、貴樣の身體はこの水曜日には出られないやうにして呉れるぞ！』

と叫んだ。

バッスラーは『ウーン』ともの凄く唸つた。さうして負けずに立上つて、僕に飛び掛らうとしたが、世話人が慌てゝ後から羽交締に止めて、やつと椅子に坐らせた。

『そ、そ、それだけは後生だから止めて下さい、バッスラー君。』と、世話人は悲鳴をあげて、それから僕の方を向き、

『あなたももういゝからトットと行つて下さい。早く、早く、駈けて逃げて下さい。さもないと、それ、この手が緩みます！』

『有難い忠告だ』と僕は思つた。そこで猶豫なく僕は戶口へ走つた。が、一足門の外へ出ると、僕はグラグラと眩暈を感じた。それでやつと門柱にもたれて倒れるのを防いだ。

諸君！　まあこの時までに僕が通つて來た苦しみを考へて見てくれたまへ！　まづ牢を脫け出す心配から、暴風雨の中を長く無駄に走つたこと、一夜を濡れた霧の中で、それも麭麭だけでやつと饑を凌いで明したこと、それから二度目の夜の旅、そしてその最後がバッスラーからうけた手ひどい打擊、――さう數へて來ると、さしも剛氣な僕が愈々その時に精根ともに盡き果てようとしたのも、決して不思議ぢやないのだ。

僕は例の重い外套を着、ひしやげた軍帽をかぶり、顎を胸に埋め、ぢつと目をつぶつたなり、しばらくそこに立ちすくんでゐた。もうこれまでに出來るだけの事はやつた。これ以上自分には力は無い。……

と、僕は急に馬の蹄の音を聞いて、ッと顏をあげた。見ると眼の前十歩と離れぬところに胡麻鹽髭のあのダートムア牢獄總監が立つてゐる。その背後には六人の騎馬兵が控へてゐる！

『や、ヂエラール中尉。とうとうまたお目にかゝりましたな。』と、總監は苦い笑ひかたをして云つた。

僕は默然として何とも答へなかつた。たゞ衣匣の中を搔き探してそこに藏つてあつた例の手紙を取り

だした。さうして二三歩進んで叮嚀にそれを彼に手渡した。

『あなたの手紙をこちらに止めておきましたのは遺憾なことでした。』と、靜かに僕は云つた。

總監はびつくりして僕の顏を見つめた。それから兵卒どもに僕を捕縛するやうに命令した。見てゐる前で彼はその青色の封筒の封を切つた。讀み下すにつれ、彼の顏には一種異樣な色があらはれた。

『これはあのチャールズ・メリディス男爵が紛失された手紙に相違ない。』

と、彼が云つた。

『いかにも。それは男爵の外套の衣匣に入つて居つたのです。』

『これをあんたは二日も持つて歩いて居られたのですな？』

『ハア、一昨夜からです。』

『そして中は一度もご覽にならなかつたのですか！』

そんなことを紳士に向つて尋ねるのは無禮であらうと云ふ風を僕は彼に見せた。

ところが驚いたことに、總監はだしぬけに大きく笑ひだした。

『ヂエラール中尉！』と、しばらくしてから總監は、笑涙を拭きながら僕を呼びかけた。

『あんたは御自分にも、またわれ〳〵にも入らぬ手數をえらく掛けられましたぞ。まああんたが二日間も持つて逃げ廻つてゐられたその手紙を讀んで見ませうか』と、云つて、彼はかう讀み上げた。

『此書狀到着次第佛國驃騎兵第二十三聯隊附中尉エテイエンヌ・ヂエラールヲ本國ニ放還スベシ。右ノ者ハ目下エルダンニ在ル我騎砲兵中尉メースント交換スベキ者ナリ。』

讀み終へると總監はまた大きく笑つた。彼の部下の兵たちも笑つた。家の中から出て來た世話人と拳闘家の兩人も笑つた。この豚かな大笑ひの聲を聞いては、冒險と心勞とに疲れはて、死人のやうになつた僕もどうして笑はずに居られよう！

懷かしい佛蘭西の山々、老いた母親、慈悲ぶかい皇帝、忠實な部下の兵士、それら近く會へるものゝ面影が一時に樂しく僕の眼の前に浮んだ。さうしてあの陰氣なダートムーアの牢獄、――もう二度と歸らなくて濟むその牢獄は、自分から遠く遠く離れた處になつてしまつたのだ。

さう思ふと僕は大聲をあげて笑つた。一同が笑ひをおさめてしまつた後まで、ひとりで笑つた、笑つた、笑つた。

（をはり）

日に吠える豚

武井武雄

天に居る澤山な、剽輕者の癖の中で、まづ一人前に育つた、『無闇に髯を捻くる癖』と、『月に吠える癖』との二人が、下界をさして降りて來ました。各々自分に似合ひのものを見つけて、それに取付かうといふ算段で。

まづ下界の木の枝に腰をおろして『髯を捻くる癖』が云ひました。

なあ兄弟、我輩は髯なしに取付くとどうも退窟して困る。是非とも髯のあるものを選ばなくてはならない。そこでだ、この國の一番いゝ髯に取付いて、夜晝なしにそいつを捻らしてやらうと思ふが、それはどうだ』

『や、とんでもない結構な話だ。然らば僕はこの國の一番いゝ聲に取付いて、夜中その聲を唸らせてやるとするかな。』

『月に吠える癖』が、かう云つてのり出しました。けれど、どこに一體そのいゝ髯と、いゝ聲とが有るのか、下界に來た二人には見當もつかないので、たゞ呆然と木の枝につかまつて居ました。

所が丁度いゝ鹽梅に、向うの方から、王樣の御殿で太鼓を敲く小人が、馬に乘つてやつて來るのが見えました。二人はすかさず、髯と聲とに就いての評判を尋ねてみました。

『一番いゝ髯は、無論のこと御殿の王樣に相違ないが、さていゝ聲は……。』

と、云ひかけて、實は小人は自分だと自惚れて居たのですが、元より怜悧な奴ですから、下手なことを言つて災難がかゝつて來ては大變だと思つて、

『澤山あつて、これといふ譯にゆかない。』

と、誤魔かして、トコ〳〵馬を急がせて行きかけましたが、何を思ひ付いたのか、一寸振返つて、

『近頃御殿の犬が素敵にいゝ聲の持主だ、といふ評判だよ。』

と附加へました。

二人は、その馬の後を少し離れ乍ら御殿迄隨いて來ました。暫くすると、王樣らしいのと、犬らしいのとが解りましたので、二人は小聲で囁き合ひました。

『アレダ、アレダ。』

『髯を捻くる癖が』嬉しさにあはてゝ『月に吠える癖』の頭をつかまへて云ひました。

『あはてるな、あはてるな。』

『痛い、どつちがあはてゝるんだ一體。』

『そら、行かう、1、2、3、』

『まだまだまだ、こつちへ向いて居る時に行くと見付かつてしまふよ。』

『向ふへ向いたッ、早くッ、4、5、6。』

バラバラバラッと二人は駈け出して、いきなり王樣と犬とに、バクリと取付いてしまひました。皆さんはこれで、それ〴〵の癖が、うまく自分に適したものに取付けたとお思ひになりますか？

所が、や全く云ふのも氣の毒の事ですが、あんまりあはてた爲でありませう『髯を捻くる癖』は犬に、『月に吠える癖』王樣に、すつかりあべこべに取付いてしまつたのでありました。でもそれぞれ粗末ながらも、髯と聲とは持合せがありましたけれど。

王樣に取付いた『月に吠える癖』の方は、思はぬ出世ですから、文句を云ふ譯もありませんが、犬に取付いた『髯を捻くる癖』は、すつかり悄氣てしまひました。

『いつか、アメリカといふ髯無し國へ降りた時、髯のある人間が見付からないので、仕方なく猫で我慢した事があつたが、あゝまた今度もその兄弟分の犬ころとは、よく〳〵だ。』と、仲間から聞いた話をい加減に喋り乍ら嘆息しました。

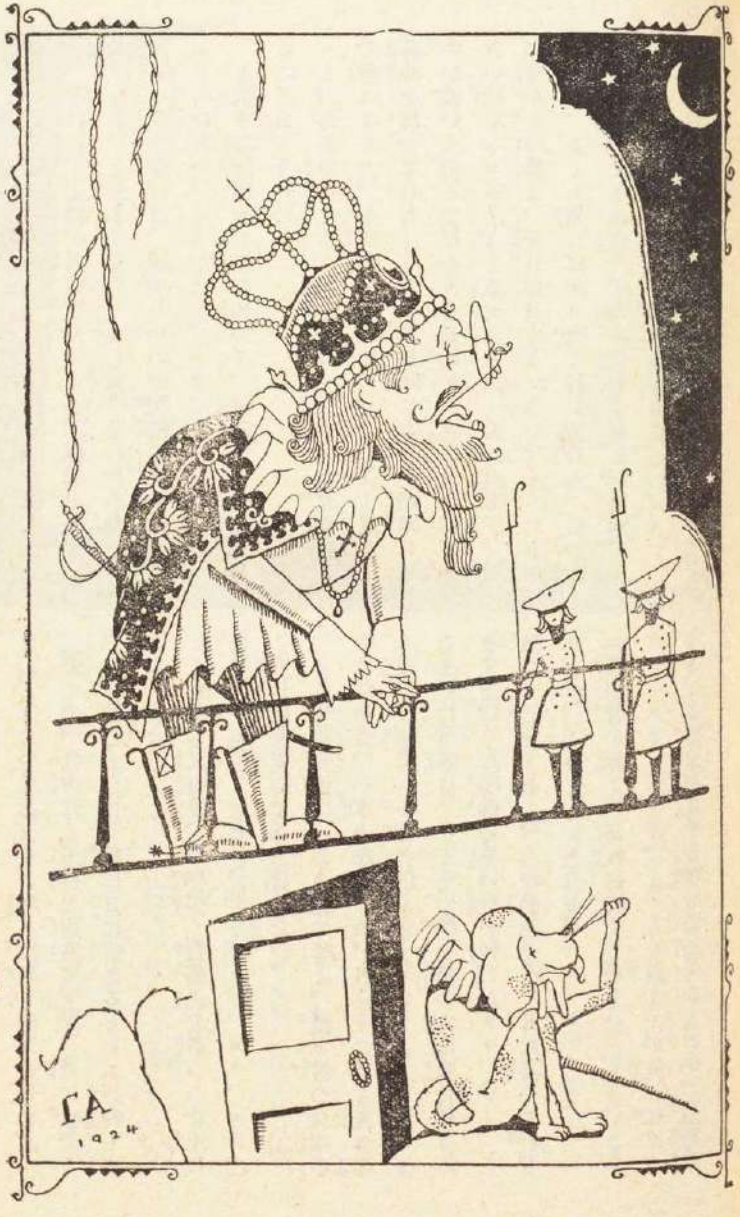
この二つの剽輕者が乘込んでから、御殿の容子が遽かに變りました。外でもありません。夜になると眼映ゆい樣な黄金の冠を戴き、天鵞絨の美しい服をつけた王樣が、宮殿の露臺にお出ましになつて、月を眺めては頻りに、

『バウワウワウ、バウワウワウ。』

と、夜中吠えておいでになり、その露臺の下には犬めが坐り込んで、ピン、ピン、と髯を捻くつてゐるといふ始末でありました。

さて、乞食が鯱鉾立をしてさへも、評判といふものはすぐに、それからそれへと傳はるものでありますのに、まして國王樣が月に吠えるなどゝいふ事が傳はらないでゐる氣遣ひがありません。廣い國中知れ渡つて、しまひには豚にまでこの事が聞えて來ました。そこで、豚が思ふ樣に、

『王樣も人氣取だなア、俺だつていつまで小舍にくすぶつても居られない。若しもこの豚が、王樣より偉い事をしたとなつたら、人も尊敬して、無闇にカツレツになんぞにするとは云ふまい。さうだ俺樣はいつもかう氣轉が利くので偉い、さすがは俺樣だ、



俺樣に限る。』と、何かしらひそかに思ひ立ちました。それは、王樣が月に吠えるなら、豚は日に吠えてやらう、と云ふのでありました。それから毎日お天氣にさへなれば、眼ぶしいのを矢鱈に我慢して、

『くういきい、くういきい、エフ、エフ。』

と大きな豚はお日樣に向つて、根氣よく吠え立てるのでありました。

と、ある日のこと、豚小舍に一枚の木の葉が散つて參りました。お腹のすいた時にはこれでもまあと鼻先を持つて行きますと、不思議にもその枯葉には字が書いてあるではありませんか。豚はあきれて小さい眼をショボ〳〵とさせました。なんだと、

『豚小舍の豚よ、毎日毎日くういきい、くういきいなどと、よくも俺にばかり吠え付いてゐる。この太陽を泥棒とでも間違へてゐるのか、けしからん、さういふ無禮な眞似は以後相成らんぞよ。』

『トいけないいけない、お日樣の手紙と來ちやアどうしようたつてどうする事も出來りやアしない。』

そこで、仕方なく王樣と同格に下り、月に吠えることに致しました。錄に日に吠えるといふ評判も立たない内に。

それから又毎晩、辛棒強く薔薇色の鼻づらを上に向けて、『くういきい、くういきい、エフ、エフ。』と月に吠えるのでありました。

ところが今度は、ある晩のこと、澄み渡つた空のどこかから、一本の蜘蛛の糸が月にキラ〳〵光り乍ら下つて來て、小舍の近くを、フワリ〳〵と漂つてゐました。豚はフイとそいつを鼻の穴に吸付けてみますと、その蜘蛛の糸の先が何だかヂー、ヂー、と鳴つて居ますので、つひ釣込まれて耳に持つて行きました。すると、いきなり、

『豚小舍の豚よ、毎晩毎晩くういきい、くういきいエフ、エフ、などゝ、よくもお前までが俺に吠えたてる。このお月樣を泥棒と心得てゐるのか、無禮者め、以後遺慮致さぬと承知せぬぞよ。チリ――チリン。』と、いふ聲が聞えて來ました。

『アいけない。いけない。お月樣からの電話だ。どうも仕方がない。』と、豚は端からお言斷りを食ふので、澁い顏をして默り込んでしまひました。月に吠える評判もまだ立たないのに。

二三日默りこくつてゐて見たが、どうも退窟でやり切れないので、ふといゝ事を考へついて、

『あれなら、きつと怒られまいよ。』と、云ひました。それは醬油糟に吠えることでありました。

果して此れからは苦情が來ませんでした。それ以來醬油糟の額さへ見れば豚先生、

『くういきい、くういきい、エフ、エフ。』

と吠えるので、この評判はだん〳〵に擴まり、今はこの日本にまで知れ渡つて居ます。

嘘だと思ふなら、ためしに、醬油糟を持つて豚小舍の前に行つて御覽なさい。（をはり）

化石島の話

中島孤島

（一）

アラビヤの名王ハルン・アル・ラシドの時、バグダッドに三人の婦人がありました。三人は姉妹で、そろひもそろつて花のやうな美人でしたが、不思議なことには、みんなひとり者で、廣い、立派な邸の中に贅澤なくらしはしてゐるが、何れもその素性を知つたものはありませんでした。

そこで近所でも、自然と、いろ〳〵な噂が立つてなにかよほどの祕密でもあるやうにいひふらされるやうになりました。中にも世間の噂の種になつてゐるのは、二匹の黑犬でした。それは人間ほどもあらうと思はれる大きな牡犬だといふことですが、戸外へは決して出さないので、だれも見たものはありません。たゞ毎夜近所の寢靜まつた時刻になると、邸の中から、二匹の犬の鳴き聲が聞こえるのです。その聲がまた何ともいへない悲しさうな聲で、聞いてゐても腸がちぎれさうになるくらゐでした。そしてこの悲鳴が一しきり續いたと思ふと、今度はなにかの樂器に合せて、身を切るやうな悲しい歌の調子が聞こえ出して、その調子がだん〳〵と高まつて行つて、しまひには女の泣き聲もまじつて、深夜の空氣をふるはして行くのがきまりでした。

こんなことから、この三人の女と二匹の黑犬の間には、何か大變な祕密があるのだといふ評判が立ちました。そしてある物すきな男がだん〳〵と樣子を搜つて見たところが、夜中にあゝして犬の鳴き聲が聞こえるのは、三人の女が二匹の牡犬を折檻するのだといふことが分りました。犬は毎夜鞭で打たれるので、もうすつかり痩せ細つて、骨と皮ばかりになつてゐるが、それをどういふ譯があるのか知らないがあの三人の女は、あの優しい顏にも似合はず、夜になるとひき出しては折檻するので、犬はあの通り悲鳴をあげるのだといふことになりました。

けれども三人の女が、なぜ二匹の黑犬を、そんな風にしていぢめるのか、といふことはだれにも分らなかつたので、この疑ひがもとになつて、いろいろな不思議な噂が立てられるやうになつたのです。

この噂がだんだんひろがつて、しまひには皇帝の耳にまではひりました。そこで皇帝ハルン・アル・ラシドは、この三人の婦人を呼び出して、こんな噂の立つやうになつた譯をたづね、その素性を包まず申立てるやうにといひました。その時三人の姉妹のうちで、一番上のゾベイダといふ婦人が、しづかに皇帝の前へ頭をさげて、次の不思議な身の上話をはじめました。

（二）

『陛下』ともう一度頭を低く下げて婦人は語り出しました。

『わたくしがこれから申上げようとする物語りは實に不思議なお話でございますから、ことによると、作りごとではないかとお疑ひになるかも知れませんが、げつしてうそいつはりのない、本當のことでございます。只今お尋ねのあの二匹の黑犬でございますが、あれはわたくしとは、父も母も同じ、血を分けた姉妹でございます。しかしあの二人の姉が、犬になつた譯は、これからだんだんと申上げて行くうちにお分りになりませう。それからこゝにをりますこの二人は、これも姉妹でございますが、わたくしと

は腹ちがひの妹になつてをります。

父がなくなりました時、五千圓のお金をのこして行きましたので、それをわたくしたち五人で等分にして、千圓づゝもらひました。その時はこの二人の妹の母がまだ生きてをりましたので、二人はそのお

金を持つて、母と一しよに暮らすことになり、わたくしと二人の姉は、本宅の方へのこりました。その時分にはわたくしたちの母も、まだたつしやでしたが、間もなく母は病氣でなくなり、二人の妹はめいめいに自分の分け前を持つてお嫁に行つてしまひましたので、わたくしは廣い家へひとりぼつちでとりのこされました。

さうかうするうちに、上の姉の夫は、自分の財産を賣拂つたお金と、姉の持參金を資本にして、姉と一しよにアフリカへ商賣に出かけました。すると次の姉の夫も、やつぱり一儲けするつもりで、自分の財産と姉の財産を一しよにして、これも夫婦して外國へ行つてしまひました。それから四年ばかりの間二人の姉からはなんのたよりもありませんので、どうしてゐるかと、いつも案じてをりましたが、ある日上の姉が、まるで乞食のやうになつて、ひよつくらこの町へかへつてまゐりました。

わたくしは姉がそんな情ない姿になつて、かへつて來たのを見ても、もう胸が一ぱいになつてしまつてもやさしい言葉をかけて、慰めながら、だん〳〵事情をきいて見ますと、姉の夫はむかうへ行つてから大へんお金をつかひ、たうとう一文なしになつて姉を棄てゝしまひました。姉は見ず知らずの土地で夫に棄てられたので、どうにもかうにも仕方がなく、みち〳〵大變な苦しみをして、やつとこゝまでかへつて來たことを話して、涙を流して、夫の不人情を訴へるのでした。

姉の涙を見ると、わたしも一しよに泣いてしまひましたが、姉はそのうちに涙をふいて、

『もう何にも言つておくれでない、みんな神さまの定めておいたことなのだから。』と申しますので、わたくしもその上なにも尋ねるのはやめて、姉をお湯に入れ、新らしい着物を着せてかういひました。

『姉さん、あなたは目上の方ですから、わたくしはあなたを母とも思つてをります。あなたのおるすの間に、あたくしの方は大變都合よく行つて、お金も大分ふえましたし、それに養蠶も大當りだつたんです。ですから、もうけつしてあなたには不自由をさせるやうなことは致しませんから、これからいつまでもこゝにゐらつして下さい。』

それを聞くと、姉は涙を流して喜びました。そして幾月かの間われ〳〵は心持よく一しよに暮してをりましたが、その間も姑終次の姉の噂をして、たよ

りのないのを不思議に思つてをりました。
するとある日のこと、姉と二人で次の姉の噂をして、『一體どこにどうしてゐるのだらう？』なぞと話してをりますと、そこへひよつこりと噂の主が顔を出しました。わたくしはびつくりして、つく〳〵その様子を見ると、この姉も上の姉と同じやうに、乞食のやうになつてかへつて來たではありませんか。だんだん聞くと、やつぱりお金をなくなしたあげく夫に棄てられたと申しますので、わたくしは上の姉にいつたのと同じやうに、言ひ慰めて、一しよに暮すことにいたしました。かうしてわたくしはまた二人の姉と一しよに暮すことになりましたが、一年ばかりすると、二人の姉は私に向つてかういひました。
『さういつまでもお前の厄介にばかりなつてもゐられないから、もう一度夫を持ちたいと思ふが、どうだらう？』
かう突然に相談をかけられたので、わたくしはびつくりして、姉の顔をながめました。
『姉さん、なんでそんなことをおつしやるのです。』とわたくしは姉のいふことを信じられないやうにきかへしました。『どうしても獨身ではゐられないとおつしやるならば、別ですが、わたくしに厄介をかけないために、もう一度お嫁に行くとおつしやるのでしたら、本當にもうそんな心配はなさらないで、これまで通りこゝにゐらしつて下さい。かうして三人で暮してゐる分には、少しも不自由はいたしませんから。』
かういつて見たが、姉たちは何とも言はずに不服さうな顔をしてゐるので、わたくしはまた言葉をつづけて、
『それにしてもお二人がもう一度お嫁に行くお考になつたのが、わたくしには不思議でたまりません。この前でもう充分こりてゐる筈ではありませんか？ねえ、本當に親切ないゝ夫といふものは、めつたにありはしませんよ。ですからまあ〳〵わたくしの言ふことを疑はないで、これまで通り、氣樂にこゝで暮すやうに考へなほして下さい。』といつて、すすめましたが、姉たちはどうしてもわたくしの言ふことをきいてくれず、たうとう自分で夫を見つけて、お嫁に行つてしまひました。

それでも姉のことですから、お嫁に行く時には、わたくしの財産のうちから幾分かのお金を分けて、持參金にもたせてやりましたが、二三ケ月たつと、二人ともまた一文なしになつて、かへつて來て、わたくしの前へ頭をさげて、わたくしの忠告をきかなかつたことをあやまりました。そして、
『ほんたうにすまないことをしました。お前は妹ではあるが考はわたしたちよりもずつと年をとつてゐる。どうかかんにんして、もう一度一しよに暮させておくれ。もう二度とお嫁に行くなぞといはないから。』といつて幾度もあやまるのでした。
かういふ我儘な姉でも、わたくしに取つては目上

ですから、さういはれて見るとつひ氣の毒になつて、『お二人ともよくかへつて來て下さいました。なんの妹に遠慮がいりませう。いつまでもうちにゐらしつて下さい。身内といつてはあなた方のほかには、もうひとりもないのですもの。』といつて、二人をいたはつて、それからまた一しよに暮すことになりました。

（三）

『それから一年ばかりは、何事もなく暮してをりましたが、その間にもわたくしの身代はいよ〳〵ふえるばかりでしたから、わたくしもこれを資本にして一つ商賣をやつて見ようといふ氣になりました。そこで二人の姉にも相談して、バルソラの港で、一艘の船を傭ひ、それへバグダッドから持つて來た商品や食料品などを積み込みました。

いよ〳〵出帆の用意が出來ると、たわくしは二人の姉に向つて、

『あなた方はわたくしのかへるまで、こゝで待つてゐて下さいますか、それとも一しよにいらつしやいますか？』ときくと姉たちは口をそろへて、かう答へました。

『一しよにつれてつておくれ、おまへがをらないでは淋しくつてたまらないから』

で、わたくしは二人の姉と一しよに船へのりこんで、バルソラの港を出發し、間もなくペルシャ灣を離れて、太洋の中へ乘り出しました。

わたくしは、はじめインドへ行くつもりで船長によくいひ含めておきましたのですが、どう舵を取りちがへたものか、いくら行つても目的の地へ着かないばかりでなく、船は十二日の間太洋の中を走つてとう〳〵名も知らない海へ乘込んでしまひました。それでもこの十二日の間は、海上が穩やかでしたから、みんながい〳〵氣持になつて、だれ一人針路をとりちがへたことに氣がつくものは、ありませんでした。

すると十二日目になつて、遠くの方に陸の影が見えはじめました。だん〳〵近よつて見ると、そこには一つの高山が聳え立つて、その裾に大きな都會がひろがつてゐるのが、見分けられました。

わたくしどもは、久しぶりで陸を見たので、みんなが大喜びをして船長に、

『あの都は何といふところです？』と尋ねましたが船長は當惑したやうな顏をして、かう答へました。

『どうも分りませんね。今日までまだこんな町を見たことがありませんし、それにこの海へはひつたのは、今が始めてですから、少しも見當がつきません。しかしとにかく無事に着いたのですから、あなた方は一先づ上陸して、品物をおもちになつて、間がよかつたら交易をなすつたらよろしいでせう。それでなかつたら、二日ばかり碇泊して、食料品でも積みこんで行きませう。』

船は間もなく港へはひつて、碇をおろしたので、わたしたちはすぐに小船へのつて、島へ上りました。そしてまつすぐに町の門へ進んで行くと、門の前には澤山の番兵が、めいめいに武器をもつて、坐つたり、立つたりして、みんな恐しい顏をしてこちらを見つめてをりますので、わたくしはぎよつとして、立どまりましたが、不思議なことには、その番兵たちが、まるで生人形かと思はれるやうに、ぢつとして、手足も動かさなければ、目ばたきもしないのです。思ひきつて、そばまで行つて見ると、その番兵たちは殘らず石になつてゐるのでした。

それと知つた時の、わたくしたちの驚きはどんなでせう。それでもまだこはいもの見たさで、わたくしたちはこは〳〵町の門をはひつて行きました。そして街から街へと進んでゆきましたが、人間といふ人間は殘らず石になつて、ぢつと立つてゐるばかりで生きた人間にはひとりもあひませんでした。そ

のうちに市場らしいところへと出ましたが、軒をならべた店々が、大抵戸をしめきつた間に、ところ〴〵店をあけてゐるうちもあつたので、その中をのぞいて見ると、家の人はみんな石になつて、ぢつと

坐つてをりましたが、品物やお金なぞは、元のまゝで、だれも手をつけた樣子もありません。姉たちは珍らしい物や、金目のものに氣をとられて、方々の店へはひつて行つて、中々出て來ませんので、わたくしはひとりでこの市場を通りぬけて、先の方へ行つて見ました。

しばらく行くと、道はだん〴〵とのぼりになつて最後に立派な門の前へ出ました。門の扉はぱつと兩方へ開かれてをりましたが、扉の金具は、殘らず金の延板した。門の前には絹で織つた立派な幕が張られて、入口の上には一つの燈籠がさがつてをりました。わたくしは、その建物の樣子で、すぐに王宮だと思ひました。

この島へあがつてから、今までに生きた人間はひとりも見かけなかつたので、この中へはひつて見たら、ひよつとして生き殘つた人でもゐるか知れないと思ひましたから、わたくしはづか〴〵門の中へは

ひつて行きました。玄關まで行くと、そこには四五人の番兵がをりましたが、それもみんな石になつて立つたものは立つたまゝ、坐つたものは坐つたまゝで、固まつてをるのでした。

玄關から長い廊下を通つて、一つの大廣間へはひると正面の王座についた王の左右には、廷臣や諸大臣がずらりとならんで、みんな石になつてゐるのがすぐに目につきました。王のそばまで行つて見ると王は金の糸で一面に繡をした、目もさめるやうな上衣を着て、星のやうに寶石ををちりばめた立派な椅子にかけてをりましたが、そのうしろには、五十人の黑ん坊の護衛兵が、劒を拔いて、王を守護したまま、石になつて立つてをりました。

わたくしはそこにゐるのが、なんだか氣味がわるくなつたので、また廊下へ出て、少し行くと、金の門で隔てられた立派な建物の前へ出ました。すぐにそれは皇后の御殿だと分りました。門をはひつて行くと、一つの廣間の中に、宦官らしい澤山の黑奴がみんな石になつて坐つてをりました。その廣間を通つて、わたくしは一つの立派な部屋へはひりました。四方の壁には美しい絹の壁掛が長く垂れて、室

内の飾りは目もくらむやうに立派でしたが、その部屋には一人の貴婦人が石になつてをりました。澤山の眞珠を綴りこんだ上衣や寶石のきら〳〵した金の冠や、いろいろの球が胡桃ほどもあらうと思はれる眞珠の頸飾などで、すぐにそれは皇后だと分りました。そばへよつて見ると、その美しいことといつたら、わたくしはまだ生れてからこんな美しい人を見たことがないと思ふくらゐでした。

わたくしはしばらくそこへ立つて、皇后の姿や部屋の飾に見とれてをりました。敷物や蒲團や長椅子などは、目もさめるやうなインドの織物で作られてそこには金と銀で人や獸の姿が生きたやうに織り出されてをりました。

(三)

皇后の部屋を出て、なほ同じ立派な部屋をいくつか通つて行くうちに、最後に一つの大きな部屋へまゐりました。部屋の正面には五六段の階段があつてそれをのぼると大理石の床に、金で縫をした敷物を敷きつめ、そこにどつしりとした金の椅子がすゑられてをりました。この王座の上には、眞珠や寶石で美くしく飾つた立派な菌が敷かられてをりましたがその菌の中から異樣な光が出て、キラ〳〵あたりを照してゐるのが、すぐわたくしの目につきました。なにが光つてゐるのかと思つて、そばへ寄つて見ると、そこには駝鳥の卵ほどもあらうと思はれるダイヤモンドが、低い臺にのせて、そこに据ゑられてありました。それは本當に針で突いたほどの疵もない純粹な無垢な寶石でした。光はこの玉から出てまぶしいほどキラ〳〵と輝いてをるのでした

この部屋のうちには、また二本の火のついた火把がありました。わたくしには、それがなんの役に立つのか分りませんでしたが、併しこんな火がひとりで燃えてゐる筈はありませんから、この宮殿のうちに、だれかこの火をつける人がゐるにちがひないといふ推察がつきました。この外にもまだいろいろな珍らしいものや、今申上げたダイヤモンドにも劣らないほどの寶物が、この部屋には澤山ありました。

この部屋を出て、またさきへ行きますと、どの部屋もどの部屋も、みんな扉があいてゐたりあけかけになつてゐたりしましたから、一々中へはひつて見ましたが、どれもみんな目のさめるほど立派な部屋ばかりでした。

こんな風に、ゆくさき〳〵で、いろ〳〵な珍らしいものにぶつかるので、わたくしは殆んど船のことも二人の姉のことも打忘れて、夢中になつて歩いてをりましたが、いつの間にか日が暮れかけたので、びつくりして外へ引かへしました。けれども外へ出ようとすると、どこで道をまちがへたのか、いくら行つても、出口が見つかりません。ぐる〳〵廻つてゐるうちに、もう一度あの金の椅子と大きなダイヤモンドと把火のある元の廣間へ出てしまひました。その時にはもうまつ暗になつてゐたので、わたくしはともかくもこの部屋で一夜をあかして、夜が明けたらすぐにこゝを出ようと決心して、椅子の上へどつかりと腰をおろしました。

かうしてゐるうちに、だん〳〵夜が更けて行つて丁度夜半時分でしたが、どこからともなく、かすかに男の聲で、コーラン（回々教のお經）を讀む聲がきこえて來ました。それを聞くと、わたくしは思はず立ち上つて、一本の把火を手にとつて、この部屋を出かけました。そして部屋から部屋と、だん〳〵に聲のする方へ進んで行くうちに、扉のあけかけになつた一つの小部屋の前へ來ました。お經の聲はどうもこの部屋から出るやうでしたから、わたくしは扉の前に立ちどまり、把火を下へおいて、扉のすきまから中をのぞいて見ました。そこは禮拜堂でした。一方の壁にはわたくしどものお寺にあるやうな聖壇が設けられて、天井から吊したランプの光の下

に、若い、きれいな人が、小さな敷物を敷いて、經机に向つて、一心にコーランを讀んでをりました。

その樣子を一目見ると、わたくしはひりでに頭がさがるやうな心持になりました。人間といふ人間は殘らず石になつたこの都の中に、この人だけ、どうして一人きり生き殘つたのかと思ふと、なにかそこには人間の力では、及びもつかない不思議なことがあるやうに思はれたからでした。

わたくしは半分ほど閉つた扉をそつと押しあけて、中へはひると、聖壇の前へ行つて、聲を張りあげてからお祈りを致しました。

『わたくしどもの航路に平安をおあたへ下すつた榮ある神よ、どうぞ歸り路も無事にお守り下さいませ。神よ、願はくばわたくしの、祈りをおうけ下さい。』

すると若者はしづかに頭をあげて、わたくしの方をながめながらかういひました。

『奧さん、あなたはどういふ方です。どうしてまたこんなところへいらしつたのです？　それをうかゞつた上で、わたくしも自分の素性なり、わたくしの身に起つた出來事なり、又この都の住民が御覽の通りの有樣になつた譯や、この恐ろしい不幸の中で、わたくしだけが、無事に、安全にかうしてをります譯をもお話いたしたいと思ひます。』

かういはれたので、わたくしは自分の生れた國のこと、航海に出たわけ、途中で針路をとりちがへて圖らずも、港へ着いた次第をずつと話した後、この都にはひつてあの物凄い光景に胸を打たれたことをいひ出して、約束の通りこんな有樣になつた譯を聞かせていたゞきたいと申しました。その時若者は、

『奧さん、ちよつとお待ちください。』といつて、しづかに經文を閉ぢて、立派な箱に入れて、聖壇の上へのせました。

この時わたくしと若者の樣子を見ると、その顏は月のやうに美くしく、その起居になんともいへない

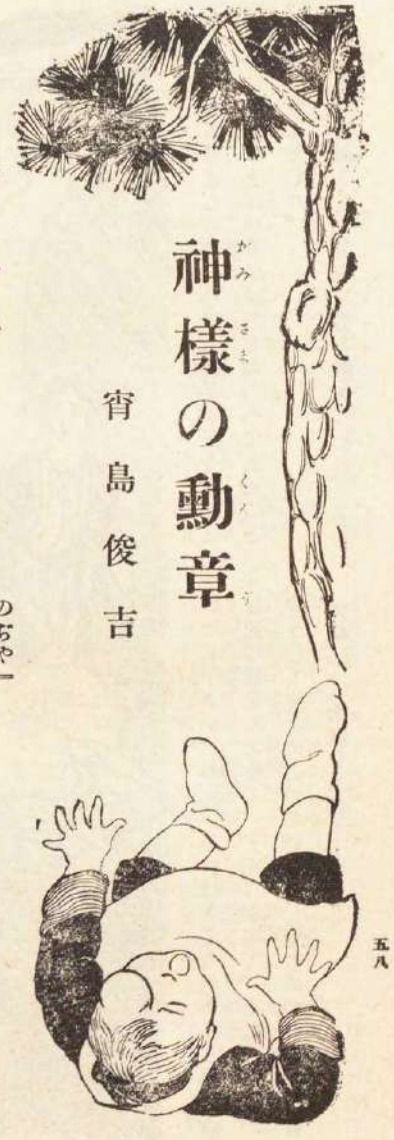
上品なところがあつて、一目見たばかりで、わたくしにはこれまでに覺えのない妙になつかしい氣持になりました。若者は席へかへると、わたくしを自分のそばへ坐らせました。けれども相手が話をするまで、わたくしはまた自分の感情をおさへてゐることが出來ませんでした。

『あなた』とわたくしは聲に力を籠めていひました。

『おなつかしいあなた、どうぞ早くきかせて下さいまし　わたくしがこの都へはひつてから、目にふれたいろ〳〵な不思議の起つたわけを。さア早くきかせて下さい。ねえ、あれほどの人があんな不思議な死に樣をした中で、どんな神業で、あなただけがかうして生きのこつていらつしやるのか、そのわけをね。』（次號をお待ち下さい）

神様の動章

宵島俊吉



正夫さんのお爺さんの目の上には、それはそれは大きな丹瘤がありました。誰でも、丹瘤と云へばお爺さんを思ひ出し、お爺さんと云へば丹瘤を思ひ出す程見事なものでありました。正夫さんはその丹瘤が、お爺さんばかりにあつて、お父さんにもお母さんにも誰にもないのが不思議でたまりませんでした。

『おぢいさん、おぢいさんはその瘤をどうしたの』

と、ある日正夫さんがたづねると、

『これはな、おぢいさんだけが神様からいただいたのぢや』

と、瘤をなでながらお爺さんは答へます。

『どうして、いただいたの』

『さあ、お爺さんがえらいからぢやらう』

『えらい人は神様がくれるの』

『さうぢや、あのねお父さんの勳章を知つてゐるぢやらう？　あれはお父さんが戰爭で強かつたので、天皇陛下からいただいたのぢや。わしのこの瘤は、神様からもらつた勳章なのぢや』

『お爺さんは戰爭に行つたの？』

『いいや』

『ぢやあ何のとき神様からもらつたの』

『ははゝゝゝ、そりや云へないな。正坊もえらくなつたらばわかるよ』

と、お爺さんは笑つてしまつて、それは何と聞いても、どうしても瘤をもらつたわけを話してはくれません。しかし正夫はどうかしてそのわけが知りたいので、毎日々々考へてゐますがどうしてもわかりません。時にはお父さんやお母さんにも聞いて見ますが、やつぱり誰もそのわけを話してくれないのです。

『おぢいさん、その瘤ははづせないの』

『うむ、神様のつけて下すつたものぢやから人間の力ではづすことは出來ん』

『さう、ぢやあ誰にもやれないのね』

『うむ、しかしな、正坊がえらくなつたらば神様にたのんでもらつてやつてもいゝが』

『いらないや、目の上にぶらさがつてゐちや、うるさくつてたまらないでせう？』

『なあにうるさいものか』

とは答へるものゝ、お爺さんはやつぱしときどきはうらめしさうに上づかひをするのです。

又もやある日、正夫さんはお爺さんに話しかけました。

『お爺さんの瘤は赤いのね』

『赤いのがいゝんぢや。お父さんの持つてゐる旭日大綬章と云ふ勳章は眞中だけが赤いが、わしのはみんな赤いのぢや』

『でもお父さんの赤いのは、ハ、ハ、ノーよ』

『だから、神様の下さるのもめのうへさ、ハ、ゝ、』

何と云つてもお爺さんは笑つてごまかしてしまひます。又正夫にしてみれば、おぢいさんがよく敎へてくれない程瘤の事が氣にかゝつてなりません。

さて、お爺さんの方にしてみれば、まるで毎日のやうに正夫さんが丹瘤のことばかりたづねるのでどうもこまつてしまつて、何とかしてこれを取つてしまひたいものと思つてゐました。實際この頃では正夫さんに瘤のことを云はれる毎に、だんだん瘤が大きくなるやうな氣がします。

ある日又しても正夫は

『お爺さん、瘤のある人なんてちつともないのね』

とたづねはじめました。

おぢいさんは又かと思ひながら、

神樣はなか〳〵下さらないよ』

『ぢやあどうしたら下さるの？』

正夫さんがあんまりうるさいので、お爺さんはとうとう、

『うるさい〳〵、もうそんな話はやめぢや〳〵』と逃げ出してしまひました。正夫さんはどうもそれが不思議でたまらないのです。神樣にいただいた勳章ならおぢいさんにはきつと何か手柄があるんだのに、なぜそれを話してくれないのだらう。お父さんだつて勳章を

もらつた時の戰爭の勇ましい話をとき〳〵して下さるのに——と思ふのでした。

その翌る日の朝のことでした。正夫が起きていつものやうに庭に出て遊んでゐると、顏から頭へまつ白に繃帶したお爺さんがお座敷に寢てゐるのが見えました。さつきから今朝はどうしてお爺さんが出て來ないのかと不思議に思つてゐた所なので、正夫はまるで泣き出しさうになつて、お爺さんの寢てゐらつしやる所に走つてゆきました。

お爺さんは、その朝早く起きて、まだ正夫さんの起きないうちに、近所のお醫者の所に行つて、丹瘤を手術してもらつたのでした。血が大變に出たと云ふので、お爺さんは眞蒼になつて歸つてきて、そのまゝ寢てしまつたのです。でも、勿論心配する程のことはないのでした。

けれどもそれを知らない正夫は、お爺さんの枕元に坐つて、

『お爺さんどうしたの』

と、心配さうに尋ねました。するとお爺さんは靜かに目をあいて、

「何でもないよ」と云ひました。

『怪我をしたの？』

ときくと、お爺さんは首をふります。しかし正夫さんは何だか一層心配になるばかりです。

まもなく正夫さんは『おや』と思はず聲をあげました。お爺さんの目の上の例の丹瘤のことを思ひ出したのです。そこで正夫は、

『おぢいさん、瘤をどうしたの』

と尋ねると、お爺さんは笑ひながら、

『今朝な、その瘤をとられたよ』

と云ふのです。

正夫は駭いて、

『誰にとられたの』

と聞くと、

『そのお庭の松の木にぢや』

お爺さんはまた笑つて答へました。

そこで正夫さんはまた庭に出てゆきました。そして、お爺さんが瘤をとられたと云ふ松の木を憎らしさうに見あげました。

すると成程、松の木の枝に大きな瘤が一つあるではありませんか。

『や、あるぞ、あるぞ』

と、思つた正夫さんは、いきなり松の木に登りはじめました。それはお爺さんの仇うちに、あの瘤を取り返してやらうと云ふ決心からです。

なにしろ正夫さんはまだ木のぼりなんかしたことのない小さい子供だつたので、今一息で瘤のところにとどかうとする所まできて、とう〳〵足を踏みすべらして、

『あつ』……と云ふ聲と共に、地面に落つこちてしまひました。

なにしろ一人つ子の正夫さんのこの出來事なので家中は大騒動をはじめました。寝てゐたお爺さんまでが飛び出してきて、正夫さんを抱き起しました。しかし運よく、正夫さんは打ちどころがよかつたと見えて、何處にも怪我と云ふ程のものはありませんでした。ただ、したたか目の上を松の根にぶつけたと見えて、其處に大きな〳〵瘤が出來ました。

『おや〳〵正坊がわしの瘤を取返してくれたな』

と、お爺さんがいひました。

『おぢいさんの仇討ちをしてくれたので神樣 下すつたのぢや』

と、お爺さんをはじめ、父さんも母さんも、かはるがはる正夫さんの瘤に唾をつけてはなめてやりました。

それにしても、神樣からいただいたと云ふこの瘤の痛さに、正夫さんはやつぱりし〳〵と泣き出してしまつたのであります。（をはり）

敵の前で稲刈

植松壽樹

眞田昌幸と其の子幸村とが、信州上田の城に立籠つて、關東の大軍を對手に花々しく戰つて居る時のことでした。幸村はまだ年こそゆきませんでしたが、有名の智慧者で、戰上手でしたから、いつも、意表外な計略を考へ出しては敵を惱まして居りました。少しばかりの兵で大軍を引受けながら、容易に負けなかつたのも、そのためです。

寄手の方では、度々幸村の計略にかゝつてひどい目に逢ふものですから、終には疲れてしまつて、唯遠卷に取卷いて、兵糧攻にするより外仕方がありませんでした。

或日のこと、寄手の兵が遠くで眺めて居ますと、城の中から大勢の兵が出て來て、俄に田の稻を刈りはじめました。丁度其の頃は、もうそろ〳〵早稻を刈る時節になつて居たのです。それを見ると、寄手の軍も流石に驚かずには居られませんでした。何とふ大膽な振舞でせう。十重二十重に取圍んだ敵の目の前で、悠々と稻を刈るとは。さう思つて、はじめの中は呆れて眺めて居りましたが、だん〳〵に其の心持が憎みに變つて行きました。

『にくい奴等だ。敵の見て居る前で平氣で稻を刈るとは、あまり吾々を馬鹿にした仕打だ』さう云つて見て居る者は腹を立てました。

しかし、大膽といへば、大膽ですが、危險と知り

ながら、わざ〳〵こんなことをするのは、何かわけが無ければなりません。つまり永の籠城で、いよ

いよ兵糧がなくなつたのかも知れません。いや、それに違ひないでせう。腹が減つては戰が出來ぬ。切羽詰つてとうとうこんな危險なことをはじめたのに相違ありません。兵糧が盡きれば、流石智慧者といはれた眞田の城も、忽ち落城は知れきつた話です。

『あの稻を持つて歸らせては一大事だぞ。さあ、追駈けて鏖にしてしまへ』

直ぐさま、かう云ふ命令が下りました。

寄手からは忽ち一萬人許りの兵が繰出されました。

眞田方の兵は、丁度其の時には刈取つた稻を束にして、背負つて城に歸らうとして居るところでした。そこへ不意に、一か、まりになつた敵兵が、わつと聲を上げて押寄せて來たのですから、その周章かたといつたらありません。

寄手の方では、一束の稻も城に入れてはならぬと先廻りをして歸り途を塞いでしまひました。さあ、眞田の兵は益々あわてるばかりです。とうとう、折

角刈つた稻を拋り出して、我れ先にと城へ逃げこんでしまひました

寄手はあとで大笑ひです。

『何て狂瀾な奴等だらう。晝日中稻刈に出るなんて眞田らしくもない、まずい遣方だ』

『それにしても、兵糧がなくなつて、嘸困ることだらう。城の中ではお腹を空かして、待つて居るだらうにね』

など〳〵、口々に惡口を云つたり、嘲つたりしました。さうして捨て〳〵行つた稻束を拾つて本陣に引上げて行きました。寄手は、兎角、眞田の計略に乘せられて、ひどい目に逢はされ通しなのに、偶にこんな勝を得たのですから大よろこびです。

『お蔭樣で　美味しい新米が食べられますよ。皆さん、お手柄でしたな』

など〳〵、本陣に殘つて居た人達が、戰から歸つた者に冗談を云ふと、

『ナアニ。味方じちやんと、稻を刈つて、然も持ち好いやうに束にまでして置いて呉れたのです。敵ながら深切なものです』

戰から歸つた者は得意さうに、こんな返事をしてお互に笑つて居ました。

その中に夜になりました。今日の樣子で察しると、城ではいよ〳〵兵糧が盡きたことがわかります。して見れば、近いうちに總攻擊があつて、城は忽ち落ちるでせう。然し、對手は曲者、死物ぐるひになつて何を仕出かすかわかりません。夜討をかけられないやうにと、城の方の見張りは一層嚴重に守つて居りました。城の中は、しかし、ひつそりと靜まりかへつて居ります。夜は次第に更けました。替り合つて寢る時刻になりました。

すると、何處からともなく變な匂がして來ました。

『何だ。變だぞ』

はじめて氣が付いた者は、何の匂か嗅ぎ分けよう

と、顔中を鼻にして、犬のやうに嗅ぎ廻りました。それは紛れもない焔硝の匂です。

不思議なことがあるものだ。焔硝の燃える筈などはないのだのに。と彼方此方探して見ると、どうでせう。今日、得意で分捕りして來た稻の束から、青い焔が盛に噴き出して居るではありませんか。『火事だ〳〵』と大聲に怒鳴りながら、もう夢中です。そこらに落ちて居た棒切を拾つて、叩き消さうとしましたが、もうそんなことでは防げない程、火の手は早く稻束から稻束へと移つて行きました。

人々が騒ぎ出した頃には、火は陣屋から陣屋へと燃え移つて、手のつけやうもなくなつて居ました。

寄手に俄に大騒動です。刀を燒くな。鎗を持出せ。馬が燒け死ぬぞ。そら具足櫃だ。おれの鐵砲は何處へやつた。

城の中では、さつきから、寄手の樣子を窺つて居ましたが、計略圖に當つて、敵の陣屋が大騒動と見るや、三ヶ所の門をさつと開き、一度にどつと攻め寄せました。亂れきつた寄手は、もう戰ふどころではありません。大將の號令などは耳にもはひりません。我勝ちに小諸を指して逃げてしまひました。

これは無論幸村の計略で、稻を束ねると見せて、實はその中へ密に焔硝を入れて置き、自然に火の出る仕掛にして置いたのでした。

○

これも同じ時の戰爭です。あまり城攻の永びくのに業を煮やした關東勢は、今日こそは一息に攻落してしまはふと、四方八方から隙間もなく攻めかけました。城に近寄つた兵達は、まづ空堀に飛びこみました。それから石垣を攀ぢ上り、塀に手をかけて、今や城の中へ乘り入らうとするばかりになりました。

すると、其の時まで音もしなかつた城の中から、不意に大勢の兵がどや〳〵と塀の上に現はれて來ました。さうして、手んでに、何か薄いものを投げ散らすのでした。それが、ひら〳〵ひら〳〵と數限りもない程飛んで來て顏などへ當りますが、唯五月蠅いだけで別段痛くも何ともありません。見ると、何のことだ、それは竹の皮でした。

あまり馬鹿〳〵しいので、寄手は何とも思はず、拂ひ除け〳〵しながら、進んで行きますと、城の中から、今度は、長い柄杓を持つた兵が、塀の上に出て來ました。さうして、煮えたぎつたお粥を、ざぶりざぶりと振りかけるのでした。

熱い、と云ふと思はず手が離れて、もう石垣から轉がり落ちるのです。それが、續いて登つて來る兵の頭の上へ落ちかゝると、はづみで、後から後へと、石のやうにごろごろ轉つて行くのでした

熱いのを我慢して尙ほら、攀ぢ登らうとすると、鎧の隙間から沁み込むお粥の熱さ。忽ち火ぶくれが出來て、其苦しさはとても辛抱が出來ません。城の中からは、用捨もなく汲では注げ、汲では注します。

これは堪らぬと思つて逃げ出すと、はじめは何とも思はなかつた竹の皮が、今はお粥のために、ぬるぬるになつて、踏むと、つるり〳〵と辷るやうになつて居るのでした。見事に計略に乘せられた寄手はすつかり周章てゝしまひました。歩くと辷り、駈け出すと尻餅をつき、起きたり轉んだり、身體中お粥だらけになつて、這々の體でやつと本陣まで逃げることが出來ました。（をはり）

木がらし

達崎烏嘴

カラ〳〵木がらし
葉が枯れる
濱街道は
汐枯れる

霙の降るころ
日暮れころ

すゝきが枯れてた
濡れてゐた

町のえんとつ
遠い日も
鹽燒くけむりの
細い日も

カラ〳〵木がらし
葉が枯れる
汐枯れ葉つばは
みな枯れる

漁夫と惡魔

秋庭俊彦

前回までの梗概。この國の王樣は、ある日、漁夫の案内で山に登つて行くと不思議な宮殿の前に出ました。今まで見たこともない宮殿なので、王樣が中へ入つて行つて見ますと、そこに一人の年若い王樣がゐました。この王樣は身體の半身が石になつてゐるのです。驚いて譯を聞きますと、惡い妃のため呪はれてさうなつたのだと話しました。

四、王妃の魔法

黑島の若い王樣の悲しい物語りをお聞きになつたので、王樣は、

『その惡い魔法使はどこに隱れてゐるのです。それから、その死にかゝつた曲者はどこに住んでゐるのです。』とおきゝになりました。

『その男は、あすこに圓屋根の見える「涙の宮殿」にゐるのです。その宮殿は、門のわきのお城につゞいてゐます。魔法使の王妃は、どこに隱れてゐるのかわたしは知りません。でも、毎日夜明け前に、わたしをさん〳〵苦めてから、その男のところへ會ひに行きます。その男の命がたすかるやうに、藥をはこんでやつては、その男が傷を負つてから、一言も口をきかないのを悲しんでゐます。』

『不仕合せな王子よ、これほど不思議な不幸に出會つた人のことを、わたしはきいたことがない。あなたの物語を書く人は、いま迄誰ひとり考へたことをない、神變不思議な話をかくことが出來ませう。』

かう云つてから、王樣は、自分がよその國の王樣だと云ふことや、このお城へ來たわけやを話しました。そして若い王樣を助け、魔法使を退治する手だてを考へました。その中に日が暮れましたので、王樣はすこしやすみました。が、若い王樣のはうはすこしも眠らずに夜を明かしました。魔法にかゝつてから、いつも、さうだつたのです。若い王樣は、早くこの苦みからのがれたいと、今はそのことばかりを思つてをりました。

次の朝、王樣は、夜の明けないうちに起きあがり、自分の企てを行ふために、足手まとひになる上衣を片隅へかくしてから、「涙の宮殿」へでかけました。そこには數限りなく、白蠟の灯があか〳〵と輝き、立派な細工をほどこした幾つもの箱から、いゝ香の匂ひがたちのぼつてをりました。王樣は、その部屋の寢臺に黑ン坊が寢てゐるのを見ると、劍をひきぬいて、たゞ一打ちで殺してしまひました。それから死骸をお城の方へ引きずつて行つて、井戸のなかへ投げこんでしまひました。そのあとで、王樣はあと戻りして、黑ン坊の寢臺へはひり、蒲團の下へ劍をかくし、自分の企てをうまくやらうと待ちかまへてをりました。

魔法使の王妃は、それから間もなく、お城へやつて來ました。王妃は最初若い王樣を弾しこめた部屋へ行き、牛の鞭で力まかせにびし〳〵打つました。

可哀想な若い王様はどうすることも出來ずに、お城中にきこえるやうな聲をあげて泣きました。

『あなたは情知らずです。いくら泣いても、わたしは許してあげません。』と王妃は云ひました。

王妃は、牛の鞭で百打つてしまふと、錦の王衣のうへに汚ならしい山羊の毛の織物をかぶせてから、『涙の宮殿』へ行きました。そこへはひると、王妃はさも悲しさうに涙をこぼして、黒ン坊の寢てゐた寢臺に近よりながら、

『あゝ、お前はまだ口をきいてくれないの。お前はわたしが死ぬまで、一言もわたしを慰めてくれないつもりなの。ねえ、お願ひだから、たつた一言でもものを云つておくれ。』と王様が寢てゐるとは氣がつかずに云ひました。

王様は深い眠りからさめたやうに見せかけ、黒ン坊の言葉つきを眞似しながら、

『全知全能の力をもつてゐらつしやるのは、たゞ神様ばかりです。』と嚴かな調子で云ひました。

この言葉をきくと、夢にもそんなことは思はなかつた魔法使は、さも嬉しさうな叫び聲をあげました。

『あゝ、夢ではないか知ら。お前がいま何か云つたのは、ほんたうにお前が口をきいたの。』

『不仕合せな魔女、あなたはわたしの云ふことに返答をすることが出來ますか。』と王様は云ひました。

『まあ、どうしてお前はそんなにわたしを叱るの。』と王妃は答へました。

『あなたが毎日苦めてゐらつしやる若い王様の泣聲や涙のために、毎日毎晩わたしはすこしも眠れないのです。あなたが、はやくあの人の魔法をといてあげれば、わたしはとうに傷がなほつて、口がきけるやうになつてゐたでせう。わたしの口のきけないのも、そのためなのです。』

『それなら、わたしはお前を喜ばすために、何でもお前の云ふ通りにしてあげよう。あの人から魔法を

といてやればいゝの。』

『さうです。あの泣聲がわたしの命にさはらないやうに、今すぐに行つて、魔法をといてください。』と王様は云ひました。

魔法使の王妃は、すぐに『涙の宮殿』を出てゆきますと、水の一ぱいはひつたコップをとつて、その上で何か呪文を唱へました。水はまるで火にかけたやうに、ふつ／＼と沸いて來ました。それから王妃は廣間へはひつて、若い王様に近づくと、王様のからだに、その水をふりかけながら、

『神様が、あなたのからだをいま見るとほりのからだにお作りになつたのなら、このまゝ變らないであれ。けれど、もし魔法の力で、こんなからだになつてゐるのなら、あたり前の人の姿になれ。』と王妃は云ひました。

この言葉がおしまひになるかならないうちに、若い王様は、もと通り自由なからだになつたのがわかりましたので、夢のやうな喜びに打たれながら、のびのびと起ちあがりました。

その時、魔法使の王妃は、若い王様にむかつて、『このお城から出ていらつしやい。そしてもう死んでも歸つて來てはなりません。』と云ひました。

若い王様は、一言も答へずに、その云ひつけ通り、部屋を出て、森の奥深いところへ姿をかくしました。王様の企てが、うまくゆくのを待たうと思つたからです。

やがて、王妃は『涙の宮殿』にもどつて來ました。そしてまだ、黒ン坊のかはりに王様がゐるとは氣がつかずに、

『お前の云つたとほり、魔法をといて來たよ。』と云ひました。

王様は、そこでまた、黒ン坊の言葉つきを眞似しながら、

『ところで、まだそれだけでは、わたしのからだは

癒りません。たゞ、わたしの苦みをいくらか輕くしたゞけです。あなたはこの病の根を切りとつてくださらなければいけません。』と王樣は云ひました。

『わたしの愛する黑ン坊さん、病の根を切りとると云ふのは、どんなことなのです。』

『わかりませんか。わたしは、あなたが魔法で滅ぼした市街や、住民や、四つの島のことを云つてゐるのです。あすこの池の魚どもは毎晩水のおもてに頭を出して、あなたとわたしに復讐すると云つて、さわいでゐます。そのために、わたしの病がいつまでも長びくのです。これから急いで行つて、あれ等をもとの通りにしてやつて下さい。さうして歸つてゐらしつたら、わたしはあなたと握手しますから、わたしを助け起してください。』と王樣は云ひました。

この言葉に魔法使の王妃は、小躍りするほど喜んで、

『わたしの可愛い人、お前はもうすぐにたつしやになねるよ。わたしは、今すぐに行つて、お前の云ふとほりにして來るから。』と嬉しさうに叫びました。

王妃は、いそいで出て行きました。池のふちへ出

ると、王妃は手に一ぱい水をすくつて、池と魚にむかつて、何か呪文を唱へました。すると、そこらは忽ち昔のとほりの市街になりました。たくさんの魚は男や女や子供たちになり、マホメット教徒やキリスト教徒や、ペルシヤ教徒や、ユダヤ教徒になつて、何もかもが、昔のありさまに歸りました。家々や店は、建てかたも、住んでゐる人たちも、魔法にかけられない昔のまゝでありました。ひろびろとした場所に陣屋をつくつてゐた王樣の家來たちは、ふいにまはりが大きな、きれいな、にぎやかな市街になつてしまつたので、どんなにびつくりしたでせう。

魔法使の王妃は、かう云ふすばらしい變化をやり上げると、『涙の宮殿』へ歸つて、

『さあ、お前はもうたつしやになつたでせう。わたしは、お前の云ひつけた通りにして來たのだよ。さあ、わたしの手をとつて、立ちあがつておくれ。』と云ひました。

『もつと、そばへ寄つてください。』と王樣は、尙も黑ン坊の言葉つきで云ひました。王妃は近よりました。『もつと、そばへ。』と王樣はまた云ひました。王

妃はびつたりとそばへより添ひました。その時王樣は、起ちあがりながら、いきなり王妃の腕をつかまへて、自分の顏の見つからないうちに、劍の一と打ちで、王妃を眞二つに切つてしまひました。王妃のからだは、半ぶんは左へ、半ぶんは右へ倒れました。それを見すましてから、王樣は『涙の宮殿』を出て、黑島の若い王樣をさがしにゆきました。さつきから待ちかねてゐた若い王樣を見ると、二人は抱き合つて、

『お喜びなさい、王子、もう恐れることはありません。あなたの恐ろしい敵を殺してしまひました。』と王樣はおつしやいました。

若い王樣は涙をこぼさないばかりに喜んで、王樣にあつくお禮を云ひました。

これから、あなたは、この國で平和にお暮らしになることが出來るでせう。けれども、あなたは、わたしの國へおいでになりませんか。さうして下されば、この國にゐらつしやると同じ尊敬と名譽とのある位をあなたにさゝげます。』と王樣はおつしやいました。

『ありがたいお言葉です。でも、あなたは、あなたのお國が、すぐ行かれるほど近いところだとお思ひなのですか。』と若い王樣は云ひました。

『さうです、四時間か五時間かゝれば行かれます。』

『いゝえ、一年はかゝりませう。あなたがこちらへいらしつた時には、わたしの國が魔法にかゝつてゐましたから、それほど早くお出でになられたのです。けれども、いまは、魔法がとけましたから、何もかも、その時とはちがひます。でも、わたしは、あなたのおかげで助かつたのですから、一生御恩をわすれないために、わたしの國を見すてゝ、何處までも、あなたと御一緒にまゐりませう。』と黑島の若い王樣は云ひました。

王樣は、自分の國から、そんなにも遠く離れてゐるとは、とても考へられませんでした。でも、黑島の若い王樣は、たしかに遠いにちがひないと云つてをりました。

『けれども、そんなことは、どちらでも宜しい。あなたが、わたしのことを思つて、わたしの王子になつて下さるなら、いくら道は遠くてもかまひません。わたしは子供がないのだから、今からすぐに、あなたは、わたしの後嗣になつて頂きたいのぢや。』と王樣はおつしやいました。

王樣と黑島の若い王樣との話は、うまい具合にきまりました。そこで、若い王樣は、さつそく旅支度にかゝり、たくさんの家來や、町の人達から名殘りをおしまれながら、三週間たつうちに、すつかり用意をととのへました。

とう〳〵王樣と若い王子とは旅立ちました。寶物を一ぱい入れた若い王子の荷物を、百匹の駱駝にのせ、黑馬にのつた偉い家來を五十人あとに從へてゆきました。たのしい旅路でありました。王樣は前にお使者を出して、自分の國へ知らせてお置きになりましたので、王樣の行列がその國へはひりますと、お留守をあづかつてゐた大勢の家來たちが、お出迎へしました。町の人たちも、黑山のやうに集まつて來ました。そして幾日かの間、還幸のお祝ひがひらかれました。

王樣は家來の人たちをのこらず宮殿へおあつめになつて、不思議な魔法使を退治したことや『黑島』の王樣を御自分の後嗣に連れて來たことをお話になりました。そしてそれ〴〵家來の地位にしたがつて、お土產の贈物をくださいました。

それから漁夫はどうなつたかと云ひますと、若い王樣を助けたのは、漁夫からきいた話がはじまりだつたので、王樣はたくさんのお金を漁夫におやりになりました。そのおかげで、漁夫は、一生涯仕合せに暮しました。（をはり）

利王丸

（少年少女劇）

鈴木重正

人物

利王丸　年十五六のお小姓。
玄心　年十五六の茶坊主。
他に、武士一人。從者一人。

夜ではありましたが、高く聳えた松の樹の間から、畫のやうな明るい月の光が漏れくゐました。松の樹の下蔭に、屋根の低い白壁の建物が月の光に浮いて見えてゐました。白壁の中程は、低く大きな窓のやうに切つてあつて、頑丈な鐵格子が嵌つてゐました。右手の方に遠く微に、お城の本丸の屋根が見えてゐました。其方の方から、短い袴を穿いて頭を丸めた茶坊主の玄心が、何か小さな包を小脇に抱えて、忍足で出て來ました。十五六の少年で、小柄な身體を

一層縮めゝ、おづ〳〵と四圍を眺めてゐましたが、やがて、そつと鐵格子につかまつて、暗い中の方を覗込みました。

『もし、もし……、』

『……』

『もし、もし、利王丸さま。　利王丸さま……。』

『……』

『利王丸さま、利王丸さま。』

他聞を憚るやうな玄心のおど〳〵した聲は、しいん……とした夜の靜さを破つて、怖しい程はつきりと四圍に響きました。

『利王丸さま、利王丸さま、玄心でございます、利王丸……、』

『おゝ、玄心ではないか……。』

鐵格子の中から、利王丸の聲が聞えました。

『おゝ、利王丸さま、玄心でございます。』

『おゝ、玄心、お前はどうしてこんな處へ來た。早く歸るがよい。歸れ……。』

姿は見えないが、はつきりと厳しく命じる聲が聞えました。

『歸れとは、お情なうございますッ。あなたさまをお助けしたいばつかりに、こゝまで忍んで參つたのでございます。』

『默れ、俺はお殿さまのお命令で、この牢屋に囚はれてゐるのだ。それを助け出さうとは、主を恐れぬ不屈者。早う歸れ。』

『いゝえ、利王丸さま。あなたがさやうに仰せられますのは、私の身の上をお案じ下さいますからのことでございませう。けれども、どうぞその御心配は御無用に願ひます。茶坊主風情の玄心とても、御恩は忘れは致しませぬ。一度あなたさまに、命を助けられました私が、どうしてあなたさまのお苦しみを、默つて見てゐることが出來ませう。たとへ私はこゝへ忍んで參つたことが知れて、この首を刎ねられさせうとも、命の親のあなたさまのお苦しみを、

他所に見てゐることは出來ませぬ。……わづかばかりではございますが、こゝにお食物を持つて參りました。どうぞ召上つて下さいませ。』

玄心は、涙に聲を震はせながら、熱心に云ひました。そして小さな包を鐵格子の間へ差入れました。

『おゝ、玄心。いさゝかのことを恩感じ、囚の身となつて牢屋にゐるこの俺のやうなものゝことを、よう忘れずにゐてくれた。かたじけないぞ。』

鐵格子の間から、前髪を垂れた利王丸の顔が覗きました。しかし、涙に噎んで、聲は出なくなつてしまひました。

『利王丸さま、あなたさまは御存じないかも知れませんが、今日からは、もうあなたさまの處へは、お食物を運ばないことに決まりましたのでございます。』

『え、えつ……、』

『利王丸め、憎つくき奴、干乾にしてくれる……』

と、お殿さまは大変な御立腹でございました。

『ふうん……、』

利王丸は、鐵格子につかまつて、涙の溜つた眼を上げて、外に立つてゐる玄心を見上げました。玄心は、つと寄つて、格子の外から利王丸の手を握りました。

『利王丸さま……お察し致します。』

『では何か、……この俺を干乾にするために、食物を運ぶなと仰せられたのか。』

『はい、さやうでございます。利王丸さま……、さても、お殿さまのなされ方は、何と云ふ無慈悲なことでございませう。』

利王丸も玄心も、もう堪えかねたと云ふやうに、同時に歔欷し始めました。

『おゝ、何と云ふことだ。それでは俺の命も、この冷い鐵格子に、明暮結ぶ夜の露と消えねばならないのか……。』

『お、お察つし致します。……城中には、澤山のお小姓方もゐられますのに、殊更に、末頼母しいあなたさまが、この御災難……、』

玄心は、涙に噎びながら云ひました。利王丸は、ぢつと聞いてゐましたが、急に、もうきつぱりと斷念めたと云ふやうに、力の籠つた聲で云ひました。

『いや〳〵。たとへ前々から鑢のはひつてゐた香爐とは云へ、取落してうち碎いたは身の失策……何とお咎めを受けやうとも、致し方のないことぢや。』

『とは云つても、たかゞ鑢のはひつた香爐一つで、優い人間の命までもお取りなされいでよいものを……お殿さまはあんまりなされ方……、』

『これ〳〵、そのやうなことを云つて、若し人に聞かれでもしたら、その方の命は無いものぢや……早う歸れ。俺を慰めてくれるは有難いが、その方にまで難儀がかゝつてはいけぬ。早う歸れ。』

利王丸は、聲を潜めて云ひました。

『さやうでございます。私のやうなものゝ命は惜しうはございませんが、今若し、私までがお咎めを受けるやうなことがございましたならば、明日からは、あなたさまのために、お食物を運ぶものさへ無くなつてしまひます。それでは、これでお暇致します。お氣をつけてゐらせられませ。明晩は、またお伺ひ致ませう程に……、』

『いや、これ〳〵、』

玄心は、つと格子を離れて、立去らうとしたが、呼び止められて立停まりました。

『これ、玄心、明晩はもう來るに及ばぬ。……俺の身を思ふてくれるは有難いが、そのやうなことをしては、其方の身が危い。』

『何とおほせられます。』

『俺の命はもう無いものぢや。どうせ一度は、お殿

さまのために捨てねばならぬこの命、俺はもうぶつつりと斷念めたわ。』

『いえ、いえ、さやうなことをおつしやいますに、お心を靜めて、またの日をお待ち下さいませ。どうせ數ならぬ茶坊主風情の私ではございますが、命にかけても、お救ひ申さずにはおきませぬ。何ぼう無慈悲なお殿さまでも、思ふ誠實が通はぬことはございませぬ。』

この時――突然、誰か、右手の本丸の方から、人の來る氣配がしました。二人は、雷に打たれたやうに驚いて、玄心は、松の木の蔭に、利王丸は窓の中へ、麥な隱しました。

立派な一人の武士が、提灯を持つた一人の從者を連れて出て來ました。從者は、窓の側へ走り寄つて、提灯を差しつけながら、中の方を覗込みました。

『たしかに話聲が聞えたやうでございました。』

『うん。たしかに俺も聞いた。怪しい者に居らぬか。』

『はい。見えませんやうでございます。』

從者は、うろ〳〵とそのあたりを探して歩きましたが、玄心の隱れてゐるのには氣づきませんでした。武士は窓の中を覗いて云ひました。

『これ、利王丸、利王丸、』

『は、はい。わが君さまの麗しい御機嫌を拜しまして、この上もない仕合せに存じます。』

『うん……、誰もこゝへ來はせぬか。』

『は、はい……。』

『今、お前と話をしてゐたのは誰ぢや。』

『はい。別に……。』

『眞直に申せ。匿しだてをすると許さぬぞ。』

『はい……。』

この時、松のかげから玄心が走り出て參りました。

『あつ、いけない……。』

と利王丸が叫びました時には、もう玄心は、武士の前に兩手をつ

いて平伏してゐました。

『貴様は玄心。何のために此處へ來た。』

『は、はつ、玄心めでございます。嚴しい御主命にそむいた大罪人、速に御手打になされたうございます。』

玄心は。武士の前に、恐れげもなく首差延べて云ひました。

『小賢しいことを申す奴。手打ちにするは知れたこと。何のために此處へ來たか、速に申せ。』

武士は。怒りに身を震はせながら、腰の刀に手をかけて、がちやがちやと音を立てゝ見せました。

『は、はあ……、返すがへすも御主命にそむいておそれ多いことではございますが、利王丸さまがおいとしうて、お食物をお運び申して參りました。』

『うん。につくき奴……』

『いえ、そのお叱りは、この利王丸めに戴きませう。この私が、玄心めに云ひつけて、食物を運ばせたのでございます。』

と利王丸が云ひました。玄心は憤てゝ遮つて云ひました。

『いえ、いえ、何の利王丸さまが……。この玄心めが、勝手にお運び申したのでございます。』

『そち達は、互に罪を奪ひ合ふとは何事ぢや。……定めしこれには譯があらう。玄心、ありていに申せ。』

『は、はつ、別にこれと云つて譯はございません。ほんたうに私がお運び申したのでございます。嚴しい御主命にそむいて、惡いことゝは存じましたが、一度大恩をかうむつた利王丸さまのお苦しみを、他所に見過すことは、どうしても出來ませんでした。私は幼い頃、利王丸さまのために命を助けられたことがございます。利王丸さまは、云はば私の命の親でございます。禽獸でさへも恩を報ずるものがあると申します。どうして、利王丸さまをお見捨て申すことが出來ませう。命を失ふは覺悟の前。いづれ折を見て、わが君さまに申上げ、利王丸さまの御命乞ひをして、御許しを戴いたその曉には、たへこのことが知れずとも、やがてはわが君様に、何も彼も申上げて、その申し開きには、腹かき切つて相果てようとかねて存じてをりました。』

『ふうん、なる程……』

『かくなる上は、速にお手打ち願ひたうございます。かねての覺悟でございます。』

玄心は、もう一度武士の前に、首差延べて云ひました。

『ふうん。……いや、玄心。貴様は茶坊主に似合はぬ見上げた奴ぢや、苦しうない、面を上げよ。』

『は、はあ……』

『苦しうない。面を上げよ。……よく恩義を忘れず眞心を盡した。汝の眞心に免じて、利王丸をも許してとらせる。』

『え、えつ、それでは利王丸さまを……、』

玄心は再び平伏しました。

『早う開けてやるがよい。』

と云つて、武士に從者の方へ振向きました。

從者は、急いで鍵をはずして、鐵格子を開きました。利王丸は、玄心と並んで、武士の前に平伏しました。

『汝等よく聞け、人たる者は、恩愛を忘れては禽獸にも劣る。玄心の今日の行は、實に見上げたものぢや。この後、兩人共に、その眞心を忘れず、隨分忠義を盡せ。』

『は、はあ……、』

利王丸と玄心の兩人は、感極つて、武士の前に兩手をついて平伏しました。

（靜かに幕）

磁石島へ行つた坊さんの話

齋藤佐次郎

或晩、アラビヤのバグダッドの町へ、三人の回々教の坊さんが來ました。眞暗な晩でした。坊さん達は泊めてくれる家はないかと探してゐましたが、幸とある貴婦人の家に泊めて貰ふことになりました。

ところが、不思議にも坊さん達は皆な眼が片方つぶれてゐるのです。あんまり不思議ですから、宿の貴婦人がその譯をたづねました。すゝと坊さんの一人が、次のやうな話をしました。――

私の名はアギブといひまして、カシブといふ王の息子でありました。父は大きな國を治めてをりましたが、その都は世界中で一番美い港の町だといはれてをりました。

私が父の位をついだ時、先づ考へたことは、人民の人望を得るために、最初に本土の國々を廻つて歩き、次に陸地から遠い島々へ行つて見ようといふことでありました。ところが、船で旅をすることが私にはすつかり面白くなつてしまつて、私は間もなくもつと遠い海へ出て探檢して見たいと思ふやうになりました。そこで、私は大きな艦隊にすぐと出帆の用意を命令しました。

艦隊がいよ〳〵準備の出來た時、私は長い航海に出るために、船に乗りこんだのでありました。

それから四十日の間、風の工合も天氣の工合もすべて順調にいつてをりましたが、その次の晩になりますと、俄かに暴風雨がおそつて來まして、船は風のまに〳〵十日の間といふもの、あつちへ流されこつちへ流されしてしまひました。とうとう水先案内は方向を誤つてしまつたと申しました。そこで陸地を見出すために、一人の水夫をマストのてつぺんに上らせますと、見えるものはたゞ海と空とだけだと申しました。しかし、船尾の方にあたつて、眞黑な大きい塊が見えると申しました。

この報告を聞いた水先案内は眞青になつてしまひました。

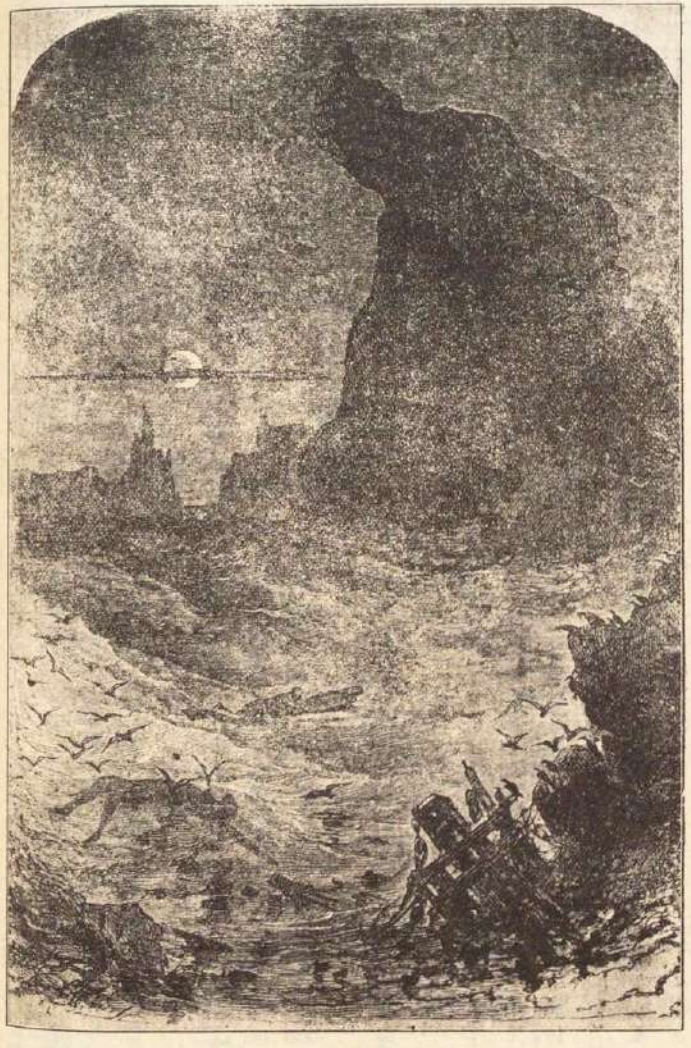
『陛下、われ〳〵は助りません、助りません。』

と、水先案内は自分の胸を打ちながら叫びました。

すると水夫達は、譯もわからないでぶる〳〵顫へ出しました。

その内に水先案内は少し氣が落ちついて來たと見えまして、その驚いた譯を說明いたしました。

『私たちは飛んでもない方向へ流されてしまつたのです。明日の午頃には、あの眞黑な塊の近くまで參りますが、その塊といふのが有名な「黑山」です。この山は磁石の岩から出來てをりまして、船の中の鐵や釘をのこらず自分の方へ吸着けてしまふのでございます。私たちはだん〳〵と近くへ引きつけ



られて居りますから、從つて吸ひつける力もいよいよ強くなつて、船の鐵類や釘は船から拔け出て行つて、皆なあの山に吸ひつけられてしまふのでせう。さうなれば、船は船員もろ共海底へ沈んでしまはなければなりません。』

と話して水先案内は一と息つましたがそれからまた話し出しました。

『黑山は、遠くから見ても想像のつく通り、非常に嶮しいのです。その頂上には黃銅のお堂が立つてをります。そして、そのお堂の上にはこれも黃銅の騎馬の像が立つてをります。この馬上の騎士は鉛の鎧の胸板を着けてゐまして、それには得體の知れない文字や畫がかいてあります。言ひ傳へによると、この像がお堂の上にある間は、船はいつまでも山の麓で難破するのださうです。』

こゝまで話した時、水先案内はおい〳〵と泣き出しました。水夫達も最後の時が來たのを覺悟して、お互ひに仲間に別れを告げました。

翌日の午頃になりました。水先案内のいつた通り私どもは黑山の近くに來てをりましたので、船の釘や鐵はみんな拔け出して行つて、おそろしい音をたてながら黑山にぶつかりました。一瞬間の後には船はこな〳〵に碎かれて、水夫達もろ共沈沒してしまひました。

その後どうなつたか、私は何にも知りませんでした。しかし、ふと氣がついて見すまと、自分だけは黑山の下の石段のところに居りました。その時の喜びは、どんなでありましたらう。そこは岩と岩にはさまはれた狹いところで、右にも左にも、人一人やつと通れるだけの廣さしかあいてないのでありました。おまけに、その石段が狹くて嶮しくて、一寸でも風が吹かうものなら、ふうと海へ吹きとばされてしまふ程なのでありました。

私は山の頂上へ行つて見ました。すると水先

案内が申した通り、黄銅のお堂と騎馬の像が立つてをりました。しかし、私の身體は疲れ切つてをりましたので、それを一と目見たゞけで、すぐとお堂の下でぐう〳〵眠つてしまひました。

すると、夢に一人のお爺さんが現れてかう申すのです。

『これ、アギブや、目が覺めたらすぐに足の下の地面を掘りなさい。すると、一張りの黄銅の弓と三本の鉛の矢が出るから、その矢をもつて騎士の像を射なさい。騎士は忽ち海中に轉げ落ちるが馬だけはお前の側に倒れるから、それをお前が弓と矢を掘り出した場處に葬つてやりなさい。その時、海は急に高まつて來て、黒山をかくしてしまふだらう。だが、その時になると、海上に金物の人がボートに乘つて兩手に櫂を漕ぎながら現れるから、お前はそれに乗せてもらひなさい。尚、よくいふて置くが、お前は再び本國を見るやうなことがあつても、決して神樣の名を唱へてはならないよ。』

さういつたかと思ひますと、お爺さんは消えてしまひました。私は大喜びで目を覺しました。そこで私は、はね起きて地面から矢を掘り出しました。

さて、三本目の矢が當りますと、馬上の騎士はすごい音をたゝて海に落ちこみました。と、同時に海は忽ちに高つて來ました。その速さといつたらありません。漸くにして馬を地面に埋け終つたか終らないに、ボートは近づいて參りました。私は默つてそれに乗り込みました。すると、金物の人は船を押出して九日九夜の間休みなしに漕いでくれたのです。

やがて地平線上に陸地が見えて參りました。この光景を見た時、私はもううれしくつて、うれしくつて堪りませんので、お爺さんが私に話してくれたことなどすつかり忘れてしまひました。

『神樣、ありがたうございます。神樣ありがたうございます。』と、思はず叫んでしまつたのです。

この言葉が私の口から出たか出ないに、忽ちにボートも人も沈んでしまつて、私だけ一人海の上に浮いてをりました。後悔してもうおつつきません。私はその日一日と、翌日の晩にかけて一生懸命に泳いだのです。

どうかして自分に一番近い陸地に泳ぎつきたいと思ひました。しかし、その内に私の力はつきてしまひました。私はもう死ぬより外ないと覺悟をきめました。すると、

その時、ふいに風が吹いて來て大きな波が立つたかと思ひますと、その波に乘せられて私は濱邊へ投げ上げられました。先づ着物を脱いで日に乾し、それから暖い地面に身體を投げ出すとそのまゝ眠つてしまひました。

翌朝私は着物を着てそれから邊りを見廻しました。島には私の外には誰も人がゐないやうです。

ですが、私が行きたいと思つてゐる本島からは大分遠く離れてゐるやうなのです。しかし、私がかつかりしてしまふ暇もない内に、一艘の船が島に向つて走つて來るのを見つけました。私にはそれが味方であるか敵であるか解りませんので、樹の茂つた枝の中に身をかくしたのです。

水夫達は船を入江へ入れると、十人の水夫が鋤や鶴嘴を持つて陸へ上つて來ました。水夫達は島の眞中まで來ますと、立止つてしばらくの間土を掘つてをりましたが、やがて上蓋のやうなものを引上げました。その後で水夫達は二三度道具や食料品を取りに船の方へ歸つて行きましたが、おしまひに一人の老人が十四五位の可愛らしい少年をつれて船から上つて來ました。この人達はみんな上蓋の下へ見えなくなつて行きましたが、しばらく中にゐてから出て來ました。しかし、その時にはさきの少年はゐませんでした。水夫達は前のやうに上蓋を下して、その上に土をかけてしまひました。それからまた船に乘つて皆な行つてしまつたのです。

船の連中が見えなくなつてしまふと、私は樹から降りて來て、少年が埋められてゐる處まで行きました。私は土を掘りました。すると、眞中に環のついた大きな石にぶつかりました。この石をどけると石の階段があらはれました。それを通つて行くと、蠟燭が煌々と照つた立派な部屋に出ました。垂幕でまはりをかこつて、蒲團を澤山重ねた上に、少年が坐つてをりました。（つゞく）

少年筆工

西川勉

（下）

或る晩、お父樣はギュリオのことでひどく思ひ切つたことを云ひました。お母樣は彼を眺めて、いつもよりは具合も惡さうだし、弱つてもゐるやうに思はれたので、かう云ひました。

『ギュリオ、お前は病氣だね。』

そして、お父樣の方へ向いて、心配さうに、

『ギュリオは病氣ですよ。蒼白めた顏をしてるぢやありませんか？　ギュリオ、ねえ、お前、氣分はどんなだえ？』

お父樣はじろつと見て、かう云ひました。

『身體が惡くなるのも心柄だよ。よく勉强する、可愛い子供であつた時分には、こんな風なことはなかつた。』

『だつて病氣ですもの！』

お母樣は聲を高めて云ひました。

『あ、、いつのことはもう關にないよ。』

お父樣はかう答へました。

この言葉を聞くと、可哀さうな息子は、胸を刺されるやうに思ひました。あゝ、お父樣はもう自分には關つて呉れないのだ。前には自分が咳一つしても震へてゐたお父樣が、もう自分には關つて呉れないのだ。もう自分を愛しても下さらないのだ　さうに違ひないのだ。お父樣の心の中では、自分はもう死んだのと同じことなんだ。

『あゝ、いゝえ、お父樣。』と、息子は、苦しさに胸のつまる思ひをし乍ら、心の中で云ひました。『もう、本當に、みんなおしまひです。あなたが可愛がつて下さらなければ、僕は生きてゐることが出來ないのです。僕はあなたの愛をすつかり取り戻さなくてはなりません。何もかも打ち明けてお話しします。もうあなたを欺したりいたしません。お父樣がもう一度可愛がつて下りさへすれば、僕はどんなことがのらうとも、前々通り勉强します。お父樣！　ああ、今度こそ、僕は固く決心しました。』

ところが、晩になると、彼は、また起き上りました。何よりも習慣の力のためです。一度、起き上つて見ると、最後にもう一度、この靜かな眞夜中に、あの小さな部屋へ行つて暇乞ひをして來たくなりました。そゝ部屋で彼は長い間こつそりと、滿足と優さの籠つた心をときめかし乍ら、苦勞して來たのですもの。それからまた、ランプの點いた小さな机を見たり、白い包み紙を見たりして、その上にもう、今ではそらで覺えてゐる町や人の名前を二度と書かないのかと思ふと、不意に、たまらなく悲しくなつて

いきなり、ペンを攫んで、慣れた仕事に取り懸りました。ところが、手を伸した時に、一冊の書物に當つて、それがばたりと落ちました。血が一時に胸に集つて、早鐘をつくやうに鳴りました。お父樣が、未だ眼が醒めてゐたらどうしよう！　何も惡いことをしてゐる時に見付けられるのではなく、自分からすつかり白狀してしまふと決心したことさへあるがそれにしても、――暗闇の中に近付いて來る跫音が聞えたら、――今時分、この物靜かな時に、――お母樣も、眼を醒して、どんなにびつくりなさんだらう、――そして、これまでは思ひも及ばなかつたことであるが、かうして此處で見付かつて、すつかり事情が判つてしまつたら、お父樣が自分の前でどんなにきまり惡がるだらう。こんなことをいろいろ考へて、ギユリオは全く恐ろしくなりました。息を殺して、耳を傾けて見ました。何の物音も聞えない、背後の扉の鍵穴に耳を當てゝも見ました。――何も聞えない。家中がしんとして眠つてゐます。お父樣にも聞えなかつたのだ。さう思ふとやつと、落付いて、また書き物に向つて坐りました。包み紙は、だんだん堆かく積もつて行きます。表の淋しい通りでは、巡査の規則正しい跫音が聞えました。それから馬車の轟が次第に遠く消え失せて行きました。それから、暫時たつて、一列の荷車の軋る音が、緩やかに通り過ぎて行きました。後は全くしんとして、時時、犬の遠吠えに靜けさを破られるだけでした。彼は一生懸命に書き續けました。すると、いつの間にか、お父樣が背後に來て立つて居りました。お父樣は書物の落ちる音を聞くと起き上つて、長い間じつと待つてゐたのでした　荷車の音の爲めに、この跫音も、扉の棧の軋めきも聞えなかつたのでした。お父樣は其處へ來て、白髮頭をギユリオの脊中に向けて、ペンが包み紙の上を走つて行くのを眺めたのでした。それで、忽ち、何もかも察しがついて、また

すつかりいろ〳〵なことを思ひ出しもして、合點が行つたのでした。そして、身を切れるやうな後悔の念が起ると同時に、わが子が愛しくてたまらなくなりました。そしてギユリオの背後に、釘付けにされたやうにじつとして息を殺してゐたのでした。ギユリオは不意にきやつと叫びました。二本の腕がぶるぶる震へ乍ら彼の頭を抱いたからです。

『あゝ、お父樣！　お父樣！　許して下さい、許して下さい！』

彼は獸獸く聲で、お父樣だと判つたので、叫びました。

『お前こそ許してお呉れ！』

お父樣はかう答へて、彼の額に、幾度も、幾度も接吻しました。

『何もかも判つたよ。分つたよ。俺だ、俺だ、俺こそお前に許して貰はなければならないのだ。うい奴ぢゃ。さあ、さあお出で。』

お父樣はギユリオを押して行くといふよりは、持ち運んで、お母樣の寢床の傍へ伴れて行きました。もう眼が醒めてゐたお母樣の腕の中へ、ギユリオを押しやり乍ら、お父樣はかう云ひました。

『この可愛い、可愛い子を接吻しておやり。三月の間も眠らないで、俺の爲めに働いて呉れたのだ。それだのに、俺はこいつを意地目てばかりゐたわい。こいつは家の暮し向のお錢を儲けてゐたのだ。』

お母樣はギユリオを胸にしつかと抱き締めて、さうしたまゝ、物を云ふ力もありませんでしたが、とうとう、かう云ひました。

『直ぐお寢み、ねえ、行つてお寢み。――この子を寢床へ伴れて行つてやつて下さい。』

お父樣はギユリオを母の腕から抱き取つて、彼の部屋へ伴れて行つて寢かしました。そしてまだ喘ぎ喘ぎ痛はり乍ら、枕や蒲團の具合を直してやりました。

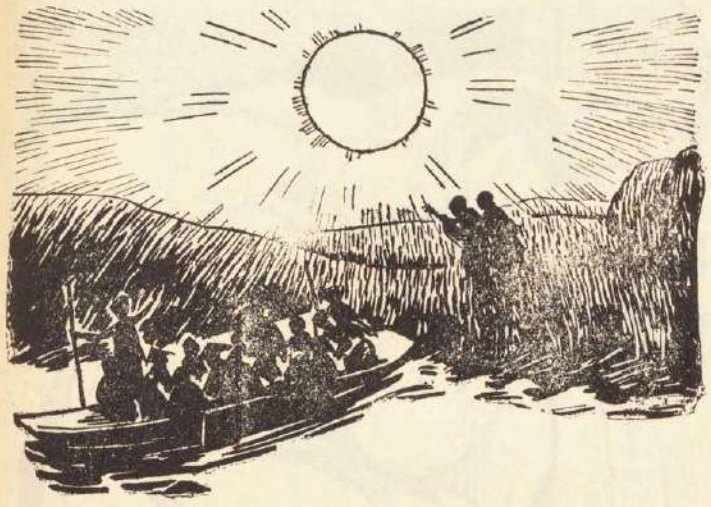
『お父樣、有難うございます。』と、ギユリオは幾度も云ひました。『有難う、もうお寢み下さい。僕、もう澤山です。行つてお寢み下さい、お父樣。』

けれど、お父樣はギユリオが熟睡するのを見たかつたのです。だから、寢床の傍に坐つて、彼の手を取つて、かう云ひました。

『お眠り、お眠りつたら！』

ギユリオは身體が弱つてゐたものですから、遂々眠つて、長い間眠つて、幾月目かで初めて、賑かな嬉しい夢に包まれた安かな眠りを樂しみました。眼を開けた時には、もうかなり長い間日が照つてゐました。

ギユリオは先づ第一に氣が付いて、そしてよく見ると、お父樣が自分の胸近く、小さな寢臺の端に白髮頭を乗せて、眠つてゐるのでした。お父樣はかうして一夜を過したのでした。そして未だ額を息子の胸に押し付けて眠てゐるのでした。（をはり）



額を打れた西行法師

霜田史光

西行法師と云へば隨分名高い方です。この人は坊さんとして名高いのではなく、歌人として名高いのです。

西行はもとは朝廷に仕へた武士でしたが、生れつき歌が上手なのと、物の哀れを悟つたことから、お坊さんになつて國々を修行して歩き、思のまゝに歌を詠んで歩いたのです。

始め、西行は吉野へまゐつて三年の間修行しましたが、それからは方々を歩きました。そして東の國の旅に向つた時は、西住と云ふお弟子を一人連れてゐました。

恰度西行と西住とが天龍川の渡しに差しかかつた時の事です。もう夕暮近くで、早く次の宿場に着きたいと二人は足を早めて參りました。

『おーい、船が出るよーッ。船が出るよーッ。』

と云ふ聲が川の岸から聞えました。

『あれ、お師匠樣、船頭が船が出ると云つて呼んで居ります。早く行つて乘せて貰ひませう。』と西住は西行の袂をつかまへて云ひました。

『あゝ、さう致さう。』と云つて西行も小走りに川砂利の上を歩いて渡し舟に近づきました。

『御出家さま、早くお出なさいまし。』と云つて二人の船頭は西行達を舟の中に入れようと致しました。

すると、舟の中にゐた無頼漢のやうな姿をした一人の男が、

『おい！〳〵、船頭さん。こんなに舟の中は混み合つてゐるんだから、いゝ加減にして貰はうぢやないか。川中で船がひつくり返つたらどうする。』と不平らしく云ひました。

『ほんとだ。見れば今日は水も増してゐるやうだし、あれ、水は矢のやうに急いで流れてゐる。一人ならまだしも、二人ぢや危いよ。』とその仲間らしいのが合槌を打ちました。

すると船頭は、

『えへゝゝゝ』と笑つて、『そのご心配には及びませんや。これでも私らは年がら年中この川に渡しの役目をしてゐるんですから、乘せられるものか、乘せられぬものかは、ちやんと分つて居りますよ。』

『さうかい。』と無頼漢も默つてしまひました。

でも、西行は、

『大分こみあつてゐるやうだから、私達はこの次にしてもよい。』と遠慮して申しました。

『いゝえ、御出家さま、船頭があゝ申すのですから、さア〳〵お這入りなさいまし。』と云つて、商人らしい男は西行達の爲めにわぎ〳〵席を開けてくれまし

た。

『それでは乗せて貰ひませう。』と云つて、西行は西住を從へて舟に乗り込みました。やつとのこと西行達が腰を下すと、舟はもう身動きも出來ない程ぎつしり一杯です。

船頭は『ほらよ』と前と後とに合圖をすると船は二三尺岸を離れました。

その時向ふから呼吸せき切つて駈けて來た侍があります。顏中髯だらけの、眼はギヨロリとした、見るから一癖も二癖もありさうな侍です。侍は船頭がもう一突きで舟は急な流れの中へ出てしまはうとする時、岸に駈け寄つて來て大きな聲で呶鳴りました。

『おい、こら船頭、おれを乗せて行け。』

その云ひ方が如何にも亂暴です。いくら侍が偉いからと云つて、餘り人を馬鹿にした云ひ草だと船頭は思ひましたが、それでも相手が侍のことですから

丁寧に、

『お武家さま、お氣の毒ですが、一舟待つて下さいまし。この通りお客樣で一杯なのですから。』と棹を突ッ張つたまゝ申しました。

『ぐづ〳〵云はずに乗せろ。己れ一人位餘分に乗つたからとて沈むやうこともあるまい。』と侍は云ひました。

『いゝえ、お武家さま、これでさへ危い位ですもの、この上お乗せしようものなら、川のまん中で舟がひつくり返つてしまひます。』

『それなら誰か一人下せ。そして己れを乗せろ。』と侍は尙も威張つて申しました。

『じよ、じよじようだん云つちやいけません。いくらお武家さまの仰言ることだつて、折角お乗せしたお客樣を下すなんてことは出來ませんや。』船頭にとつちやお武家さまだつて、お百姓だつて、お客樣には變りがありませんからね。折角ですがお斷り申しますよ。』と船頭は少し癪にさわつたと見えて口を尖らせて申しました。

『貴樣がいくら乗せないと云つたとて己れは來る。それ、かうして來つてやるんだ。』と云つたかと思ふと、侍はぱつと身を躍らせて、船の中へ飛込みました。

恰度さつき船頭に文句を云つた無賴漢の膝の上へ泥だらけの草鞋でドッと乗りましたので、

『あいたゝゝゝ』とその男は叫び聲を上げました。そして恨めしさうに侍の顏を見上げましたが、

『我慢しろッ。』と侍が恐ろしい顏をしてにらめつけると、その儘默り込んでしまひました。

『さア、船頭、心配することはないから早く船を出せ。』と侍は船頭に云ひました。

『お武家さま、そんな亂暴なことをなすつちや困りますよ。どうぞ降りて下さいまし。それでないと私等は船を出しませんよ。なア三次。』と船尾にゐるもう一人の船頭に云ひました。

さうだ。これぢや危くつて出せるもんか。』

と三次と云はれた船頭も侍の仕打が餘り馬鹿にしてゐるので、ふくれ面をして申しました。

それを聞いた侍は大層怒つて、

『なにッ、舟が出されないと、いま一度云つて見ろ。貴樣達首を斬つてしまふぞ。』と云つて腰の一刀をギラリ拔いて船頭の鼻先へつきつけました。

見てゐたお客達は皆蒼くなつて、中にはぶるぶる慄へてゐる者さへあります。

所がこの船頭は餘程度胸のいゝ男と見えて、舟の舳にどつかと腰を下してしまひました。そして落ちついて云ひました。

『へゝゝゝ、妙なものをお出しになりましたね。お武家さまは私をおどかして舟を出させようと云ふんですね。そんなことで驚くやうな權太ちやござんせんや。他の船頭はどうか知りませんが、この權太は

おどかされて稼業をするのは大きらひでございますよ。さア、斬るならどこからなりとお斬りなさい。

ですがお武家さま、あなた様は船頭を殺してどうしてこの急流を渡りますかね。憚りながらこの天龍川は普通の人には渡せませんや。』

侍はすつかり當てがはづれてしまひました。が、それかと云つてこの船頭を殺してしまふと、成程自分も渡ることが出來ませんので、これには弱つてしまひました。それでもまだ負け措しみらしく、

『うむ、貴様は見かけによらぬいゝ度胸だ。』なんて賞めてから『それならこの中の誰か一人降りたらいいだらう。』と云ひました。

『へえ、それならようございますが、私には先に來たお客さまを後から來たお客さまの爲めに降りて下さいとは申されません。ですがお客様同士でご相談づくなら差支へありませんよ。』と船頭は云ひました。

『さうか。よし。』と云つて侍は刀を鞘に納めてから舟中のお客を見渡しました。

お客達は自分が降ろされるのは厭だと思つて、指差されないやうに皆横を向いてしまひました。

すると侍は衣姿の西行に目をつけて、

『おい、坊主、貴様が降りろ。』と云ひました。

西行は先刻からこの侍の生意氣な様子を見てゐて大層氣持惡く思つてゐた所へ、今度は自分に向つて無禮なことを云ひかけましたので、腹の中ではむつとしたが、ぢつとこらへて何も云はずに横を向いてゐました。すると侍はまた怒り出し、

『こら、味噌坊主、降りろと云ふのに、己れの云ふことが聞えないか。』と大聲に呶鳴りました。

西行はこゝで若し口を開けば、どうしても侍の無禮を咎めることになりますので、却つて默つてゐる方がよいと思つて尚も默つてゐました。

すると、侍は急に眞赤になつて怒つて、

『この坊主め、降りなけりやア、かうしてやる。』
と云つて侍は手に持つてゐた鐵扇で、西行の額を力まかせに打ちました。
『あッ。』と云つて西行が額に手を當てゝ見たとき、その手には眞紅な血がベットリと附いて、指の間からだら〳〵と流れ落ちました。
餘りの事に他のお客たちも腹の中では怒りましたが、相手が強さうな侍でしたから、さきの無頼漢でさへ一言も云へないで、どうなることかとはら〳〵して見てゐました。その時、西行は怒るかと思ふと、そんな風も見せないで、懷中から紙を出して額の血を拭ひ、そして靜かに云ひました。
『貴方は私を打たねばならぬ程お急ぎなのですか。』
侍は西行のこの穩やかな言葉に急に氣拔けがした心持でしたが、それでも尙更言葉も荒々しく、
『さうだ。』と云ひました。
『さほどお急ぎならば私が降りて進ませう。』と云つて西行は、『船頭さん、ご苦勞でももう一度舟を岸につけて下さい。』と申しました。
船頭は先刻からの樣子を見て、いま〳〵しさうに體をゆすつてゐましたが、西行が是非にと申しますので、舟を岸に着けました。
西行は殊數を手に持つて靜かに岸に下りました。
それを見て、お弟子の西住はもうどうにも我慢がなりませんでした。西住ももとは侍、こんな野良犬のやうな侍に負けようとは思はれません。よし、お師匠樣が手を上げないならば、自分が變つてこの蓄生侍をこらしめてやらうと、いきなり立ち上つて足を上げて侍を蹴らうといたしました。
それを見た西行はきつい聲で、
『西住、お前は何をするのぢや。いゝから早く降りなさい。』と叱りました。
『でもお師匠樣、あまりと云へばこの侍の無禮……』
『いゝから降りなさいと云ふのに、私の云ふことが

肯かれないか。』
と西行は大きな聲で叱りつけましたので、西住もいまは仕方なく、しぶ〳〵舟から降りました。
『それでは御出家さま、後の舟でお送り申しますから、どうぞお待ち下さい。』と船頭は氣の毒さうに西行に云つて、棹を岸に突ッ張ると、舟は忽ち急流の中へ出て押し流されるやうにしながら向ふ岸へ走つてゆきました。西住は口惜しさに體を慄はせながら、はら〳〵と涙を流して云ひました。
『お師匠さま、あなた樣のさきの只今のなされ方は餘りにお情けなうございます。あなた樣ももとは君に仕へた侍として、名高い强者ではありませんでしたか。それなのにあんな野良犬のやうな侍に恥かしめられて、その上に尊い御額まで打たれてまでもお忍び遊ばすとは、それでは、あんまり、あんまり、私は口惜しうございます。』
それを聞いて西行はきつい聲で、
『西住、お前にはまだ出家の心がわからぬと見える

な。都を出る時あれ程まで佛の教へを守ると約束したではないか。只今私があの侍にされたことも、お張り佛の道の修行の一つと思はなければならぬ。お前にその我慢が出來ぬのなら、私はもうお前を連れては旅が出來ぬ。さアこれからすぐに都に歸るがよい。』と云ひました。
西住は西行の尊い心がわかつて、いま更ながら後悔して、『これからは必ず佛の道を守りますから。』と云つてお願ひしましたが、西行は肯き入れませんでした。
『私はお前を憎むのではない。おとなしく都へ歸つてゐるがよい。そして私が東の國の旅からまた都へ歸つて行つた時、お前の心が立派に修行出來てゐたなら、喜んでまた一緒に旅にも出よう。』
さう云はれて西住は仕方なくお師匠さまに別れ、悲しさうに萎れて都の方へ歸り路につきました。
やがて西行は次の舟に乘つて天龍川を渡り、一人寂しく東の國の旅に向ひました。（をはり）

諸國奇談(1)

二ツ岩團三郎

中川杏果

世の中が今日のやうに開けない時代には、鑛山で金や銀や礦石から分析するには、鞴と云ふ器械を用ひたものです。さうしてその鞴を作るには、獣の皮を用ひなければならないのです。

今から恰度三百年前、日本の金山の中で一番有名な、佐渡が島の相川金山では、毎日、澤山の金を採るために、非常に澤山の鞴を用ひました。けれども、困ることには、佐渡の島には、この鞴に用ひる獣が一疋も棲むで居いのでした。そこで、德川幕府では、澤山の獣を、越後や信州などの山奥から生け捕つて來て、佐渡ヶ島に送り、島の山へ放つて置て、繁殖させたのです。

しかし、獣を見たことのない島の人達は、大變、これを珍らしがつて、早くも島の其處、此處には、いろ〳〵の噂が立ちました。その噂と云ふのは、獣は大變悧巧で、人間をたぶらかすといふことなのです。この噂がパッと擴がると、島の人達は獣を殺して鞴にすることを大變怖がるやうになりまして、それ以來、鞴を使用する者は誰でも一年に一回宛『鞴祭り』と云ふのを行つて、獣の爲めに冥加を祈つてやつたのですが、仲分毎日のやうに獣が殺されるので、獣のタブでほ中々承知をせず、人間に祟つて、毎日のやうに島の其處此處で、人をたぶらかすと云ふ噂が立ちました。

或る日、その相川金山から一里ばかり驚にある相川町の、或る酒屋へ一人のお客が來て、酒を一升賣つて貰ひたいと云つて、五合入りの德利を出しました。酒屋の主人は大變驚いて、お客さん、これは五合德利ですから、一升の酒は、這入りませぬが、いかゞ致しませうと云ひました。スルト其のお客さんは、カラカラと打ち笑つて、マア〳〵そんな心配をしないで酒を入れて御覽なさいと云つたものですから、主人が酒を入れて見ますと、なるほど德利は五合德利ですが、酒は一升でも二升でも、這入るのでありました。

主人は大變ビックリしましたが、マア其のまゝ一升だけを賣つてやりました。さうして其の客が歸つてから、近所の人達を集めて、不思議の德利を見たことを話しますと、誰れ云ふとなく、それは二ツ岩團三郎と云ふ獣にちがいないと云ふことになりました。

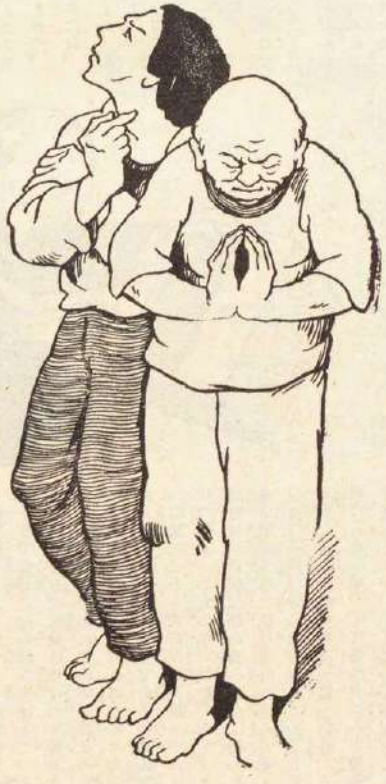
其處で、その酒屋では、よし〳〵今度は一ツ注意してゐて、アノ德利を持つて來たお客が來たら、獣であるか人間であるかを確めようと思つて、翌日のやうに開けない時、相川町の其處此處で、そんな噂が澤山ありまして、彼處の葉子屋では、翌朝になつて見たらお錢が木の葉に化けて居たとか、此處のお米屋ではお錢が馬糞になつて居たとか云つて大騒ぎになりました。其處で町の人達は、これでは埒あけないと思つて、翌日のやうに開けない時、主人は其の女から受取つたお金を、錢函の中へ入れて其の晩は大變喜んで眠りました。其處で翌朝、目を覺ますと、昨夜の金を出して買物に行かうと思ひまして、夜の明けるのも遲しと云ふ位に常になく、早く起きて、朝飯をすませて、昨晩の錢函を開いて見ますと、其の中には、澤山の石が這入つてゐますが、錢らしいものは一ツも見えません。其處で主人公は、これこそ、キツト其の二ツ岩團三郎と云ふ獣にだまされたに違ひないと思ひまして、一層注意して居りましたが、其の後、其の酒屋には、それらしいお客は來なくなりました。その頃町の其處此處で、そんな噂が澤山ありまして、彼處の葉子屋では、翌朝になつて見たらお錢が木の葉に化けて居たとか、此處のお米屋ではお錢が馬糞になつて居たとか云つて大騒ぎになりました。其處で町の人達は、これでは埒あけないと思つて、翌日のやうに開けない時、相談の結果、其の町から半里ばかり上の山にある大きな洞窟に『二ツ岩大明神』と云ふ立派なお宮を建てゝ毎年一回宛、盛大なる御祭を行ふことになりました。

それ以來、この獣に、たぶらかされたと云ふ噂はきかなくなつて來ました。さうして大正の今日でも、其のお宮はます〳〵繁昌して參詣人が多いばかりでなく、このお宮へ參れば、病氣が全治するとか、或ば精神病者が全治するとか云つて、毎日のやうに參詣人が絶えません。そればかりでなく、この島では精神に異狀を來した病人が出來ると、直ぐに、それは獣憑きだと云つて、赤飯を炊いて全治するまで毎日このお宮へ來納して、全治を祈る習慣が今日でも猶ほ行はれて居ります。

また、相川の町にこの噂が高まつた頃、佐渡の其處此處にもこれと同じやうな噂が澤山ありました。私の郷里である佐渡の新穂といふ町端れにある大野川の高橋々畔にも『高橋お六』といふ女の獣が棲むでゐて、それが相川の二ツ岩團三郎の處へお嫁に行つたとか、或ば毎晩人間に化けて町へ出るなぞと云ふ噂を私ば子供の時に聞かされて居ましたから、先年、暑中休暇に郷里へ歸つた時、その橋の袂に一夜を明かして獣を見たいと思つて待つて居ましたが、ツイ其の姿を見ることが出來ませんでした。(をはり)

幽靈船

森川一朗



老僕の話を聞いて、私もその前の晩船に起つたことを殘らず話しましたが、二人は互に驚いてしまひました。

老僕は暫らく考えてゐたやうですが、

『やつと思ひ當りました。』と云つて、あの不思議に力のある眠氣を防ぐための呪文の言葉を私に教へて呉れました。

そこで、私達は今晩こそ眠氣を防いで幽靈の正體を見届けてやらうと思つて、待つほどもなくやがて夜が來ました。私達は老僕が前の晩ゐた船室の側に

小さな部屋のあるのを幸ひに、そこへ二人とも移つて、戸には澤山の穴を開けて覗けるやうにして置きました。それからしつかりと中から鍵を下して、老僕は魔除けの爲めに、マホメットの名を戸の四隅に書きました。かうして私達は夜の更けるのを待つてゐました。また〳〵眠くなつて來たのは矢張り夜の十一時頃でせう。私は教へられた通りにお呪文をしつかりと口に稱へてゐますと、成程利き目があつて睡氣を防ぐことが出來ました。

すると俄かに上の方が騷がしくなつて、綱のバタバタ云ふ音がしたり、行つたり來たりする足音が澤山し出しました。そして種々な人聲をたしかに聞き分けることが出來ました。私達は氣を張つて待ち構へてゐましたが、暫らくすると階段を下りて來る足音を聞きました。老僕はこれを聞いて、彼のお祖父さんが彼に教へたと云ふ魔除けの呪文をとなへ始めました。

おまへ達が空から降つて來ても
おまへ達が海から浮いて出ても
おまへ達が暗い墓穴に眠つても
おまへ達が火の中から生れ出ても
神はおまへ達の主であるぞ
すべてのものは神に從ふぞ。

實のところ私は老僕の稱へるこの言葉を少しも信じてはゐなかつたのです。穴から覗いてゐますと隣の室の扉が開きました。それを見た時私の髪の毛は逆立つてしまひました。あの甲板の帆柱にいはかれてゐた船長がやつて來たのです。船長の後からはあまり上等でない着物を着た一人の男がついて入りました。この男も矢張り甲板に倒れてゐるのです。船長は靑ざめた顏をして、黑い鬚があり、ぎよろつく眼で部屋中を見廻しました。それでも私達の隱れてゐる小さな部屋の方には別に氣を止めないらしく、彼等は船室の眞中にある帆のそばに座つて、大聲で

まるで叫ぶやうな調子で、何やら解らぬ言葉で話してゐました。彼等はだん〳〵聲が大きくなつて何か云ひ爭つてゐるらしく思はれました。とうとう船長は拳骨を固めて部屋が顫ひ出すほど机の上を叩きました。すると他の一人の男は荒々しく笑つて跳び上り、自分に附いて來るやうに船長に合圖しさした。船長は立ち上つて鞘からサーベルを引き拔いて、二人は船室を出ました。

間もなく甲板の上はいよ〳〵騷がしくなりました。急いであちこちを走る音や、叫ぶ聲や、笑ひ聲や、わめく聲が絕え間もなく聞えて、まるで地獄のやうな騷動が始まつたのです。其の騷ぎを聞いてゐると帆と一緒に甲板が私達の頭の上に落ちて來はしないかと思はれた位でした。それから双物のカチ合ふ音と人の叫び聲がして、忽ちひつそりと靜まり返つてしまひました。暫らくしてから私達が勇氣を起して上つて行きますと、どれもこれも晝間見た通りになつてゐました。そしてすべての死骸は木のやうに固くなつてゐました。

かうして私達は幾日も船の中にゐました。船はいつも東の方に走つてゆきました。かうして行けばどこかの陸地に着く筈なのですが、然し、晝間は何里も進んでも、夜になると後戻りをするやうに思へて仕方がありませんでした。何故と云ふに、太陽が上つて來た時はいつも私達の船は同じ處にゐるやうに思はれたからです。私達は、これは屹度、幽靈達が夜になつてから風を起して後戻りをさせるに違ひないと思はずには居られませんでした。で、これを防ぐために、夜になる前に帆を捲いて置いて、それを船室の扉と同じやうに、羊皮紙の上にマホメットの名と、老僕のお祖父さんが敎へたと云ふお呪文の言葉を書き添えて、それを捲いた帆のまはりに結びつけて置きました。びく〳〵しながら私達は例の小さな部屋の中で聞いてゐますと、幽靈達はます〳〵騷

ぎ立てるやうでしたが、翌る朝になつて見ると帆は昨日の通りになつてゐましたので、私達は少しづゝでも船を進めるやうにと晝の間は帆をいつぱいに張り上げました。かうして五日の間私達を乘せた幽靈船は走つてゐました。

六日目の朝、私達はあまり遠くない所に陸地のあるのを見ましたので、飛び立つ思ひをして、不思議にも助かつたお禮を、神樣とマホメット樣にさゝげました。私達はその日とその次の日とを海岸に沿うて船を走らせ、七日目の朝、はるかに町らしいものを見ましたので、二人は大骨を折つてやうやく錨を下すと、うまく底に喰ひ止まりました。そこで、甲板の上にあつたボートを下して二人はそれに乘り、一生懸命になつて町の方へ漕いで行きました。半時間ばかりで私達は海へ注いでゐる川を漕ぎ上つて、その河岸にあがりました。

町の門の處で私はその町の名を訊ねました所、それは私達が始めに行かうと思つた處からさして遠くない印度の町でありました。

其處で私達は旅屋へ着いてやつと安心して恐ろしく疲れた體を休めました。そして私は旅屋の亭主にそれとなく話して、魔法のことについて知つてゐるやうな人があつたなら敎へて貰ひたいと賴みました亭主は早速私達を場末のある粗末な家に連れて行つて、ムーレーと云ふ人をお尋ねなさい。と云ひました。

私はムーレーと云ふ歲とつた魔法師に曾つて、今迄のことを殘らず話しました。そして、

『何んとかして死骸を取り除いてしまふことは出來ないものでせうか。』と相談をしました。

『それはその死人達を陸にあげてやればその魔法は解けるのだが、さうひどく甲板へこびりついてゐてはむづかしい。然し私が奴隸をつれて行けば多分それを取り除くことが出來るだらう。』と云ひました。

私はムーレーに澤山お禮をすると云ふ約束をして

私達は鋸や斧を用意した五人の奴隷を連れて船へゆきました。

私達が船に着いたのは朝早かつたのですが、一時間もたたない内にもう四人の死骸を板ごと切り離して小舟に乗せることが出來ました。奴隷の二三人はそれを埋める爲めに陸地の方へ漕いでゆきましたがそれが歸つて來て話すのを聞くと、死骸を土の上へ置くが早いか、塵になつて碎けてしまつたので、お蔭で埋める手數も掛らなかつたと云ふ事でした。私達は引續いて鋸や斧で死骸を切り取つては小舟に乗せて陸地の方に運びました。そして夜にならぬうちに、帆柱に鎖でいはかれた男の外は一つの死骸もなくなるまでにしました。さて、私達は力を合せてその鎖を彼の身體から解かうとしましたが、どうしても解けませんでした。どんなに力を出してもその鎖を髮の毛一筋ほども動かすことは出來なかつたのであります。私はどうしたらよいかと途方に暮れました。それかと云つて、陸地へ運ぶ爲めに帆柱まで伐り倒すことは出來なかつたのです。

所がムーレーは私達を救つて吳れました。ムーレー老人はすぐ樣奴隷に陸地まで漕ぎ歸らせて、壺にいつぱい土を持つて來させました。

魔法師のムーレーは何かお呪文をその壺の上でとなへて、土を死人の頭の上に振りかけますと、不思議にも死人は目を開いて、ほーつと嘆息をついて、一人の奴隷の腕に倒れかゝりました。

『私を此處へ連れて來たのはどなたです。』と彼はどうやら正氣づいたらしく云ひました。

ムーレーは私を指しましたので、私は彼の側にゆきました。

『見知らぬあなた樣、どうも有難うございました。あなた樣は私を長い間の苦しみから救つて下ずつたのです。五十年この方私の體は波〳〵まに〳〵航海してゐました。そして私の魂は毎日夜になると、體

の中にかへるやうにたゝられてゐたのです。然し今やつと私の頭は土に觸ることが出來まして、これで私は私の罪が贖はれて、先祖の所へ行くことが出來ます。』と彼は云ひました。

私はどうしてそんなひどい目に遭つたのかと訊ねました所、彼は次のやうに話しました。『五十年前に私はアルギールと云ふ所に住んでゐましたが、力が強い人として人々から敬まはれてゐました。金儲けをしたいと云ふ慾から、私は海賊を始めました。私は暫らくこの仕事を續けてゐましたが、ある時ツアンテ島で、お金もない同々教の坊さんを乘せてやりました。私と私の部下の者共は皆荒くれた人間でしから、坊さんの有難味なぞはちつとも知らないで、私はその坊さんを嘲笑つてゐたのでした。ところが或時、坊さんは聖い心からきつく私の罪深い仕事を叱りましたので、私は船室で舵手と一緒にお酒を飲んだ夜、腹立ちまぎれに我を忘れてしまつたのです。たかゞ一人の生臭坊主、それに土耳古皇帝にさへ云はせまいと思つてゐた事を云はれましたので、私は怒つて甲板に飛び出し、劍を抜いて坊さんの胸を突き刺しました。すると坊さんは死にながら、私と私の部下の者共を呪ひました。そして私達が頭を土につけるまで、私達を死ぬ事も生きることも出來ないやうにしてやると云ひました。坊さんが息絶えましたので、私達はその死骸を海の中に叩き込み、その脅し文句をわらつたのであります。然し、坊さんの言葉はその晩のうちに現はれて、私の部下の幾人かが私に叛いて來ました。それから恐ろしくあばれ狂つて戰ひましたが、私の味方は負けてしまひ、私は帆柱に鐵の鎖でいはかれてしまつたのです。ところが私に叛いた者共も傷のために倒れてしまひましたので、忽ち私の船は一つの大きな墓場となつてしまひました。又私の眼は潰れ、息の根も止まりましたので、てつきり死んでしまつたものと思ひしたが

實は魔法の力で、縛られてゐたに過ぎないのでありました。その翌る晩、私達が坊さんを海に叩き込んだと同じ時刻に、私と私の部下の者共は目覺めました。魂は體に歸つて來ましたが、私達は前の晩に話した事や、した事より外には何もすることが出來なかつたのであります。かうして私達は五十年もの間半死半生で航海してゐましたので、どうして陸の土に頭をつけることが出來ませう。私達は氣も狂ふばかりになつて、暴風毎にみんなの帆を張つて航海しました。と云ふのは暗礁にでも乘り上げて、船が碎ければ、この疲れ切つた體を海の底に休めることが出來ると思つたからです。然し、どういふものかその望みは叶へられませんでした。今こそ私は安らかに死ぬことが出來ます。そして今一度、私をお救ひ下すつた見知らぬあなた樣にお禮を申上げます。そのお禮としてどうぞこの船をお受取り下さい。』

船長にかう話し終つた時、頭を垂れてそのまゝ死んでしまひました。それと同時に彼の體はその伸間のやうに塵となつて飛び散つてしまひました。私達はその塵を集めて小函に入れ、陸へ持つて行つて土の中へ埋めてやりました。

それから私は町から人を雇つて船を繕ひ、またこの船にあつた品物を他の品物と換へて大層な儲けをいたしました。そして魔法師のムーレーには充分なお禮をして、水夫を雇つて私達は生れ故郷に向けて出帆いたしました。

私は尙途中で澤山の島や港へ寄つて、前の品物を品物と換へたりして、九ヶ月の後に私が船出した港へ歸り着きました。

私はその後幸福に暮すことが出來ました。そして五年に一遍はメッカへ旅をして、其處で神樣に惠まれた幸福を感謝し、その上あの船の船長やその部下の者達を、安らかに天國にお引取り下さるやうにとお祈りしました。（をはり）

細い竹笛

水谷まさる

（一）

その後も佐吉は、やつぱり笛を吹きました。もうけつして吹くまいと、晝間はかたく心にきめるのでしたが、夜半になるとむしやうに吹きたくなつて、そつと寢床を匐ひ出さずにはゐられませんでした。そして、細い竹笛を心ゆくばかり吹いて、母さんの微笑んだ顏を見たり、母さんのやさしい聲を聞いたりして、なつかしい思ひで胸がいつぱいになると、またそつと寢床へ歸つて來るのでした。

『あゝ、どうしてかう俺は馬鹿なんだらう！』

笛を吹くと、母さんの顏が見えたり、聲が聞えたりするのも、また心でかれ

くやめたことをすぐに破るのも、つまりは自分が馬鹿だからだと、佐吉は思つたのでありました。

でも、ある晩、こんなことがありました。

町のきたない裏長屋に、たつた一人のお爺さんが住んでゐました。そのお爺さんは正直者でしたが、いつも貧乏でおまけに病氣ばかりしてゐましたので、すつかりこの世に望みを失つてゐました。

『あゝあ、俺はもうこの世のなかに、ゐたつてしやうがない。老さきは短かいし、病氣ばかりして働くことはできないし、死んだ方がよつぽどいゝ。』

お爺さんはその晩、つく〳〵そんなふうに考へこんで、淋しい頼りない身のうへを泣いてゐました。

とうとう、お爺さんは裏の井戸へ身を投げて、死んでしまはふと思つたのでありました。お爺さんはきたない蒲團のうへに起きあがつて、それからふるえる足をひきずるやうにして、裏の井戸までそつと來ました。さて、井戸のふちへ手をかけて、ひと思ひに飛びこもうとすると、ちやうど今しも吹きはじめた佐吉の笛の音が、お爺さんの耳にゆうゆうと響いたのでありました。

お爺さんはがつくりと顎を胸につけて、うなだれてぢつと聞いてゐましたが、ふしぎにも胸のなかが、明るくほのぼのとして來るのを感じました。

『いや、死ぬなんてもつたいないことだ。神さまにおすがり申して、もう一度丈夫になつて、人さまのお役にたたなくてはならぬわい。』

お爺さんの頰のうへの涙の跡は、すつかり乾いてしまつて、美しい微笑が浮んで來ました。お爺さんはいそ〳〵と、自分の家へ引き返してゆきました。

また、ある晩、こんなこともありました。

この町で有名な、心のよくない金貸しが、みんな寢靜まつた夜半に、そつと自分の部屋で、錢を勘定したり、金を貸した證文を調べたりしてゐました。ちやうど、金貸しが一枚の證文を見て、

『この證文は明日で日限がきれるな。よし明日は出かけて行つて、せひ錢をとつて來よう。もし錢がとれなかつたら、品物をみんなとつて來てしまはう。』と考へながら、ずるさうな笑ひを顏に浮べた時、やはり今しも吹きはじめた佐吉の笛の音が、錐でもみこまれるやうに、鋭く耳に響いて來たのでありました。金貸しは急にぞく〳〵と寒氣がして、證文を持つてゐた指が、こごえたやうにかたくなつたのを覺えました。そして、ひどく胸が苦しくなつて、おまけに、今まで苦しめた多くの人たちの、青ざめた顏が行列のやうにじゆんぐりに、はつきりと眼にうつりました。

『あゝあ、俺は多くの人たちを苦しめた。まるで蛇のやうな心で苦しめた。』

金貸しはゐてもたつてもゐられないほど、淋しく苦しくなつて、とうとうそこにあつたたくさんの證文を、みんな破いてしまひました。ついぞ流したこともない涙が、金貸しの眼に、美しく光つてをりました。

（二）

このほか、佐吉の笛の音は、町の人たちの心に、いろ〳〵働きかけました　夫婦が喧嘩をしてゐた時　佐吉の笛の音を聞いて、耻かしがつて喧嘩をよしたこともありました。病氣の赤ん坊が寢つかないでゐる時、佐吉の笛の音は子守唄よりもやさしく響いて、すぐに寢つかせたこともありました。

けれど、佐吉はさうしたことを、なにひとつ知りませんでした。

この町に、ある見世物がかかつたことがありました。小屋の前で樂隊が、いろんな唄を演奏しました。佐吉はその樂隊のなかに、銀色の飾がたくさんついてゐる笛を、一人の男が吹いてゐるのを聞きました　佐吉はその男をなんて上手だらうと思ひました。自分もあんなに吹ければいゝと思ひました。

『俺も笛を上手に吹いて、樂隊になつてみたいな、大工になるのは、どうも氣が進まないや。』

佐吉はそんなことを思ひながら、いつまでも樂隊の演奏に聞き惚れてゐました。

けれど、佐吉の笛は、この町ではそんな樂隊の笛よりも、ずつと立派な、ずつと上手なものとして、人々の噂にのぼつてゐました。

『夜半に聞えるあの笛は、どうしたつて神さまがお吹きになるんだぜ。金貸しが證文を破るくらゐだもの、まつたくえらいもんだよ。』

『さうとも、さうとも、俺たちははじめは狐か狸の仕業だと思つてゐたが、さう思つたのは俺たちの考へちがひだつたよ。』

人々はそんなふうに云つて、神さまがお吹きになるのだと、すつかりきめてゐました。そして、どんな方がお吹きになつてゐるか、そのお姿を見ようとしてはいけない。もしお姿を見ると、もう笛を吹いては下さらないと云つて、おたがひに警め合つてゐました。

こんなわけでしたから、佐吉は誰からも見つからずに、笛を吹くことができました。

この町の笛の噂を聞きこんで、ある立派な音樂家がやつて來ました。音樂家は町の宿屋に泊つて、その晩はいつまでも起きてゐました。夜半になつて、あたりが靜まつた頃、果してりゆうりゆうと、美しい笛の音が響いて來ました。噂にたがはぬその美しい響きに、音樂家はすつかり心をうたれてしまひました。熱病にでもかかつたやうに、音樂家はいくども溜息をついて、胸をふるはせてゐました。

音樂家は、神さまが吹いてゐるといふ噂だけは、どうしても信ずることができませんでした。それで、急にがばと座をたつて、その笛の音をたよりに、笛を吹いてゐる人のとこへ行かうと思つて、階段を走つておりました。宿屋の女中はびつくりして、

『神さまを見ようとなすつてはいけません。』と云つて、音樂家をつかまへたのでしたが、音樂家はその手をふり切つて、戸外へ飛びだしてしまひました。

戸外は青い月夜でした。音樂家はどんどん馳けつて行きました。だが、眼の前に笛を吹いてゐる佐吉の姿を見た時、音樂家はまあどんなに驚いたでせう！　佐吉は青い月の光に照らされて、まるで彫刻のやうに靜かに立つてゐました。音樂家はものかげに隱れて、佐吉が笛を吹き終るのを待ちました。

（三）

佐吉はやがてひとくさり笛を吹くと、そつと家の方へ歩いて來ました。音樂家はすぐに佐吉のそばへ行つて、佐吉の笛を賞めて、いろいろ話しかけました。けれど、佐吉はただあつけにとられて、下手な自分の笛を賞めて呉れる、この見慣れない人の顏を、恥かしがつてたゞまじ〳〵と見るばかりでした。でも、いろ〳〵問ひかけられると、佐吉は自分の身のうへや、笛を吹きたい氣持なぞを話しました。

『實にえらいものだ。君みたいな人を天才といふんだ。』と、音樂家は佐吉の氣持を知つて、ほと〳〵感心してしまひました。殊に佐吉が、自分のことを馬鹿だと考へてゐる點を、涙の出るほど嬉しく思ひました。

音樂家は、朝になるのを待ち兼ねて、佐吉の親方を起して、たくさんお錢を出して、佐吉を引取るやうに話をつけました。親方は佐吉に對して、叱つてばかりゐたことを、心からあやまりました。親方は佐吉の前に手をついて、

『どうぞ許しておくれ。』と、涙聲で云ひました。

町の人たちは、笛の主が佐吉であつたと知つて、すつかり驚いてしまひました。

都へのぼる前に、音樂家は母さん思ひの佐吉のために、山のお寺に立派お墓をたてました。佐吉は大そう喜んで、その御法事の日に、はじめて大つぴらに、笛を吹くことにしたのでありました。その日は、町の人たちは、誰も彼もこの山のお寺へ行きました。そして、てんでに持つて來たお花を、新らしいお墓のまはりに供へました。白い光つた石のお墓は、まるで花に埋つてしまひました。いろんな花の匂ひが、澄みきつた山の墓場の空氣に、靜かにたちこめてゐました。

坊さんのお經がすむと、佐吉はお墓の前に進んで行つて、例の粗末な、手の脂でよごれてゐる、細い竹笛をとりだしました。そして、母さんが死んで行く時に聞かしてあげた、うららかな春の日に、かはいゝ嘴を開いて、ちちちと啼いて戯れる小鳥の唄を吹きました。

あゝなんといふ立派な調べでしたらう！　町の人たちはうつとり眼をつぶつて、やさしく微笑むでゐました。心を洗つて貰つてゐるやうな氣がしたのでありました。あたりの枝に啼いてゐた小鳥たちも聲を呑んで、枝のうへで翼をおさめて、小首を傾げて聞いてをりました。

佐吉も、どんなにか嬉しかつたでせう！　いつも笛を吹く時に見える母さんの顏が、今日はよけい嬉しさうに、佐吉の眼にうつりました。そして、母さんが、『佐吉や、ほんとに、よかつたね。』と嬉しさうに、絶えず耳元で囁いて下さるのを聞きました。（をはり）

鎮西八郎爲朝

小島政二郎

その時、爲朝は十三でした。背が七尺あつて、目が豺といふ獸のやうな目をし、肘は猿のやうに自在で、力は九人力、從つて九人かゝらなければ引けないやうな強い弓を引きました。不思議なことには弓の名人になる人と見えて、右の手が左の手よりも四寸も長かつたと云ふことです。

その頃、少納言で藤原信西といふ學者がゐました。しかし、學問を鼻にかけたり、依怙贔屓をしたりするので、評判の惡い人でした。しかし、位や役は上の方にゐましたから、誰も刃向ふものはありませんでした。

或時、この信西が、崇德上皇（上皇とは、一度天皇陛下になつた方が位をお退きになつた後に申し上げるのです。）の御前で支那の書物のお講義をしたことがありました。その時、爲朝はお父さんの爲義に連れられて、そのお講義を聞きに行きました。しかし、まだ位がないので、御殿の上へあがることは出來ずに、階段の下にかしこまつて聞いてゐました。

すると、お講義が濟んだあとで、上皇が

『日本の昔では誰が強い弓を引いたか。』と信西にお尋ねになりました。

『さやうでございます。隨分昔から強い弓を引いたものもございますが、まづ物部尾輿　楯人宿禰につづくものはあるまいと存じます。』

『然らば今の世では誰か。』

『それは平清盛と源三位頼政でございませう。』

その時、突然階段の下から、爲朝がカラ〳〵と打ち笑ひました。信西はキッとそれを見て

『上皇の御前でそんな大きな聲で笑ふのは不敬である。一たい誰か。』と聲荒らかに咎めました。父の爲義は『はつ。』と、答へて、『彼は私めの八男にて、爲朝と申す小冠者でございますが、今日のお講義を聞かせたく思つて召し連れまゐりました。』

すると、信西はやをら座を立つて、階段のそば近くまで歩み寄つて、暫くぢつと爲朝の顏を見守つてゐましたが、

『この小冠者は不思議な人相を備へてゐる。目の中に瞳が二つづつある。歳はまだ十五にはなるまいがまあ、なんといふ大きさだ。――さて、爲朝とやら。なんでその方は上皇の御前も憚らず、歳上の私を嘲笑つたのか。』と苦々しさうに問ひ糺しました。

しかし、爲朝は少しも恐れる樣子もなく

『世間では、あなたのことを學者ではあるが、依怙贔屓の甚だしい人だと云つてゐますが、全くその通り、今の世で弓を射ることの上手を、清盛だとか頼政だとか云はれた。それがをかしさについ吹き出してお咎めを蒙つた次第です。まづ頼政はよろしい。しかし、清盛に至つては、武術も出來ず、學問もなく、唯まぐれ當りで出世をしたやうなものです。かう云ふと、自分の父の自慢をするやうでお聞き苦しいでせうが、爲義なんかは十四の歳に、陛下の御命令をいたゞいて謀叛人を攻め亡したり、いつぞやも奈良の僧兵が朝廷に手向ひをして京都へ攻めのぼるといふ噂のあつた時も、陛下からまづその力行つて防げといふ御命令をいただいて、僅か十七騎でもつて粟栖山に駈せ向ひ、數千騎の大軍を射返したこ

とがありました。しかし、今日ではもう年をとりましたから、昔の勇氣があるかどうかは分りませんが、兄の義朝などはまづ〳〵弓矢を取つたら豪の者であらうと思ひます。』と述べ立てました。

これを聞いた父の爲義は、信西に爲朝が楯を突いて意地の惡い仕返しをされはしまいかと恐れて、爲朝を叱りつけようかと思ひましたが、しかし、玉座に近いところなので、それも出來ずに困つてゐました。すると、そこへ左大臣藤原頼長公が參り合せてこの爭ひをお聞きになり、靜かに微笑んでゐられました。

信西はこの時膝を進めて

『やをれ八郎。この私が依怙贔屓をするとは誰が云うた？　頼政は、つい先頃、紫宸殿の上に毎夜現れた鵺を射て天下に名を擧げた名人である。また清盛は、若かつた折、不思議な鳥が皇居にゐると聞いてたつた一ト矢で射留めたことがあつた。射られた鳥

は、飛んで清盛の袖に入つた。それを引き出して見たら、鳥ではなくつて年を經た鼠であつたので、早速竹を切らせてその中へ封じ込め、清水寺に埋めた。世間ではそれを一竹塚と呼んでゐる。その清盛の振舞を、皆世の人の褒め稱へたことは御身も知つてゐよう。御身の父の爲義が、攻めずともひとりでに亡びてしまふ筈の謀叛人を平げたり、戰爭のことなんか何も知らない奈良の興福寺の坊主共を追ひ返したのとは譯が違ふ。まして御身の兄の義朝にどんな武功があるかは誰も知つてはゐない。これでも私は依怙贔屓をすると云ふのか。』

すると、爲朝はいよ〳〵嘲笑つて

『鳥は獵犬も射て取り、鼠なら猫も取ります。あなたは學問のことには明るいかも知れませんが、弓矢のことはなんにもお分りにはなりません。誰が名人の、誰が旨いのと云つたところで水掛論です。遠慮のない正直なところを申せば、今の代で、弓を取つてこの爲朝に及ぶものは一人だってありますまい。』

これには流石の信西も呆れ返つて、暫くは云ふべき言葉を知りませんでした。が、やがてカラ〳〵と笑ひながら、

『いくら口が横に裂けてゐるからと云つて、よくもさうまで云へたものではあるぞ。考へても見るがいい。藝といふものは、永い年月の間一生懸命に勉强をしてこそやつと一人前になれるものだ。御身なんか、生まれた時から稽古をしたとしても、やつと十年餘りにしかなりはしまいではないか。それッぱッちの稽古でどうして一藝に達しられるものか。これ、相手だつて木像の坊ではないぞ。こっちで射ようと思つてゐれば、向うだつてこっちを射ようと思つてゐるのだ。譬にも、よく射るものはよく防ぐと云ふ。そんなに自慢をするなら、今試しに武士の射る矢を防いでみるか』

爲朝は聞くが早いか

『昔、蒲衣といふ人は、僅か八歳で舜といふ王様の先生になりました。伯益といふ人は僅か五歳で砲兵の長となりました。賢いとか馬鹿とかは歳では極まりません。上手下手も歳では分りません。どんな弓を射ることの早い名人にでも命じて射させ給へ。必ず手助りにしてお見せしませう。』

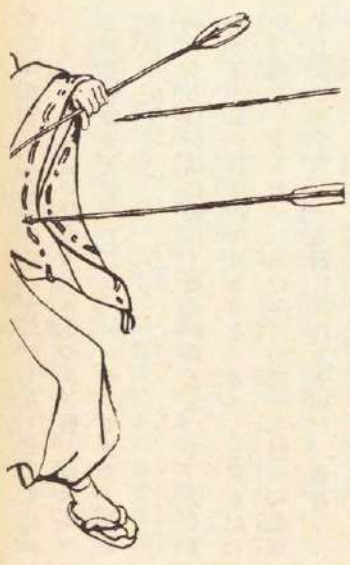
初め信西は言葉で爲朝を負すつもりでゐましたが爲朝が容易に降參しないので、今は本當に腹を立てて、つと立ち上つたかと思ふと、

『誰かゐないか。弓矢を用意して早くまゐれ。』と呼び立てました。すると、聲に應じて、

『只今。』と答へて、式成、則員といふ二人の武士が階段の下に現れました。この二人はこの當時での弓の名人で、一代前の鳥羽天皇の御時に、小さな的を射てお褒めにあづかつた程の人達でした。今こそ老いてはゐますが、しかし、少しも勇氣に變りはありませんでした。左大臣頼長公は、この二人の樣子を見るが早いか、たとひ爲朝が六本手を持つてゐたとしても、この二人の矢を脱れることは出來まいと考へ、見かねて、信西に

『爲朝は形こそ大きいが、まだ十三の子併である。そんな子供を相手に、爭ひ事をしても始まらないではないか。信西殿、冗談が少し過ぎるやうに思ふが……。』と云ひました。同時に、父の爲義に向つても

『早く子息を連れ歸られたらよろしからう。』と仰せになりました。この時まで唯默つて控へてゐた爲義



は、丁寧に一禮をして

『十三と申せば左程幼いとも存じません。今となつてこの場を退くことは、戰場で敵にうしろを見せるよりも羞しいことです。こゝで死んでも爲朝一人の命は惜しいとも思ひません。しかし、若しこゝで爲朝を連れ歸つて、源氏代々の武名を汚すやうなことがあつたら、私としては先祖に對して申譯がございません。御親切は有り難うございますが、どうか爲朝の心のまゝにさせて戴きたう存じます。』と、流石は武士の親らしく、キッパリと云ひ切りました。

これを聞いた爲朝は、喜び勇んで信西に向ひ、

『式成、則員は並ぶ者のない弓矢の名人と聞きました。この二人の矢面に立つのは爲朝として名譽なことと思ひます。若し私がこの二人の矢を取りそこなへば、忽ち命を失ふのは分り切つてゐます。つまり私は命を的にかけてゐるのです。その代り、若し私が矢を取つたら、あなたは何を私に下さるか。』

すると、信西はニコッリ笑つて、

『うん、萬一にも御身が矢を捕へたら、私のこの首を進せよう。』と云ふのを聞き終るが早いか、爲朝は廣庭に走り出て、二人の矢面に立ちました。

しかし、式成、則員の二人はいくら信西少納言の命令だとは云ひながら、敵でも仇でもない人の命を弓矢にかけて取ることは宜しくないと考へて、弓に矢を番へずに、もぢ〳〵としてゐましたが信西が緣

近く出て
『早く射よ。早く射よ。』とせッつくので、仕方がなく、矢を二本づつ用意して、いよ〳〵爲朝に立ち向ふことになりました。
上皇を初め奉り居合はせた人々は、皆々手に汗を握り、息を凝らして見てゐましたが、誰も彼も爲朝の命はないものと思つてゐました。
式成と則員は、仕方なく、二人並んで矢を番へ、ギリ〳〵と弓を滿月の如く引き絞つて、暫く狙ひを定めてゐましたが、
『やつ。』とばかりに、まづ式成が切つて放つた矢は、風を切つて爲朝の胸許目がけて飛んで行きました。アハヤ胸先をブツリと射通られたかと思ふとたんに、爲朝はさッと身を横に開いて、素早く右手に矢を摑み取りました。息もつかせず、則員の放つた矢が飛んで來たのを、爲朝は左の手を振つて捉へました。

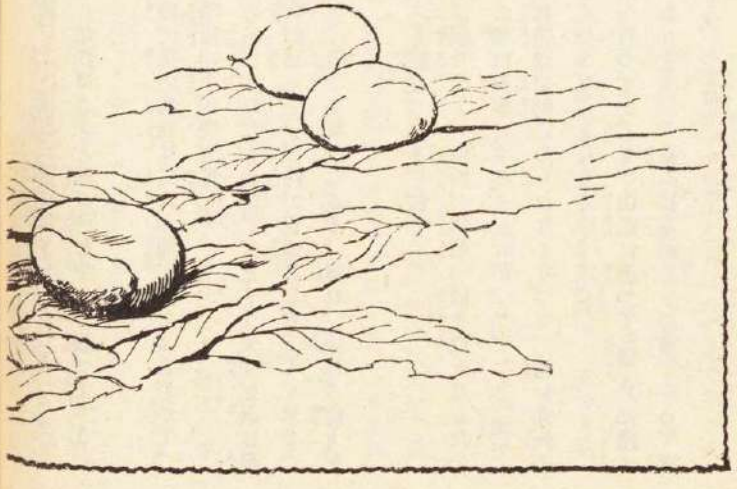
『しまつた。』と式成、則員の二人は心の中で叫びました。『よし、今度こそは爲朝の命を取らぬまでも、おめ〳〵矢を取られるやうなことはせまいぞ。』と、二人はまた矢を番へてキリ〳〵と引絞り、ぢつと狙ひを窺ひました。
『ビユウ。』
『ビユウ。』
やがて殆んど同時に勢ひ込んで弦を放れた矢を、爲朝は、一本を袖を開いてブツリ受けとめ、一本を取る暇がなかつたので、口を開いてカツチリ食ひとめたかと思ふと、忽ちバリ〳〵と鏃を嚙み碎いてしまひました。その早業は、稻光がピカッと光かつたかと思ふばかり、とても人間業とは思へない位なので見てゐる人達は唯惚れ〴〵と見惚れてゐるばかりで、聲を立てるものとてもありませんでした。
爲朝は、兩手の矢を、左右に投げ捨てるが早いか『信西坊主、約束の首を貰はう。』と喚き叫んで階段の上に跳び上り信西に摑みかゝらうとしました。その勢ひに信西はさッと顏の色をかへて顏へ上りました。

その時、父の爲義は二人の間に立ちふさがつて、我子を階段の下に突き落し、
『武士の家に生れたものが、たま〳〵矢先を避け得たとて何が珍らしい、何が自慢になる。こゝをどこだと思ふ。陛下の御前なるぞ。退れ、退れ、退りをらう。』
と、ハタと睨みつけました。
左大臣賴長公も、信西、爲朝の間を取りなしたので、その場は無事にすみましたが、このことが素で、やがて爲朝は京都にゐられなくなつて、遠い九州の方へ行くやうなことになるのです。
九州へ行つてからも、山路に迷つて狼に出遭ふお話がありますが、長くなるからこの邊でやめて置きませう。（をはり）

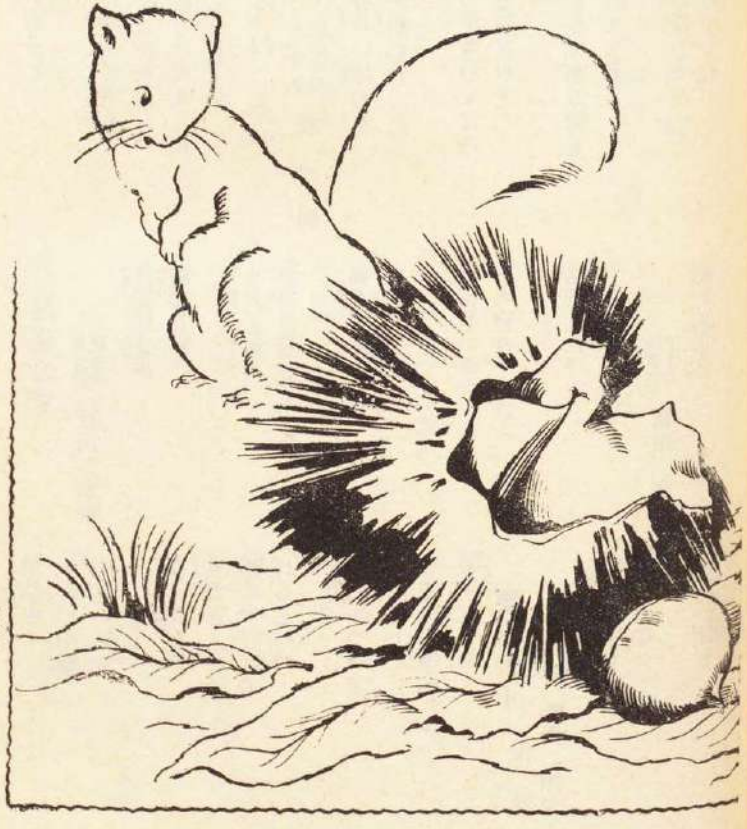
落栗

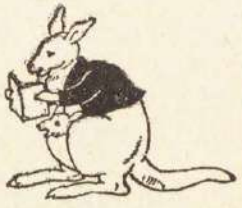
若山牧水

栗の寝姿
かはいゝな
己が落葉の
その上に
ころりころんで



眠ってる
栗のねすがた
かはいゝな





童謡

野口雨情選

（大人篇）

お山の子

茨城縣八原村　森田麥の秋

きよねん夜鷹に
さらはれた
ひよこはお山に
ゐるだろか

ことしも十五夜
お月さん
何にも知らずに
でてござる

木小屋のお春戸で
さらはれた
ひよこはほんとに
ぶじでしよか

はねつるべ

東京市西江戸川　湊　一訓

お春戸の柿の木
實が熟れた

とつてもいゝだろ
はねつるべ

竿もつて來るから
待つてゝね

鳥の番して
待つてゝね

月夜の茸

東京府巣鴨町　石川　未知

月夜に茸が
店出した

小馬よ厩の
家根を貸せ。

親茸子茸の
出店だよ

傘出し
ひろげた

店出した。

栗々坊主

横濱市青木町　横田　雨浪

栗々山の
栗坊主
小針の小鎧
着ていばる

栗々坊主
青坊主
鎧のかげから
にらまへた

竿竹かついで
にげていこ
日暮のお家へ
にげていこ

栗鼠の子

高知市外潮江村　成岡　伸吉

胡桃をだいた
栗鼠の子は
可愛い目をして

泣いてゐた

お窓に寒い
風が吹く

母様恋しと
ないてゐた

櫛の月

大阪府箕面村　中田　一男

今夜のお月さん
櫛の月

隣の静ちやん
櫛がない

優しい三日月
お月さん

静ちやんお櫛に
なつてやれ

たんぼの狐

小石川區白山御殿町　鈴木　星歌

たんぼの　たんぼの
古狐　古狐
案山子をだますと
化けてゐた

たんぼ　たんなか
古狐
案山子の小袖を
ちよいとひいた

たんぼの狐は
馬鹿狐
案山子　だまそと
化けてゐた

銀杏

東京市大門町　有賀美智子

お寺のいてふ
せい高いてふ

三つにわれた
葉つばの影に

ぎんなんぎんなん
ならんで寝てた

こほろぎさん

石川縣出城村　安島　理作

お臺所のこほろぎは
おまんまころ〳〵

ころげたと
今朝までさがして
ないてゐた

此の頃

鹿児島縣第一師範　熊江　清隆

朝は朝露
夜は夜露

涼しくなつたよ
きりぎりす

鵯鳥

東京府中野町　中山　輝

鵯鳥　小鳥
なにみて啼きやる。

蔓の實が赤い。
茨も赤い。

鵯鳥　小鳥
なにみて啼きやる。

流れ星

名古屋市北鷹匠町　大空　夏子

流れた　流れた
こつち向いて流れた

童謡

野口雨情選

《子供篇》

雲のせなかに

神戸市葺合学川　南須原静也

お山の上を
行く雲の
せなかにのって
青空を
ゆらりゆらりと
東京の
おぢさんとこまで
行きたいな

鹽買蟲

茨城縣日立第四校　大和田　俊

からだ一ぱい
鹽しょって
おせどの
街道を
とんでいった

地づき

長野縣龍丘校　下平　準

とんこ〳〵と
お宮で地づき
「ちょのせはんじょ」と
お宮で地づき
みんなそろって
よいしょと地づき

鬼灯

名古屋市愛知校　近藤　貫作

朝の潮風ふくたんび
鬼灯フラフラ動いてた
白い帆かけた沖の舟
赤い鬼灯見て走る

ゆきたいな

千葉縣東金校　大野　敏子

ゆきたいゆきたい
奈良の里
奈良にはをばさま
まつてゐる
かすがのやしろに
鹿がゐる

なはとび

茨城縣水海道校　須田　とく

なはとびしませう
まはす子も上手
飛ぶ子も上手

もつと　もつとはねて
はね　はねて
なはとびしませう
とびませう

からすうり

千葉縣二川校　大原　かん

うちのかきねの
からすうり
朝からちやうちん
つけてゐた
お日様てつても
つけてゐた

一本橋

山梨縣奥野田校　山縣　正信

一本橋渡りや
ゆさゆさゆれる
ゆさゆさゆすれ
一本橋ゆすれ
一本橋ゆすろ
ゆさゆさゆすろ

酒屋の小僧さん

福島縣郡山町　今泉　仁藏

こんちは
たるは　まだ
とくりは　まだ
びんは　まだ
ではまたあした
さやうなら

かくれんぼ

埼玉縣野本校　岸澤　石郎

あかくみのつた
かきのみが
毎日々々
かくれんぼ
かせさへふけば
かくれんぼ
たつたひとりで
かくれんぼ

べんけい草

東京市外青山北町　神谷　彰子

べんけい草の
さかりがすぎた
それでもさびしく
さいて居た
おにはのすみに
さいて居た

ざくろ

千葉縣東金校　下田　ウタ

ざくろの御家が
ほそめにあいた
ざくろの兄弟
みんなそろつて
ねむつてる

ぼんばな

山梨縣奥野田校　保坂　金子

どてでぼんばな
空見てる
あしたは雨か
お天氣か

たんぼゝ

長野縣龍丘校　鹽澤　善

學校のかへり
くはばたみたら
たんぼゝ一つ
ちよんぼり一つ

雨雨

大阪府田邊町　松井錠太郎

夜更けにポツポツ
降る雨は
三日月さまの
なみだだろ
おひるにバラ〳〵
降る雨は
おひさまこぼした
なみだだろ

歸りませう

茨城縣水海道校　秋山　富美

木の
橋渡つて
どんどん
渡つて
歸りませう
日暮れに
なるから
木の橋
どんどん
歸りませう

幼年詩

若山牧水選

にはとり（賞）

山梨縣北巨摩郡
篠尾校尋六　新海俊太郎

秋のまひる
にはとりの聲が
大きい

評、いかにも秋の喜らしい。（牧水）

野原（賞）

山梨縣北巨摩郡
篠尾校尋六　中山富士夫

ぽか〳〵してゐる
ぬくとさうな野原
兎でも
飛び出さうだ

評、いかにも秋の野原らしい。（牧水）

妹（賞）

千葉縣山武郡
東金校尋六　仲田カヲル

目のわるい妹
いつになつたら
學校へ
行けるでせう

評、簡單に云つてる中によく心が動いてゐます。（牧水）

牛

東京府西巣鴨町宇宮仲　故岡添梅子（遺作）

牛屋に牛がたくさん居て
親に別れた子牛は
悲しい聲で鳴いてゐます

（大正十二年八月作）

とんぼ

とんぼよこい
すいすいとこい
草のはつぱにとまらないで
すいすいとこい

（大正十一年九月作）

綴方

齋藤佐次郎選

をかしい思ひ出（賞）

千葉縣東金小學校尋五　小川　才子

丁度去年の十月頃でした。もうそろ〳〵初雪もふるやうな時分だつたので、こたつをあけてありました。

私は學校から歸つてお店の中へ入つて行つたら、お客樣が居たから上へ上つて、『お出でなさいました』と言つておじぎをしました。それから茶の間へ行く所の障子をあけて入つて行くと、こたつのわきに又お客樣がすわつてゐて一人でお菓子を食べて居たので、私は又『いらつちやいました』と言つても、そのお客樣はたゞ『うゝふ』と言つてるだけなので、私はへんな人だなと思ひました。

その中にみんなが笑ひ出したので私は『あんかいよ。』と言つたら、姉ちやんが『あんね、おめが今おじぎした人ん顔よく見たいよ。』と言つたのでよく〳〵見ると、それはあんまさんでした。私はあんのこつたいと思つたけれども、みんなに笑はれてきもがいれてしようがなかつたから『そつだつてよ』と言つて、奥の方へ行つてしまひました。

その時の事を私はあんまさんを見るたびに思ひ出して、一人でくす〳〵笑つて居ます。夜なんかねて居てその事を思ひ出して、一人で夜具をかぶつて笑つて居て、しかられる事が度々あります。

三毛猫（賞）

長野縣片丘尋常高等校高一　竹淵喜代春

空はどんより曇つて、ひや〳〵した風が吹いて來る。少し頭が重くるしいので、北裏の方へ行つて見た。薪の上にはいつも來る毛色の三毛猫がゐた。シッと云ふと、こつちを向いた。シッ〳〵と續けざまに云つて小石を投げてやると、ニャオーとなき乍ら二足歩いた。が又止つてこつちを見て居る。何だか睨らまれるやうだから追つてやる勇氣もなくなつた。こわくなつたので元來た方へ歸つた。家の前まで來た時、後を見ると、立ちくらみをして頭から水をかけられたやうにぞつとして家の中へ馳け込みました。猫には魔力があるでせうか。こんな感じのする事がよくありました。

私の禍ち

千葉縣山武郡
綾海村瓜花尋五　川野　重義

『アッ!!』と、叫んだ時はもう遅かつた。机上にふたを開けてあつたインキびんがおつこちて、新しい疊の三四寸四方位の場が眞赤に染まつた。インキびんをそつと机上に上げた。さあ大變!!　私は吸取紙をもつてゐたおぼえがあつたので、一生懸命になつて、本箱の中を隅から隅までさがしたが、一向吸取紙は見つからなかつた。けれども、インキは遠慮無くズン〳〵しみて行く。これを見て私はます〳〵あせつて、今度は机の引出しをさがしたが、又運の惡いことには見つからなかつた。その時

評、梅子さんはこの八月になくなられたのださうです。（牧水）

雨上り

山梨縣北巨摩郡 篠尾校尋六　茅野　千代

雨がやんだ
こまがたけの
てつぺんが
近く見える

評、歌も誠にすつきりしてゐます。（牧水）

朝

山梨縣北巨摩郡 篠尾校尋六　中山　ますみ

露草の中を
誰かが通る
つめたさうだ

評、あなたのほかのも皆よかつた（牧水）

いなご

山梨縣北巨摩郡 泉校高一　坂本いさを

静かな草を
いなごが一匹
ゆすつてゐる

評、静かだなア。（牧水）

海水浴のかへり

香川縣木田郡 氷上校尋六　鈴木　薫

海水浴しての歸り
地藏樣のせんだんの下で
涼んでゐると
お偏路さんが涼みによつて
龜餅をくれた
すげ笠に京都と書いて
あつた

頭の毛

高知縣中村町尋四　永橋　綾

おぢさんの頭のけは
いつもぼうぼう
しゆろの毛のやうです

風

山梨縣北巨摩郡 篠尾校尋六　高橋すゑの

馬をひいた
おつちやん
かついだこうもりが

私は泣きたい位であつた。ふと思ひ出した。『ざうきんがいゝ』私はかう叫んで、夢中で臺所へざうきんを取りに行つた。

來て見ると、大分インキはしみて、へつてゐた。直ぐ私はざうきんで一生懸命にふいたけれども、疊のあみめにしみこんだ色はとてもおちない。私は暫く眞赤に染まつた處をぢつと見つめてゐた。そして隨分心配した。

『もしお父さんにおこられたら、何んと云はうか』

などゝ、色々先きの事を思つた。

『いゝや、おこられても仕方がないや。やつちやつたんだもの』

と云ひながら落ちないインキを見て思はず袖で涙をふいた。そして私は眞赤に染まつたざうきんを置きに行かうと思つて立つた。

臆病

東京市外代々幡町字幡ヶ谷　長谷川輝子（十二歳）

夜お姉さんと二人で下に居りました。お父さんやお母さんは二階にいらつしやいます。私はねむくなつたので、おふとんの上にころがつて二人で、お話をしてゐました。急にお臺所の方からガタ〳〵と音がきこえてきました。私はおどろいてお姉さんに『何でせう』と聞いて見ましたらお姉さんもびつくりした樣な顏をしてゐましたが立つてお臺所へ行きました。ちきもどつてきて『あたし見てこなかつたから輝ちやん見てゐらつしやい』と言ひました。私はびく〳〵し乍ら行きましたが、こはかつたので見てきませんでした。お姉さんに『ばけつとばけつとぶつゝき合つてゐるのよ。』と言ひましたら、お姉さんは笑ひながら『ばけつは生物ぢやあないから、ひとりでぶつつくもんですか。』

とう〳〵うそをついたのが分つてしまつたから、私は『外に泥棒がゐて殺されるといやだから見てこなかつたの』といひました。『まあ弱蟲ねえ』と笑はれてしまつた。

少したつてから、お母さんが降りていらしつて『どうしたの』とお聞きになつたから、さつきの事を話したら又笑はれました。私はくやしかつたので『いつこちやん（姉）だつて、こはがつて見てこなかつたのよ。』とお母さんに話したらお姉さんは『うそよ、あたし見てきたんだけれど、わざと見ないふりをしたのよ。あれは犬が食物をさがすために御飯蒸をかきたてゝゐたのよ、てるちやんなんかふだんいばつてたつて隨分臆病ね。でもその犬白だから、暗い所で見るとちよつと氣味が惡いわよ』と言つた。ガタカダやつてたものが何だか分つたら、自分の臆病がをかしくなつてしまつた。

大地震の日

山梨縣大月廣里東校尋六　千ヶ崎英三

大正十二年九月一日の事である。私は晝飯を食べて兄の命令で五十錢を持ち、おもちや屋へごもくを買ひに行つた。おもちや屋に行つてごもくを買つて居ると、不意に足もとがゆれ始めた　おもちや屋のおもちやが『がた〳〵〳〵』と音を立てゝゆれ始めた。私はあわてておもちや屋を飛びだした。店の

すゞしさうだ

花びんの花

栃木縣今市町三七　高橋セツ子（十二歳）

教室の花びんの花が
枯れてしまつた
みんなの顔が
淋しさうに見える

あめあがり

山梨縣北巨摩郡篠尾校尋六　新海　眞治

あめがやんだ
うめの木の葉が
びいらん／＼おちる
くりひろいに
いきたくなつた

小さな松

岐阜市佐久間町　柴田　美緒（十五歳）

禿山の上の
小さな松を
風よ
いぢめるな

つばめ

山梨縣北巨摩郡篠尾校尋六　坂本　俊信

授業が始つた
廣い庭をつばめが二匹
とんでゐるばかり

冬の山

東京府淀橋町柏木　富岡たかし（十五歳）

冬の山
頂上にすこし
日が當つてゐる

日暮

千葉縣山武郡東金校尋六　永島　千鶴

夕方
竹山は暗いが
空は明り

山

女の子供は赤坊をだいてあつちへころ／＼こつちへころ／＼ところがりながら飛んでゐる。日頃おてんばな氷屋の女も、泣き泣きお母さんにだきついてゐる。私も大勢の人とうろ／＼して居たがうちが、心配になつてうちの方に歸つた。うちでも壁は落ち障子や戸がたふれてゐる。突然臺所の方で『がたん』と大きな音がした。隣りのうちの瓦や石がころ／＼落ちる。私はうちの人達と一しよにむしろや戸を持つて、裏の野原の木の下へ陣取つた。妹がお父さんのしやつをもつて居るので聞いて見ると、お母さんにおせんたくするのだからお父さんのしやつを持つてこいといはれて二階のしやつを取りに行つたと思つたら、あの大地震だからしやつを片手に持つてころがるやうにはしご段をかけおりて逃げて來たのださうだ。

兄も兄だ、赤坊と二階であそんでゐたら、地震だから赤坊をだいて覺悟して居たといつて隨分らくだつたと負けをしみをいつて居た。裏のをばさんは東京に親類があるので心配してゐた。夕方になつた。父は歸つた。父の話しでは吉田はひどいさうだ。酒屋では酒を二百石もこぼして二萬圓も損がいしたとこがあるさうだ。暗くなつたからろうそくを買ひに行つた。大月も今は眞しやみである。私のうちも今日は野宿だ。戸板を四枚ならべて其の上にござをしき、又其の上にふとんをしいて寢た。私達と一しよに隣りの電車會社に出てゐる辰ちやんと牛田さんとの三人で寢た。あたりからふいてくる風は寒い。時々ろうそくのほのほが消えさうになる。私が便所に起きたら裏の方にもあかりが見えた。

マッチ

東京市下谷區谷中天王寺町　菊池　敏男

箱の中を見ると一本しか殘つて居ない。さつきからいくらすつても直ぐ風に取られてしまふので、思切つて二本一緒にシューと大きな火を出したがそれもやはり消されてしまつた。氣はあせつて來る今度こそはとすつたマッチはチョロ／＼と青く紫色の光を出して次第に赤味を帶びて來る。もう大丈夫、其時の心よさ。私の心はぱつと明くなつた。

雨

埼玉縣北埼玉郡大越村　腰塚　正夫（十五歳）

今日もまた雨か。くやしいなあ僕はうらめしさうに空を見上げた雀。僕をあざけるやうにチュ／＼と鳴いて居る。N君と僕とは今日の天氣をあてにして、利根川へ魚釣りに行く約束で五十題もある算術の問題を昨夜ねむい目をこすりこすり寢ずに書いたのだ、きのふの樂しみは何處へやら。

あゝくやしくつてたまらない。たゞしとしとと降る雨がしやくにさわる。

今朝の寒さ

千葉縣東金小學校尋五　佐久間幸子

和歌山縣串本校尋三　坂口　玉枝

さびしい〳〵
山の中から
としよりのおぢいさんが
つゑをつきながら
そろ〳〵おりてきた

仕事

和歌山縣尋三串本校　梅田　正治

遠い〳〵
畠の中で
百しやうが
仕事してゐる

川の水

新潟縣小浦原郡七谷校尋五　泉田　ハル

石がつき立つてゐた
水がよけて
さら〳〵流れて
行つた

冬

わたしは今朝べんじよへいかうと思つておきた。するとさむくてさむくてふるえ上るほどであつた。いそいでべんじよへいつて來て、又とこの中へもぐりこんだ。そしてかんがへた。

『あゝゆうべのゆふかんに、あした天氣そしてさむくなる、とかいてあつた。ほんとだ。新聞にかいてあつたのはほんたうだ。と思ひながらねむらうと思つたがねむれないので、昨夜昌ちやんがお友だちからかりて來た雜誌を見ようと思つてさがして見たがない。ねえちやんをおこしてきいて見た。するとねぼけたこゑで『ふとんの下にある』といつたので、ふとんの下をさがして見ると、ちやんと出て來た。わたしは一しようけんめいによんでゐた。そのうち夜はだんだんあけた。一番どりのなくこゑもきこへた。それでも一しやうけんめいによんでゐた。

下ではもうおきたのでせう、お父さんやお母さんのこゑがきこえて來た。それでもわたしはよんでゐた。そのうちおざしきへお日樣がさしこんで來た。下でお母さんがおきなさいといふこゑがきこえた。わたしはちようどその時よみをはつた。そしてとびおきた。まだねえちやんはねむつてゐる。おきて見たがべんじよへいつた時のようにさむかつた。またふるえ上つた。

女ノ子

東京市麴町區中六番町　井關正子（十一歳）

私ハ九段ノバラックヲ通ツタトキ、カハイサウナ言葉ヲキヽマシタ。私ハハットシテソノコエノキコエテクル方ヲミマスト、一人ノキタナイナリヲシタ女ノ子ガ『オツバイ、オツバイ』トサワイデキルノデシタ。イヂノ惡イ男ノ子ハマハリヲトリカコンデ、ワイワイサハイデオリマス。私ハ何ントナクカハイサウニナツテ、オ母サンニオネガヒシテ、牛ニユウヲカツテイタゞイテ、ソノ女ノ子ニヤリマスト女ノ子ハヨロコンデ、一イキモツカズニノンデシマヒマシタ。遠クノ方デハ、今惡サシタ男ノ子供タチガオニゴトヲシテキマス

長崎縣北松浦郡佐々村口石校尋六　金丸　榮子

いてうの葉が
少しづゝ散つて行く
みんな散つたら
冬になるのだ

お庭の池の
はすの葉が
だん〳〵枯れて行く
みんな枯れたら
冬になるのだ

拍子木

東京市牛込區鶴巻町　寒竹　進（十五歳）

柏子木が家の
前を通つてる

つばめ

香川縣木田郡氷上校尋六　田中　文八

つばめが後から後からと
矢のやうに飛んゆく
何事が起つたのだらう

大雨の日

神奈川縣川崎町堀之内　村上　清夫

僕が朝、目をさまして見ると、家の中は暗くて、たゞらふそくの火がちよろ〳〵とゝえて居るだけであつた。僕はどうしたのだらうと思つて、家の者に聞いて見ると、大風である事を知つた。

臺所に行つて外を見るとたんぼの眞中にやねが落ちてゐるのにきづいた。何所のやねだらうと思つて家々のやねを見まはして見ると、仕立屋の二階のやねがないのにきがついた。僕は風がやんでから外へ出て、自分の家のやねを見たら、かはらがたくさんくだけたりはがれたりして居た。ふと右の方を見ると、よその家のやねにあながあいてゐる、仕立屋の二階に寢てゐた人は、その日はかぜをひいてねてゐた。僕はずゐぶんびつくりした。

通信

幼年詩選後

若山牧水

○佳いのが澤山あつた。選外にしてあるものの中にも發表したいのがあるのだけれど、どうも行數の都合で駄目だ。氣の毒だが、我慢して下さい、サテ、これで舊くから溜つてゐた分も全部濟みました。新しく出來たものをどん〳〵よこして下さい。

○今號に出てゐる「牛」と「とんぼ」の作者岡添梅さんの兄さんがその原稿に次ぎの樣に書き添へてありました。誠にお氣の毒に思ひます。『妹は今年八月の末、あの大地震のあつた九日前に永眠致しました。九歳で二年生でした。九月號に自作「夏」が出た時どんなにか喜びましたらう。牛は妹の最後の作で、死ぬ前の日に作つたものです。岡添信次郎』

○私はこの十月の末に、甲斐から信濃へかけて山巡りの旅行をしました。甲斐の小淵澤といふ淋しい町の宿屋に泊つてゐますと二人の男の人が蒲團などを持つて私の部屋へ入つて來ました。二人とも小淵澤小學校の先生で生徒たちに頼りに幼年詩を作らしてゐる人だちであつたのです。小淵澤小學校からの幼年詩は本誌にも澤山出てゐる筈です。どうして私の泊つてゐる事が解りましたと尋ねますといま階下で宿帳を見て知つたと笑はれました。その二人のうち一人の先生はその宿屋に下宿して居られるのでした。明日、學校で、幼年詩を作る子供たちに逢つて行つてくれとの事でしたけれど、先々の豫定がありましたのでそれが出來ずに殘念でした。でも、面白い話ではありませんか。

綴方の選後に

齋藤佐次郎

▽今月選をした分から大地震を書いたものがめつきりふえました。もう今となつては、なるべく大地震の記憶を忘れたい位ですが、一度は皆さんの作にあらはれるべき題材でせう。

▽で、地震を書いた作の數はなか〳〵多かつたのですが、とても載せ切れないので、ごく一部だけをとりました。中でも柴田美緒さんの『東京の火事』といふ作が最も目をひきましたが、のせ切れないので殘念ながら割愛しました。この作では、新聞社の前で東京大火の報知を見て、皆ながびつくりしてゐる有樣を書いたところが上手に書けてゐましたが、それよりも一層印象の深かつたのは、歸り道に女のお友達に出逢つて東京にゐる親しい人達の身の上を案じながら話すところを書いたあたりです。本當にあそこが忘れられない印象を殘されました。

▽次に山梨縣廣里東校の生徒さん達の「大地震の日」が面白く讀まれましたが、この學校の作としてはいつも程優れてゐないやうに思はれました。しかし、正直に書いてゐる處は何よりも氣持ちのいゝ事です。一々の作に就ていふと、皆な同じやうな出來ばえで、どれを特に選び出していゝか困る位ですが、千ヶ崎英三さんのが、一番よゝのつてゐて、書かうとしてゐる事を十分にはつきり書き現してゐるので、それを一つ出して、後は殘念ながら殘面のないために割愛しました。

▽小川才子さんの「なかしい思ひ出」と長谷川輝子さんの「臆病」共にいゝのだつた。殊に「なかしい思ひ出」はよく物を見てゐる。

▽竹淵喜代春さんの「三毛猫」菊地敏男さんの「マツチ」腰塚正夫さんの「雨」共によく似た作だつた。高等一二年の生徒らしい氣のきいた見方がしてある。それだけに此のやうな作はどうかするとまじめを缺いた、ほんとの氣のきいたところだけを見せようとする墮落したものになりたがる心配がある。まアどつちかと言ふと、もつと氣がきかないでもいきから、忠實なおとなしい書き方の方が間違ひがなくつていゝ。

▽井關正子さんの「女の子」は光つてゐる。いゝものだ。何ともいへない純粹な美しいものだ。

▽また「遠足の日のあけがた」はクス〳〵笑はずにはゐられない程輕妙なものだつた。

▽尙この外にもいゝ作はありましたが、一々の短評は略します。

▽たゞ一言つけ加へて置きたいのは、綴方の書き方には決して一定のきまつた、樣方はなく、自分の思つたこと、見たことをありのまゝに、嘘をつかずにぐんぐん書けばいゝのですが、それを未だに如何にも文章を書くといつた風なおきまり文句を並べた作が時々出て來て困らせられます。さういつた作を書く人の名を一々擧げることは出來ませんが、さういふ人には十分に反省してもらひたいと思ひます。

募集童話に就て

齋藤佐次郎

○誌面の都合でながい間募集童話を載せられなかつたのは、相濟まないことです。二月號で、漸く誌面の整理がつきましたから、次號からいよ〳〵大々的に皆さんの苦心の作を掲げます。暫く休止になつてゐた事を慮寡の皆さんに謝します。

○で、しばらくお休みにしてゐたゞけにいゝ作が澤山に集つてゐます。特に目をひいた作と作者の名を擧げますと、

○盜賊を捕へて叱られた話（久米敏一）○片目の猿（久保一馬）○赤い木の實（土橋力）○水晶の十字架（江口雄一郎）○喇叭の吹口（廣瀨まさみ）○見えない英雄（新井清一）○馬盜人を捕へた話（香手鳥）○白い蝶と西洋紫陽花（吉澤スガ）○迷子（宮田弘村）○海の王樣（梅田三良）○てんとゝ蟲ときりぎりす（村瀨英武）○横着小雀（近藤貫作）○蝶とかへるの話（笠原いし）○ほゝづき賣りと魚（森三郎）

○以上の諸作の内から次號の推薦を決定して發表掲載いたします。尙、今後はどし〳〵投書して下さいまし。

募集傳說童話に就て

本誌で懸賞募集した傳說童話の成績は前號で當選作と佳作の一部だけを發表しました。その節、佳作を全部誌上で發表する積りでしたが、誌面の都合で遂にそれが出來ませんでしたので、それをこゝに掲げます。

未發表の佳作の中には、尙いゝ作があつて、是非その分を誌上で發表したいと思ひますので、何れよい折に實行いたします。中でも北田初子さんの「不忍池の蛇」は優れたものとして選者から推薦になつてをりますから、此の作は近い號で推薦作として掲載する豫定になつてをります。で、佳作の題名と作者名とを擧げますと、次の通りです。

啞のお菊（長野）小木曾次郎
蟹滿寺の由來（峽草）水谷富次郎
孫太郎蟲（福島）藤奥の人
鯖鮨を退治た話（仙臺）大友喜助
築島人柱物語（神戸）淡路鳥吉
湖水の白鳥（秋田）森谷草火
小沼の傳說（東京）日向なな
稚兒ヶ淵（京都）小川さき子
七色堤（新潟）鈴木加楓
川祭の傳說（山梨）篠原皎
お菊地藏の由來（北海道）善理牧草
鯖鮨岩（東京）松村公一
猿の嫁に行く小菊娘（大阪）大塚好元
阿新丸の隱れ松（東京）柴野重夫
お玉の人形（東京）練木準
稚兒と愛犬（千葉）元吉桃時芳
三番目の娘（新潟）青木草村
小僧二人（朝鮮）池田宗一郎
お地藏が山（愛知）竹内銀蝶
津汐丸（福島）角野憲藏
無題（高知）永橋大介
山男になつた少年（弘前）日野亮一
小沼姫物語（横濱）金子多代
義民六人子の由來（大阪）永島ふみ
名無の權兵衛（東京）御園春村
白い鶴（山口）伊藤三千夫
水内の人柱（東京）小山慶子
白菊（東京）岡添信次郎
酒井戸の由來（東京）檜山潤朗

げんよう塚　（大阪）　宮崎慎太郎
一月十六日に咲く櫻　（長野）　山本　好夫
無題　（宮城）　日下部新一
血の好きな兄弟　（神戸）　阿部　光雄
太作蟲　（福岡）　曾我　正光
赤い魚の話　（茨城）　石橋　宗雄
長峰の池　（東京）　富田　年男
湖山長者　（長野）　松本　君子
赤い地藏樣　（東京）　持田　清志
しにめし　山脇千賀子

編輯室より

（記者）

○二月號は、お正月のはじめに出るのですから、編輯部は大騒いをがしい思ひをしました。新年號といふ大物の後に、すぐと二月號の「日本歴史童話號」といふのですから全く目が廻るやうでした。でも漸く全部の編輯を終へてホッとしました。やれ〳〵これでやっとお正月が迎えられます。雜誌のお正月でなくて、ホンとのお正月がです。

○さて、新年號は皆樣から非常な大好評を受けまして、とぶやうな賣れ行きでしたので、編輯室の一同大喜びでなりました。第一寺内先生の表紙とロビンソン双六が皆さんの注意をひきましたと見えて、大分におほめの言葉をいたゞきました。二月號からはまた〳〵本誌の神秘な發揮いたします。

○正月號の懸賞募集の傳說童話は豫想以上の好結果を得てうれしい事です。次號にはまた面白い一大懸賞募集をいたします。「金の星」は時折かういつた意味の深い募集を行つて、やがて日本の童話文學のために大きな收獲を得る事を期してをります。

○次號は豫告の通り「支那傳奇童話號」です。傳奇といつては解らない方があるかも知れませんが、支那の不思議なお話ばかりを源山にのせます。これはまた面白くてめづらしい試みなので、さぞ皆樣から大歡迎を受けませう。

○藝術味の豐かな挿畫をかゝれるので鳴り響いてゐる。武井武雄先生が、これから毎號苦心の畫話を本誌で發表して下さいます。

○本誌の水島先生の漫畫は、所によつて水島先生でなくては書けない賞に面白いものですが、これから毎號先生の傑作漫畫が出ます。

○尙、長篇つゞき物として箱田忠光先生の譯になる「十五少年漂流物語」を次號から掲載しますが、これこそ、世界の一大名作ですから湧くやうな喝采を受ける事でありませう。

講演部より

◇『金の星』は新しい時代の童話と童謠を普及するために、講演部を設けてあります。

◇講師は、童話は沖野岩三郎先生、童謠は野口雨情先生が擔任されます。

◇講演御希望の方は金の星社宛にお申込み下さい。出張費、その他、お問合せに從ひ御返事申上げます。—（終り）—

誌友並に愛讀者へ！！

振替口座は、しばらく休止になつてをりましたが、前號通信欄でお知らせいたした通り、既に開始になつてをります。今後は、今まで通り、東京五九五九六番の本社振替口座で御送金下さる方が御便利でございます。

金の星誌友募集

『金の星』の誌友を募集いたします。誌友にはいろ〳〵の特典と便宜がございますから、御希望の方は本社宛に誌友規則書をお申込み下さい。早速お送り申上げます。

金の星の合本

水島爾保布先生裝幀

眞赤な繻子クロースへ、美しい金箔を置いた、目もさめるばかりに美しい水島先生獨特の裝幀です。

出版部より

○金の星社が新に計畫中の新刊物を御紹介いたします。

○野口雨情先生の一大苦心の著になる童謠に關する先生の論文を近く出版いたします。尙同先生の第二童謠集も近く出版の豫定です。

○次は小島政二郎先生の「狼少年」といふ長篇童話を出版いたします。それは世間になりひゞいた一大名作ですが、それを例の小島先生の名筆で譯されたものです。出版のあかつきには大好評を受けることを信じます。

○また窪田先生の源平の合戰を書いた歴史物語も近日中に出版する豫定になつてをります。

○それから沖野先生の一大傑作として「金の星」誌上に年間にわたつて一大好評を受けた「山六蔡さん」が出版される事になつたのを皆さんに喜んでいたゞきたく思ひます。かつて皆樣から度々出版のございそくを受けてをりましたが、それが遂に一冊の美しい本となつて出版される事になりました。

○前月號で豫告いたした金の星社の「世界少年少女文庫」もいよ〳〵二月はじめには店頭へ現はれる筈です。御愛讀を待ちます。

◎第一輯（賣切）

◎第二輯（第五卷第一號より 同 第六號まで）
▽定價金壹圓八拾錢
▽送料金十四錢

◎第三輯（第五卷第七號より 同 第十一號まで）
▽定價金壹圓五拾錢
▽送料金十四錢

◆今度新に第三輯が出來ました。一輯、二輯と一しょに是非書棚へお備へ下さい。

◆金の星三月號は◆

支那傳奇童話號

一月號、二月號とも特別號を出して非常な大好評を受けましたが、三月號は大に目先きを變へまして、支那に渡つて、支那の不可思議な獨特の面白いお話を集めることにいたしました。どうぞ御愛讀を願ひます。この號も特別號で定價金四十錢、二月初旬發行

新しく出た本

○**意東京**（野口雨情、蕗谷虹兒、西條八十先生等外十氏著）今度の東都の大震災に出あつた知名の詩人達が、いたましくも壞された東京を歌つた詩と散文とを集めた本です。震災に就て出來た本は數かぎりなくありますが、この本のやうに、それを詩と散文の上にあらはした著作は餘り見うけません。執筆者は野口雨情、蕗谷虹兒、西條八十、竹久夢二、吉屋信子、川路柳虹、生田春月、人見東明、水谷まさる、下田惟直、濱名東一郎氏等何れも當代の人氣者ぞろひ。裝幀と挿畫とは蕗谷虹兒、竹久夢二の兩先生の手になつただけに、哀愁にみちた美しいものです。詩と畫を愛する人々には、東都の震災を記念する最も適當な本です。（四六判一八七頁　定價金九十五錢　東京神田區仲猿樂町十七　交隣社發行　振替東京四二七九番）

○**帝都復興の歌**（金子彥二郎氏作歌、福井直秋氏作曲）童謡書店として名を知られた來本書店が復興第一の出版として意義深い冊子を復興の大精神なこの歌と曲とは同じく東京の青山師範學校の教諭福井直秋先生の作になつて、東京府教育會が紀纂したものだけに、學校や家庭で歌ふには最もよいものです。（四六判パンフレット。定價金五錢送料二錢　神田錦町一ノ一、來本書店發行　振替東京五二三五九番）

═幼年詩掲載外佳作═

木村庸太郎（仙臺）　宍倉　時枝（千葉）　茅野　卓雄（山梨）　渡邊ひでの（山梨）　入倉あさみ（香川）　小林　保藏（山梨）　小川　けい（和歌山）　新田　君子（山梨）　宮崎　季一（香川）　須長カナル（千葉）　仁科　晃（山梨）　有原　とく（千葉）　山本あやめ（山梨）　白井　文一（香川）　大隅　高治（靜岡）　大久保定藏（香川）　土屋　房子（千葉）　安川まさ子（千葉）　小林　茂樹（山梨）　井崎　進（岐阜）　齋藤　留子（山梨）　佐藤　あさ（山形）　村松　先藏（大阪）　宇野　竹子（仙臺）　山野　龜吉（山形）　三原　正友（愛媛）　多田　愛子（大阪）

有賀　一猛（山梨）　水尾　博子（名古屋）　花輪　清雄（山梨）　坂本おこう（山梨）　長山勘次郎（香川）　青木きよし（山梨）　齋藤　孝大（北海道）　高橋　德義（香川）　岡添喜久子（東京）　二川　秀夫（香川）　岩波　一喜（山梨）　山本　榮（山梨）　淺川みゆき（山梨）　伊藤うめ子（山梨）　岡　信子（東京）　今井　治女（山梨）　阿部　あさ（千葉）　千勝　きぬ（千葉）　小原くにゑ（山梨）　新海　善松（山梨）　渡邊　貫作（多古屋）　近藤　幹江（東京）　山崎　時彥（和歌山）　中村　博子（仙臺）　矢島　清子（臺灣）　佐野　井上宇太郎（東京）

下田市次郎（名古屋）　太田　惟元（東京）　横山　良子（臺灣）　有田　清雄（東京）　茅野　良一（千葉）　水田　春吉　長野）　水島　トリ　新潟）　長　山ヨカ（大阪）　柴田　市郎（山梨）　長崎　信一（大阪）　堀川　榮市（東京）　窪田　蝶子（宮崎）　井崎　重男（廣島）　安川　房子（大阪）　大倉　文子（山形）　井川　和子（臺灣）　宇野　竹子（愛媛）　大和田　正（臺灣）　近藤　市郎（新潟）　辻本　良一（東京）　君塚　敏子（福岡）　望月　直治（岡山）　遠山　健市（山梨）　佐藤　春雄（千葉）　山田百合子（長野）　太田　花眠（北海道）　宮川　蚤一（宮城）

═自由臺掲載外佳作═

渡邊　君子（東京）　荒木　義雄　横濱）　吉田　島子（九州）　岩波　秀吉　北海道）　北原　遠吉（香川）　小田　好子（鳥取）　高野　國雄（東京）　西本　賢吉（大阪）　松田　利一（和歌山）　中島　國子（山梨）　品島　文子（山形）　齋藤　龍一（東京）　早川　玄子（高知）　向井　甲二（東京）　坂本清次郎（香川）　山崎　良治（北海道）　千葉　信郎（名古屋）　高田　欽子（東京）　野口　鶴子（神戸）　西田　正男（福島）　江木　榮治（山梨）　小笠原光夫（秋田）　横田アサ子（茨城）　宇野　藤一群馬）　島田　一夫（東京）　廣田　信子（兵庫）　大川　兵三（大阪）

═綴方掲載外佳作═

榮田　美緒（岐阜）　寒竹　進（東京）　千ヶ崎英三（山梨）　富岡たかし（東京）　神田　靜子（福岡）　渡邊ひでの（山梨）　大和田　俊（茨城）　後藤　良野（山形）　羽田　雅雄（山梨）　田島　コト（千葉）　佐藤　重男（千葉）　谷　親夫（熊本）　佐藤喜久代（廣島）　中島　專二（福岡）　篠原　英男（長野）　熊岡　久子（北海道）　島貫　賢子（大阪）　君塚　和一（東京）　長井　利夫（福島）　中村　弘（茨城）　圓山　良作（青森）　寺田　實子（新潟）　手塚　武一（大阪）　杉田　信子（和歌山）　清水　利市（臺灣）　森川清一郎（愛媛）　小笠原太一郎（大阪）　山本　光夫（山梨）　宮澤健二郎（山梨）　市東　幾久（千葉）　遠山　正（山形）　市村　正（栃木）　飛塚　キヌ（山形）　横山　武司（新潟）　高橋　豐子（千葉）　寺田芳太郎（秋田）　渡部松太郎（北海道）　小笠原雪舟（千葉）　宮安　正男（豐橋）　横山　幸治（新潟）　長崎　利一（東京）　西本　鶏蹄（長崎）　鼠屋　久雄（山口）　野口　茂雄（京都）　高畑　三照（北海道）　辻本ヨシエ（栃木）　松林　君江（新潟）　島田けいい（朝鮮）　安部　一郎（東京）　西谷美佐緒（東京）　望月まつ子（北海道）　品川　君子（東京）　寺田芳多郎（秋田）　藤元　辰一（滋賀）　江本　三郎（東京）

═童話掲載外佳作═

（大人篇）

近藤　佳郎（新潟）　浦野　文雄（東京）　中島　周藏（北海道）　堀川　龍治（名古屋）　服部　榮一（東京）　伊丹　沙影（長崎）　横山　恕一郎（新潟）　腰塚　正夫（埼玉）　柴田けい子（東京）　仁科　松枝（山梨）　下谷　泰吉（高知）　井崎　進（岐阜）　玉貫　貞子（埼玉）　山田　照華（長野）　菅沼百合子（長野）　内藤　蝶子（山口）　窪川　春川（兵庫）　小島久四郎（北海道）　市川　喜雄（宮崎）　松本　甲一（東京）　津田　良子（新潟）　赤坂　淳子（鳥取）　青木　白川（靜岡）　本橋清一郎（東京）　鈴江　誠一（德島）　山本　久雄（東京）　赤坂　榮（岡山）　中村　文一（京都）　榮田　美緒（岐阜）　星合　勝（長野）　鈴江　誠一（德島）　山本　久雄（東京）　赤坂　淳子（鳥取）　青木　白川（靜岡）　本橋清一郎（東京）　松本　甲一（東京）　津田　良子（新潟）　小島久四郎（北海道）　市川　喜雄（宮崎）　内藤　蝶子（山口）　窪川　春川（兵庫）　飯田　一夫（宮城）　高木喜美子（東京）　長原　隆二（北海道）　佐野　俊子（茨城）　鳩山　彥一（高知）　井戸　春子（京都）　雨宮　美子（東京）　向田　軍六（長野）　早川　文夫（長野）　納村　三長（廣島）　齋藤　蘭子（東京）　御田兵太郎（高知）　今泉　雅子（福島）　山上　良夫（大阪）　秋郎（熊本）　齋藤　信也（福島）　小花　吳郎（東京）　小山三四郎（神戸）　木村　夕風（大阪）　彩子（大阪）　辰三（朝鮮）　榮（岡山）　榮男（愛媛）　惠子（山形）　虎吉（岩手）　周吾（長野）　一誠（神戸）　清子（德島）　巖雄（東京）　信子（大阪）　春子（京都）　彥夢（酒井原）　禮子（東京）　八郎（東京）　軍六（長野）　野行田　春治（山口）　倫子（鹿兒島）　泰（新潟）　赤人（横濱）

（小供篇）

水長ミドリ（熊本）　横山　幸治（新潟）　滿岡　春敏（滿州）　佐藤　重男（千葉）　沖　忠雄（廣島）　横山恕一郎（新潟）　小田　暉（東京）　玉貫　貞子（埼玉）　山田　照華（長野）　菅沼百合子（長野）　井崎　進（岐阜）　遠山　正（山形）　伊藤　駿二（東京）　向山きし子（山梨）　荒井　勝夫（鹿兒島）　坂木　弘（青森）　筒竹千枝子（和歌山）　伊勢多希夫（東京）　岡本しな子（京都）　島田けいい（朝鮮）　井關　二男（福島）　小野　文子（東京）　西谷美佐緒（東京）　湯澤　實（長野）　青柳　一夫（神奈川）　渡邊ぜい子（北海道）　寺田芳多郎（秋田）　山内　芳治（千葉）　藤元　辰一（滋賀）　緒方　健三（熊本）　江本　三郎（東京）　高野　綾子（東京）

═金の星新誌友名簿═

神方　秋郎（熊本）　齋藤　信也（福島）　星合　勝（長野）　井口　兼子（大阪）　鈴江　誠一（德島）　小花　吳郎（東京）　山本　久雄（東京）　小花喜久子（東京）　赤坂　淳子（鳥取）　小山三四郎（神戸）　青木　白川（靜岡）　文一（京都）　本橋清一郎（東京）　三井　夕風（大阪）　松本　甲一（東京）　彩子（大阪）　津田　良子（新潟）　高橋　辰三（朝鮮）　小島久四郎（北海道）　大石　榮（岡山）　市川　喜雄（宮崎）　後藤　英男（愛媛）　內藤　蝶子（山口）　木下　惠子（山形）　窪川　春川（兵庫）　川上　虎吉（岩手）　飯田　一夫（宮城）　田村　周吾（長野）　高木喜美子（東京）　山口　一誠（神戸）　長原　隆二（北海道）　宮原　清子（德島）　佐野　俊子（茨城）　相馬　巖雄（東京）　鳩山　彥一（高知）　今淺　信子（大阪）　井戸　春子（京都）　星夢（酒井原）　禮子（東京）　雨宮　美子（東京）　森　酒井　八郎（東京）　向田　軍六（長野）　行原　朝子（岩手）　早川　文夫（長野）　行田　春治（山口）　納村　三長（廣島）　伊澤　倫子（鹿兒島）　齋藤　蘭子（東京）　西川　泰（新潟）　御田兵太郎（高知）　野島　赤人（横濱）　今泉　雅子（福島）　花石　（以下次號）　山上　良夫（大阪）

讀者だより

▼みかんが色づく冬がまゐりました。諸先生を始め愛讀者の皆樣には御變りもないことゝ存じます。私は筑紫の村で平和に暮してゐります。震災の時はどんなにか皆樣は悲しい目に御會ひ遊ばしましたでせう。幸私は去年の秋こちらに參りまして此度の災難はのがれました。此頃燒けた東京はどんな有樣でせう。行つて見たいやうな氣がいたします。バラック等に御住ひの方はどんなにか辛いでせう。心から御同情いたします。金の星は毎月面白く拜見いたしてゐります。私は小さい方達がお作りになる童謠が大好きで御ざいます。金の星は、私の處で隨分はたらいてゐます。私達がよんでしまふと妹の組全體に廻つて讀まれてゐります。金の星がくると大騒ぎです。近所の小さい友達がよつてきて早く讀んで〳〵と。金の星はですからそれはいそがしふ御ざいます。けふ十一月號がとゞきました。美しい表紙、おもしろしい童話や童謠、それはどんなにか又皆さんを喜ばせることでせう。さうなると私は嬉しくてたまりません。どうぞ諸先生や皆々樣、時節柄御自愛遊ばしませ。

（筑紫の田舍にて 檜祥子）

▼或新聞に日本の子供の本はあまり童話が多すぎる。もうすこし科學の話等も入れたらどうだらう。と書いありましたが、自分もさう思つてゐました。日曜その他ひまな時、自分の家で出來る程度の科學の話、草や木の話を入れてほしいと思ひます。あまりむづかしくなりすぎると、子供の純な心を汚す心配もありませうが、すこし位なら反つて面白いだらうと思ひます。それからこれは頁の都合上やむをえないかもしれませんが、出來るだけ兒童の作品をあげてほしいと思ひます。今の我々にとつて、自分の作品、或ひは自分の學校の作品等が本に出てゐる程嬉しい事はありません。もう今年はこれでおしまひですね、一月號にはぜひ諸先生のお寫眞をかゝげて下さい。左樣なら、暴言多謝。終りにすみませんが野口先生のお所をお教へ下さい。（淺草 櫻井純三）

▽いろ〳〵と御配慮下さいまして有難うございます。こんどは思ひ切つて頁も豐富にしましたから、御希望はたやすく實現され得ると思ひます。野口先生は金の星の同人ですから御旅行の外は、いつでも小社に居られます。（記者）

▼樂しい時はなぜこんなに早く過ぎるのでせう。また一つ年をとらねばならぬかと思ふといやになります。なつかしい少女時代は、一刻一刻、削られて行きます。先生方は、もう新年號の御編輯でお忙しいでせう。豫告を見て、どんなに立派なものが出來るかしらと兄弟首を長くして待つて居ります。御身御大切に。「金の星」の爲、御奮闘下さいまし。（名古屋 大空夏子）

▼去る十一月十二日我部で開催しました童話大會には、御社の多大な御聲援に依りまして、空前の盛會を呈しました。輝いた數百の兒童の瞳を眺めた時、吾々一同は心から感謝の念に滿たされたのでした。今、御社の沖野先生は吾校兒童の憧憬的となつて居るのを折折、ものする彼等の作品に依つて知ります。御社の童話に對する立場も彼の日の午後の講話に依りまして、愈々はつきりして參りました。斯界に對して同じ見解のもとに、益々盡し度いと考へて居ります。此處に厚く御禮を申述べると共に貴社の益々御隆盛ならんことを祈り擱筆致します。

（山梨縣島崎校兒童學藝部）

▼廣イ廣イ大空ニ
キラキラ光ル金ノ星
世界中チ照ラス金ノ星
私ノ頭ノ記章ノ樣ニ
女神ノ冠ニスルト嬉イ

（京都市淨福寺通 九里常一）

▼金の星のお友達の皆さん！ 夢の壺といふ可愛いゝ子供のお本を御存じですか！ 御存じない人は早く申込んで下さい。直ぐ御送りします。一部十錢で無邪氣なものです。そして今皆さんの内に作品でも童謠でも歌でも作つたものがありましたら、すぐ送つて下さい。年をも書いて。

（石川縣大聖寺町弓町 夢の壺社）

▼一月號の南地實先生の「少年劍客鬼歌」は近頃にない立派な童話でした。堂々とした辯かさは流石に文壇の大家です。つづきが早くみたいものです。それから野口先生の「鼠の小母さん」は作曲と、繪と、三拍子揃つて新春の童謠界第一位の傑作と信じます。安價な直輸入的テンプラ童謠のヤタラに多い今日、飽く迄も日本國土の底の底から生れた野口先生の童謠は、日本の童謠として、日本詩壇が世界に誇り得る唯一のものと思ひます。切に御自愛あられんことを祈つて止みません。

（京都市上京區堀背人）

▼東京市の復興と共に御社の益々御發展の程お喜び申上ます。今度は小生の拙い作「弟戀しいほどぎすの話」を選にお入れ下され、しかも「一等」ほんたうによろこんで居ります。厚く御禮申上ます。葉山に轉地中に病床で書いたもので言葉なども練れて居りませんのを、其のまゝ出しましたのですから、少しも期待致して居りませんでした。今朝、書店で友から敎へられて始めて氣がついた次第です。全く今以て夢のやうな氣がされてなりません。これも動機に今後は一層、童話研究に沒頭したいと思つて居ります。尙、本所の拙宅は燒失いたしましたので、只今は市外下澁谷一九三二川田方に居ります。（中村信郎）

▼野口先生の「童話十講」は只いま御社に御ざいませうか。それから「青い目の人形」も是非ほしいと存じますが、二册共おありでしたら御知らせ下さいませ。早速爲替にて代金を御送りいたしますから。それから童話を作りましたが二百行以上になつてしまひましたが投稿してもよろしゆふ御ざいませうか。恐れ入ますが。御序での節、御しらせ下さい。（筑紫にてえつ子）

▽「童謠十講」は、上野の出版部で一册殘らず、すつかり燒けて仕舞ひました。原版も燒失してしまひした。けれども改訂普及版にし今春中に再び發行する手筈になつて居ります。尙、本所のお待ち下さい。「青い目の人形」は、これも深川の金の星印刷部で印刷最中な、日の目もまだ見ないうちに印刷部と運命を共にした次第なのです。併し此の方も復興の勢ひで再び着手いたして居ります。遲くも今春いつぱいには發行の運びに至ると思ひます。それから童話は二百行を少し位超えてもかまひませんが、相成可くばそれ以内にお願ひいたします。（記者）

▼永らく御無沙汰いたしました。御見舞狀も差上げず失禮な何とぞに落手致しました。早速お禮申上げればならぬ所、姉の死、祖母の葬式などにて思はず其まゝに打過ぎました。誠しからず思召下さい。恐ろしき震災のため、一物をも身につけず、今は親類の家にお世話になつて居ることゝ誠になさけなき身の上となりました。いづれ其の内會費御送付致したいと存じますから誌友名簿は、其儘にして置いていただきたいのです。またそのうち。

（横濱市西戸部にて 平井澤雄）

▽實に何と云つてお慰めしてよいか、その言葉に苦しみます。誌友、愛讀者、並に小社同人を代表して、茲に謹んでお見舞申し上げます。

（齋藤佐次郎）

▼こんど御社で新たに試みられた懸賞傳說童話募集は私共のやうな、無名童話作家をどんなにか喜ばせ、奮起さしたことでせう。社會敎化の上に缺くことの出來ない一つの重大な要素である兒童文學が日本に於ては餘りに閑却され過ぎて居ると思ひます。もつと一般的にならなければいけないと思ひます。御社が利害を離れての今度の企は、童話文學の發達上大いに意義あることと思ひます。今後もたび〳〵斯うした企の發表せられるのを切望してやみません。嚴選の勞をとられた沖野、齋藤野口、の三先生に深く感謝致します。末筆ながら殊の外優秀な作品を見せて下さつた一月當選者諸氏の御健筆を心から祈り上げます。

（東京市外青山 上原巻）

傳說童話一等當選者
（鵬作者）
村中信郎
懸弟選金三十氏

世界的の名作物語

◇一度讀んだ人も是非もう一度讀みたい名作◇

家なき子

三宅房子先生譯・寺内萬治郎先生裝禎並ニ挿畫

▽定價金壹圓卅錢 ▽送料金十三錢

四六判 本文二百十頁 挿畫入箱 美本 百七十葉 本文七十頁入

かつて『金の星』誌上に一年間にわたつて掲載され、熱狂的の大歡迎を受けた名篇『家なき子』が遂に壯麗無比の美本となつて現れました。親もなく、家もなく、旅役者となつて諸國をさまよひ歩く本篇の主人公の生ひ立ちは、讀者に如何に大きな感激を與へるでせう。讀者は必ず泣かずには讀めますまい。しかし、此の涙の中からこそ大きな人生の教訓を與へられるでせう。何人も是非一度は讀んで置かねばならぬ世界的名作です。

本篇は三宅房子先生が一ヶ年間の努力になつた二百七十頁にわたる長篇物語りで、美しい裝幀と十數葉の挿畫は共に寺内萬治郎先生の苦心になり、定價は例によつて獨特の安價で發賣になりましたから、賣切れぬ内に急ぎお申込み下さい。註文殺到してをりますから、賣切れぬ内に急ぎお申込み下さい。

沖野岩三郎先生著 **父戀し** ▽定價金壹圓 ▽送料十二錢

同 童話讀本 **赤い猫** ▽定價金九十錢 ▽送料十二錢

本居長世先生作曲 **人買船** ▽定價金六十錢 ▽送料四錢

同 **一つお星さん** ▽定價金六十錢 ▽送料四錢

東京市外一田端三五 振替口座東京九五五九六番 **金の星社**

懸賞創作募集

◆少年少女の創作◆

自由畫……山本鼎先生選
幼年詩……若山牧水先生選
綴方……編輯部選

〔注意〕課題は何でもかまひません。諸君の日々見たり感じたり、したことや諸君のすきなものを、諸君のすきなやうに畫なり、詩なり、文なりにしてかいてください。一人で何題出してもかまひませんが、姓名は學校や學年（または住所と年齢）とともにおとさないやうにして下さい。用紙は自由畫はなるたけ畫用紙に、幼年詩や綴方はなるたけ原稿用紙（または半紙）に書いてください。よく出來た方には『金の星』特製の賞品を差上げます。次號〆切は一月廿八日（その日後は次號へ廻る）發表は四月號、宛名は東京市外田端三百五十一番地金の星社。

◆一般讀者の創作◆

童謠……野口雨情先生選
童話……齋藤佐次郎先生選

〔注意〕童謠は十五行以内、童話は二十字詰二百行以内、優秀な作品は「推薦」または「特選」として發表いたします。推薦の場合は童話には五圓、童謠には二圓づつ、特選の場合は童話には拾圓、童謠には五圓づつ賞金として呈します。但し少年少女の創作童話にして『入選』の場合は『金の星』賞を呈します。締切、發表、宛名は少年少女の創作と同じです。原稿には必ず住所姓名を記して下さい。原稿はお返しいたしません。

定價壹冊金三拾錢送料壹錢
三ヶ月分三冊（送料共）九拾錢
半年分六冊（送料共）壹圓八拾錢
一ヶ年分十二冊（送料共）參圓六十錢
但し四月號九月號新年號は特別號で四十錢ですから、御註文の節はこの分だけ必ず加へてお拂込み下さい。

振替口座東京五九五九六番

〔送金〕▽御註文は必ず前金で御拂込み下さい ▽送金は振替が一番便利で御座います ▽切手代用は（壹錢切手）一割增しです

〔注意〕▽第何卷第何號よりと書いてください ▽住所姓名ははつきり書いてください

廣告料は御照會次第お答へ致します

大正十三年一月九日印刷納本（毎月一回）
大正十三年二月一日發行（一日發行）

東京市外田端三百五十一番地
編輯兼發行人 齋藤佐次郎

東京市小石川久堅町百八番地
印刷人 大橋光吉

東京市小石川久堅町百八番地
印刷所 株式會社博文館印刷所

東京市外田端三百五十一番地
發行所 金の星社

振替口座東京五九五九六番
電話小石川五三八七番

ほるぷ出版複刻版'83

雪のちらちらする朝も、
窓に小鳥のうたふ日も、
わたしはきつと忘れずに、
ライオンはみがき
を使ひます。
きれいな、やさしい櫻色、
ほんのりにほふなつかし
さ、わたしの歯は、だん
だん綺麗になりますの。

ライオン歯磨本舗
丸ビル一階